一般人以上、勇者未満

紅月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
一般人以上、勇者未満

【Ｎコード】
Ｎ７９９５Ｉ

【作者名】
紅月

【あらすじ】
ある日、ヴァダリア皇国にやってきたニミウス。彼の目的は魔王討伐に行くという救世主の仲間になることであった。だがそんな、夢と希望に満ち溢れた（？）彼の前に現れたのは、犯罪者として追われている少女で……。ハーレムもの、チートものにはならない予定。更新は超絶不定期。現在第３章連載中。

プロローグ

黒い穴に吸い込まれ、気を失っていた私はどこかで目を覚ました。薄暗い、私が立っている何かの文字が刻まれている床を中心として、四角く作られた建物。そして、私の目の前にいたのは一人の少女、それを取り巻くようにしている大人達。そして、彼女は私の方へやってきて微笑むとこういった。

「お待ちしておりました、救世主様」

は？

私は普通の学生で、私は普通に学校から帰ろうとしていた。目の前の穴を普通に避けようとしたらなぜか穴は普通じゃなく私を飲み込んで、意識がフェードアウト。気付けばここにいた。

で、救世主様。

話を聞いている限りだと勇者、の方がしっくりときそうな感じの説明を受ける。つまりは魔王が、という以下略をつけても話が通じるであろう説明。言葉やらなんやらはいろいろと術でどうにかなっているらしい。そして、目の前にいる私と同年代であろう彼女は私に尋ねた。

「救世主様の、お名前は？」

「私の、名前は――――。」

名前を告げると彼女はいい名前ですね、とにっこりと笑って言った。彼女は巫女ではなくただの皇族だそうだ。皇族という時点で、ただの、ではないだろうけれど。巫女に呼ばれたわけではなかったとすると、誰がこの世界へ私を送り込んだのか。彼女は巫女ではな

いけれど、国の命令で、自分が召喚したと言っていた。帰る方法はない、らしい。

これから起こるであろうことに、私は異論を起こす気も起きなかった。

それから、三ヵ月後――――。

プロローグ（後書き）

「作者が空気読めずに連載二作目を始めましたー」
『この作品で、はじめましての人は、はじめまして』
「ボクらは後書き任されてる人たちでっす」
『テンション高くない？』
「いやね？涼の話がおわったら正々堂々と名乗っていいって言われてるのに涼の話、終わってないじゃん。名乗れないまま二作目の後書きも任されるってのが癪に障るんだよねー。で、そのイライラをテンションにぶつけてみてる」
『そう。で、作者からこの作品の注意書きを預かっているわ』
「何々？

・この作品の更新は非常に不定期になる予定ですので、涼の更新がされた際にでも確認してください
・この話は最近はやり（？）の主人公が最初から最強な話ではありませんので、地道に強くなっていく設定が嫌な人は我慢して読んでください
・また、この話は最近はやり（？）のハーレムものにはならないので、かわいい女の子ｏｒかっこいい男の子に囲まれている主人公に嫉妬しながら読む必要はありません

うん、いつもどおりの作者だ。意味が分からない」
『確かに、いつもどおりだけど・・・。二つ目の注意項目、何？我慢して読めって言ってるけど読まなくてもいいじゃない』
「そもそも、この話のあらすじだっけ？あれひどいと思わない？（予定）ばっかりじゃん。そもそも作者、いまテスト期間だし。ほんと何考えてるんだろうね」
『何も考えてないんじゃない？』

「むー。そうかもしれないから何もいえないね。というわけで、今回はここまで
この作品でも、感想、メッセージ、お気に入り登録、評価、あと指摘などお待ちしております」
『もしもこの続きが読みたくなったら催促のメッセージでも送ってみてください。ひょっとしたら投稿するかもしれません』
「その言い方だと催促があるまで投稿しないみたいだね」
『まぁ、催促がなくてもいつかは更新するでしょうけど、ね』

1－1　不運と人生の先輩からの忠告と追いかけっこから

三ヶ月前、救世主を召喚した国、ヴァダリア皇国。国は、救世主を召喚した際に国の内外を問わずお触れを出した。曰く

異世界より召喚した救世主とともに魔王を倒すたびに出てほしい。

三ヵ月後、皇国首都にある皇宮にて審査会を開く。

というもので、この世界には不慣れな救世主の手助け、及び戦闘における共闘といったことができる人材がほしいということだ。

ある者は救世主と戦うことを夢見て、またある者は魔王を倒すという栄光に酔いしれ、またある者は報酬と皇国内での確固たる地位を求めて首都へとむかった。この物語の主人公である”彼”もまた目的を持って救世主とともに旅をするべく首都へやってきた一人だった。お触れのせいか、もともと首都に住んでいなかったような姿の—鎧を着ていたり、剣を持っていたり—人が首都に入ってすぐの大通りに多くいる。

首都は皇宮を中心とした円に近い形をしており、回りをぐるりと砦で囲まれている。砦自体は昔からあるもので、北と、南には首都に入るための門がある。門から皇宮へは大通りがあり、大通りもまた、皇宮を中心として東西南北に四本ある。それぞれの四本を繋ぐようにたくさんの路地も存在している。大通りから外れても適当に歩いていればいずれかの大通りに出るので迷う人はほとんどいないという。

首都、なだけに貧民街はないが、貴族が住む貴族街はあり、首都の西側がそこだ。そのためか、西の大通りにある店が扱っている商品は他の大通りのものとは質が違うらしい。とは言っても、それに手を出せるのはそれなりのお金が必要なため、平民が手に入れるのにはかなり骨が折れるのだが。

その大通りではもともとある店とは別にマジックアイテムや武器、防具などを取扱う露店も出ている。大通りではないがある程度の太さのある道でも、薄暗い路地でも然りだ。

かつてないほどの賑わい。

それが人類の危機である魔王による魔族の侵攻であるというのが残念ではあるが、だが、いま、この賑わいは、否、騒がしさはそれだけではなかった。

お触れに寄せられてやってきた猛者たちとは別に皇国兵が神経質に二、三人でグループを作り巡回している。

何でも、皇宮に泥棒が入ったそうだ。

容姿は黒髪、黒目で、この国ではさほど珍しくもない普通の見た目だ。髪が長かったことから女ではないかと言われている。ちなみに、何を盗んで行ったのかは国民には知らされていない。そもそも、泥棒の話も公にはされていないのだが、そこは、まあ壁に耳あり、扉に目ありで、まことしやかにささやかれている。

皇国兵のひとつのグループが首都の入り口である門で容疑者が通ったかどうかを確認しているが門番は入ってくるやつばかりで、出て行った者などはいないと答える。そこにフードマントをかぶった一団がやってきた。門番が名前と顔を確認し、通過を許可した。その光景を裏路地の方から見ている影が一人分。

舞台に登る役者が、そろった。

さぁ、第一幕の始まりだ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「これこれ、そこの若者よ。」

彼は老婆に声をかけられた。

顔にはしわがより、腰を曲げ、ひとつに束ねたそれなりの長さが

ある髪の毛は真っ白だ。声をかけられた若者は振り向き、声の主が自分よりもずっと背の低い相手だと分かると身をかがめ、目線を老婆に合わせる。

「なんだ、ばーさん。」

「おぬしは救世主様に会いに来たのであろう？」

「まぁ、そうだけど。」

「ふむ、おぬしの顔に出会いの相が浮かんでおる。おぬし、ここからしばらく行ったところにある酒場『熊酒』に行くといい。そこで、入り口から三つ目のカウンター席に座るとよかろう。」

そこで若者は腕を組み、考える。

世の中にはいろいろなものを『視る』ことができる人たちがいるが、そういう人たちには総じて、雰囲気があるといわれている。老婆の見た目はどう見てもそういう雰囲気のある占い師のものではないし、老婆自身からもそういう雰囲気は感じない。半信半疑どころか無信全疑といったところだろうか。

「いいことが起こるのか？」

「少なくともおぬしの望みへの足がかりにはなるじゃろうて。ああ、そんなに怖い顔をするでない。わしはおぬしの望みなどは知らん。ただ、そうなるだろうことが分かるだけじゃ。」

若者が自分の望み、と聞いて顔を変えたのを見て老婆があせる。

「ふーん。変わったばーさんだな。ま、いいよ。審査会までまだ日があって暇してたし、ちょっくら行ってみるよ。年長者の意見は聞けって言うのは昔からよく言うしな。」

「うむ、達者での。」

このときのその若者は確かに暇つぶしのつもりだった。

しばらく行くと『熊酒』に到着する。

彼はこの国の言葉が読めるわけではないがかわいくデフォルメされた熊が蜂蜜の入った壷ではなく、酒瓶を抱えほろ酔いになっている看板を見ればここで間違いないことが分かるだろう。老婆に言われたように店に入りカウンター席の入り口から三つ目に座り、適当な注文をする。そこに声をかけられる。

「お兄さん、変わった、というか珍しい格好をしてますね。」

「ん？　ああ、おかげでこの国じゃあ少し目立つかな。」

相手は若者よりも先に店に入っていた少女だった。年のころは若者よりも若い。肩よりも長い髪を片方によせ、高い位置で結んでいる。着ている服はこの国の国民ならば誰もが着ているような伝統衣装のようなもので、黒髪、黒目というこの国ではいたって普通の容姿の少女。ただ、彼女のつり目と、その目に宿る強い意思は若者に強い印象を与えた。

対する若者の見た目は銀の髪に青い瞳。彼の昔の友人曰く「月色の髪と深海色の瞳」らしい。この国では多くはないがそれなりにいるような見た目ではあるが、黒髪、黒目の人口が圧倒的に多いこの国では彼の見た目は結構目立つ。だが今はお触れのせいか他にも自分のような、とはいかないものの目立つ容姿をしている者はいるので、彼の少し異質な容姿も割と溶け込んでいると思う。

注文した品が若者の前に置かれる。ただの水割りだが彼はそれを一気にあおるでもなくちびちびと飲む。それを見た少女は、若者が暇だと思ったのか、いろいろ話しかけてきては若者の返事を待つと言ったアプローチを始めた。若者も実際、暇だったので少女の話に相槌を打ちながら水割りを飲む。

平穏な暇つぶしの時間。少女はしゃべるだけしゃべり、若者は相槌を打って時間を過ごす。

「お兄さん、この国の人ではないみたいですし、救世主様に会いにこられたんですか？」
「ああ。」
「魔王を倒すためにですか？」
「倒す、と言うか……。まぁ倒す、で間違ってはいないんだけどな。」
「？　よく分かりませんが……お兄さんは強いんですよね！！」
「何でそんなことを言うんだ？」
「だって、今のこのご時世に、一人でここに来るなんてすごいことですよ？国が出したお触れのせいか、救世主に強力な助っ人がつかないようにとこの首都に向かってくる人たちには魔族が襲撃をかけている、と噂で聞いてますよ？
　ここにたどり着くまでにいくつもの鎧を着た死体を見たって言う人がいっぱいいるみたいですよ。それとも実は連れがいらっしゃるのですか？」
「いや、いないが……。」
「ならやっぱり強いんですね。すごいです！！」

　実際、若者は首都につくまでに魔族に襲われた思い出でもあるのか、少し遠い目をしている。少女は若者の返答を受けて尊敬の念がこもったような目で若者を見つめ話を続ける。
若者からも、彼女に質問する。

「お前は、旅人なのか？」
「いえいえ、生まれも育ちもこの首都です。ですが、旅に出たい、とは思っています。魔族が徘徊していて多少怖いですが、今がちょうどその時ではないかと思っています。」
「救世主の審査会に出てはみないのか？」
「あたしのような未熟者が出ても結果は分かっていますから。」

そう言った少女の荷物はおそらく術のかけてあるものなのだろう。彼女の持つ肩掛けのバッグはどう見ても容量的にありえない量が入っていると思わされる程の大きさをしている。そういうバッグは結構高い値段で取引されている。

予想以上に盛り上がる会話。そしてある程度の時間がたつと別れて、それだけで終わりのはずだった。そこに”彼ら”がやってこない限りは。

少女が席を立とうとしたとき、彼ら―フードマントを着た一団―はやってきた。そして、カウンター席ですっかり空になったグラスをいじっている若者を指差した。

「見つけたぜ!!　この裏切り者!!」
「なんで、ここに――――。」
「はっ、おまえのやりたいことを知ってたらここに来ることくらい予想できらぁ!!」

あせる若者と、その若者を囲むように移動する一団。なぜか少女も一緒に囲まれる。若者ははじけるように立ち上がり、少女も不穏な空気を感じ立ち上がる。

「すみません。あたしはこの人と話していただけで貴方たちに囲まれる理由が分からないんですが。」
「おまえはこいつと話をしたんだろ?仲間じゃないのか?」
「ちがいますよ。こちらのお兄さんとは先ほど出会ったばかりです。」

少女の至極まっとうな意見を彼らの一人が理不尽とも言える理論で叩き潰す。そして、都合の悪いことは連鎖する。

1－1　不運と人生の先輩からの忠告と追いかけっこから（後書き）

「約十日ぶりの更新です」
『更新する側にとっては十日は割りと短かったみたいだけど更新を待っていた皆さんとしてはどうなんでしょうね？』
「紅月は2日間くらい更新してないと「まだ更新しないのー」って言うよ？」
『なら、この十日間は読者にとっては長かったのかしら？』
「紅月曰く不定期更新だとはじめに言ってあるからいいんだって」
『さて、話は変わるけど今回は王道ファンタジーものなのかしら？』
「紅月の中では一応ストーリーができてるけど、流れだけを見たら王道かもしれないけど設定は王道かと問われたら分からないみたいだよ？」
『でも、早速主人公がピンチになってるみたいじゃない』
「そこはほら、次の話で助かるんじゃないの？」
『王道ね』
「それにこの話って主人公二人いるし」
『ネタばれじゃない』
「そして紅月がテスト終わってテンション上がっているのでこのあともう一話投稿します」
『話を書き上げるまでにどれくらい時間がかかるかは分からないけど。
感想、メッセージ、アドバイスなどお待ちしております。
あと、失踪の方のキャラ紹介がいるかどうか、というアンケートの回答もお待ちしております』
「それではまたあとで」

1―2

緊迫した空気。若者は一団の向こう側にある扉からどうやって逃げ出そうか考えていた。ここにいる無関係の人たちは巻き込みたくはないものの、彼を追ってきた一団の実力を考えるとそれは難しいだろう。だが、せめて、自分とたまたま一緒にいただけの少女は逃がしてやりたいとも、考えていた。

一団はどうやって若者を捕らえようかを考えていた。しばらく前に、彼らを裏切っていった若者を一団は許す気はなかった。ただ、彼らのボスが殺さず、捕まえて来い、というから殺さないように気をつけようとは考えていた。若者の実力を考えると、厳しい条件だろうが、他人に甘い若者なら、この状況だと手加減をするだろうと踏んでいたし、また、若者を殺せないのなら、少女を殺そうとも考えていた。おそらく、少女自身の言うとおり、たまたま居合わせただけなのだろう。運が悪かったのだ。あきらめてもらおう。

少女は少女で、どのようにして無関係を主張するかを考えていた。もしくは逃げようかと考えていた。だが、彼女は圧倒的に実戦経験がないことを理解している。特に相手が多い時の対策など、皆無と言ってもいいくらいだ。方法がないこともないが、それをすることにはためらいがあった。だが、先ほども言ったように都合の悪いことは連鎖する。

扉が開いて入ってくるのは皇国兵だ。巡回の途中なのか、三人が入ってきた。一団はそれに気付いた、若者は長身であったために一団の向こうもかろうじて見えていた。だが少女は誰が入ってきたのか分かっていなかった。彼らは騒ぎを見て、その中心にいる人物、特に少女を見て驚いた声を上げた。急いで、何か書かれた紙を取り出し、何度も少女の顔と紙を往復して声を上げた。

「お前は急いで仲間に連絡を！！　侵入者を発見したと！！」

侵入者、皇宮に侵入して盗みを働いたやつのことだろう。一人はばたばたと外へ駆けて行き、残った二人が包囲網に加わった。

「お前……。」
「あー、都合悪いことになっちゃいましたね。」

少女は頬をかきながら困ったように笑った。このとき、少女の中でためらわれていた方法が実行に移されることが決定したのには、誰も気付かない、気付いていない。気付けていたらすごいのだけど……。一団の一人が状況を理解したらしくにやりと笑い、そして兵の一人に言った。フードをかぶっていない彼の髪の毛は金色に輝いている。それだけで、彼がこの国の人間でない可能性が高いことを示している。

「兵隊さんよぉ。」
「なんでしょうか？」
「実はあの男の方なんだけど、あんたらが追ってるやつと仲間みたいなんだよ。」
「ふむふむ。」
「俺たちがちょっと男の方に用があるから、捕まえるのに協力してやろうか？」
「なっ！！」

驚いたのは若者の方だ。当然、少女が先に主張したように、若者と、少女は仲間ではない。つまり、一団は嘘をついたのだ。だが、若者は一団の性格を、気質をよく知っている。狡猾な手を使うものの、最後の締めは必ず自身の手で行う、というものだ。そんな彼らだ。追い詰めるところまでは他人の力を借りたとしても、捉える際には自分たちの力のみでやるものだと思っていた。ゆえに、まさか、

一団がそんな提案をするとは思っていなかったのだろうか、その顔には焦りしか浮かんでいない。兵はどうやらそれを了承したらしい。相手は訓練された兵と、若者を追ってきた連中。こっちは若者と、実力未知数の少女。そしてその少女は先ほど考えた方法を実行すべくさりげなく若者に近寄ると手を前に突き出した。

『集え、風よ。形成（カタナ）すは竜巻!!』

魔法、魔術とも呼ばれるものを少女は発動させる。

手から放たれた竜巻が前方にいた一団の半分以上と兵二人を巻き込んで、酒場の壁を突き破った。幸いなことに客が巻き込まれた様子はなかった。呆然としている後方の客と、店主。少女が若者を助けたのには理由があったが、それ以上の理由は？ただなんとなく？だった。もしも、少女が若者を助ける気が、というか、理由がなければ彼女は彼を巻き込むようにして術を発動していただろう。

「なに呆けているんですか!!　逃げますよ!!」

「ちょ、えっ？」

衝撃で吹き飛ばされたのか、兵や、一団の中に立っているものはいない。その隙に少女は若者の手を引いて逃げ出した。

少女に手をひかれて逃げ出す。どうやらまだ追っては来ないようだが、いずれは追ってくるだろう。裏路地に入り、喧騒から離れる。途中、何度か兵と鉢合わせになりそうになったが少女はすべてかわした。

「何とか、逃げ切りましたね……。」

「ああ。」

少女は息切れしながら、若者に話しかける。若者は呼吸をまった

く乱してはいない。きっと鍛えているのだろう。

「でも、お兄さんも、追われていたんですね。」

「俺はお前が追われていたことにびっくりだよ。」

「まぁ、それは置いといて、とりあえず、お兄さんの宿に向かいましょう。話は、それからです。」

そういうと少女は若者に案内を求める。若者は頭を抱えたくなった。この少女を連れて歩くということは、それすなわち若者に降りかかってくる火の粉が倍ほどになるということである。

「何でお前をつれて宿に行かないといけない？」

「理由はいくつかありますけど。ひとつ、お兄さんは目立ちますから先ほどの人たちはお兄さんの容姿から宿屋で待ち構えている可能性があります。今ならまだ待ち構えていないでしょうから今のうちに戻って部屋を引き払った方が賢明でしょう。ふたつ、どうやらあたし達は仲間だと思われているようですので、もしも見つかった時は皇国兵と先ほどの一団を相手にしないといけなくなります。一人ではどうしようもありませんが、二人ならまだどうにかなると思います。こう見えてもあたしは結構、魔法、得意ですよ？」

息を整えながらの少女の回答に間違っているところがないと思った若者は仕方なく宿屋へと向かう。幸いなことに、まだ追手はきていなかった。急いで荷物を整える。荷物を整える、と言っても少ししかないのですぐに済み、宿を引き払った。

「これから、どうする気だ？」

「どうしましょうか……。とりあえず、首都を出るのは確定ですね。」

少女の言葉は予想を裏切らないものだったが、若者にショックを与えるには十分なものだった。

「それじゃあ、困る！！」

少女はもともと、首都から出て行くつもりだったのだからどうでもいいのかもしれないが、若者はある理由、目的のためにこのヴァダリア皇国の首都へと来ている。その理由は救世主とともに魔王を倒しに行くことだ。内緒ではあるのだが、実は、別に救世主と一緒である必要はない。だが、一緒であるほうが何かと都合がいいだろう、という考えがあってこの国に来ているのだ。それにはもうすぐ行われる審査会に出ないといけない。今首都を出てしまうと、審査会に出れなくなってしまう。

「でも、どうするんですか？お兄さんの顔は間違いなく兵達に覚えられたでしょうし、お兄さんがそのまま行ってもお尋ね者の仲間としてすぐに捕まえられてしまいますよ？」

「だが……。」

若者はよほど、救世主の仲間になること、否、審査会に出ることにこだわっているのか、なかなか了承をしない。それでも、渋る若者を見ていた少女は何を思いついたのか、明るい顔をして手を合わせた。

「そうですよ！！　じゃあ、あたし達でやりませんか？」

「何を？」

「魔王退治をです！！」

ぽかんとする若者。少女はうん、これは名案だと言っては何度も首を縦に振っている。若者にずい、と顔を近づける。近すぎる気も、

しないではないが、そこは、まぁ、若者と少女の身長差。……何というか容姿の違いはあれど、おねだりしている妹とされている兄、のような構図になっている。

「お兄さんの目的は”救世主様”や”名誉”や”地位”や”お金”じゃないんですよね？魔王を倒すことなんですよね？」

「あ、ああ。そうだけど。」

「なら、それでいいじゃないですか。あたしも魔王退治に行こうと思っていたんですよ。仲間ができてよかったです！！」

そういうと少女は歩き出した。若者は何かを言おうとしたが諦めた。少女のあの強い意志の宿った目は絶対にその意思を曲げないであろうことを若者は本能というか直感で理解していた。本当は、「審査会に出る自信のないやつが何を言う」とか、「まだ、仲間になるなんて言っていない」とか言いたかったのだけれど、後者はともかく、前者は少女の立場（お尋ね者である）ということを考えるとしようがないのかもしれないが。

だから、言いたいこととはまた別のことを、若者は聞いた。

「名前は？」

「え？」

「名前。これから一緒にいるんなら知らないと不便だろ？」

若者にそう言われ、少女はしばらく悩んでいた。

「そうですね。いっそのことお互いに名前を知らないというのもなかなか面白そうだと思いましたけど「お兄さん」と呼ぶのも他人行儀な感じがしますね。では、私はナギといいます。字は……。」

面白い、のか？それは。彼にとっては名前が分からないと呼ぶと

きに不便なので、たずねただけではあったのだが、そんなくだらないことで悩んでいたのか、と思いながら若者は少女、ナギの言葉をさえぎった。

「ああ、いいよ。俺、字は分からないから。」
「……お兄さんは言葉、話せてますよね？」
「ん、まぁ、そういう術をかけてるからな。」
「それはとても便利そうですね……。今度教えてくれますか？」
「ああ、いいぞ。」
「それで、お兄さんの名前は？」
「ニミウスだ。」
「ニミウスさん、ですか・・・。字が分からないとも言っていらっしゃいましたし、別の国のお方ですか？」
「ああ、あと呼び捨てでいいぞ。」
「いえ、ニミウスさんと呼ばせていただきますよ。さん付けは癖のようなものですから気にしないでください。それに、ニミウスさんの方が年長者でしょうから、最低限の敬意というものです。」

若者、ニミウスは呆れたようにため息をつき、あきらめたように。少女、ナギは意地悪く、これから起こるであろうことに期待を膨らませながら微笑むと、とりあえず首都を出るための作戦を考えるべく話しながら歩いて行った。もちろん、人通りの少ない裏路地を選んで。

1－2（後書き）

『この作品では〇（章）－〇という形式で各話にタイトルがついているわ。サブタイトルが入るときはその章の始めだけになるわ』
「解説どーも。さて、これは早速王道を外れたことになるのかな？」
『さぁ、どうなのかしら？』
「でも、一日に二話投稿とか紅月もよくやるね」
『テストが終わったからこその偉業のようよ』
「ふーん。そうそう、勇者未満は単話なんて書かずに、直接書いてるから、一部おかしなところが出ていたりするかもしれないからそういうところがあったら指摘お願いします。」
『話の中ではニミウスにさえぎられてるけどナギの字は』
「わーわーわー！！それ言っちゃだめだって！！世の中言ってもいいネタばれといっちゃいけないネタばれがあるんだからそこは空気読んでよ！！」
『・・・悪かったわね』
「ふぅ。なんか話すこともないし今回はここまで
この作品でも感想、評価、アドバイス、指摘といったものを受け付けております。
思いついたことからじゃんじゃん送ってください」
『あと、テストが終わったからと言ってもこの作品は不定期更新のままですので』

1―3

「では、さっそくミルフィアへ行きましょう。」
「どうしてだ？」
「それはですね。ミルフィアに登録するといろいろと得するからです！！」

依頼取引施設では、誰でも、報酬を条件に仕事を依頼することができる。施設へと出された依頼は、施設及び、依頼を統括しているミルフィア、という組織に登録されているメンバーが依頼を受ける形で処理される。依頼を統括しているのがミルフィアなため依頼取引施設のこともミルフィア、と呼ばれている。

もちろん、依頼というのにもいろいろあって、探し物やら、草むしりといったボランティアレベルのものから魔物の討伐、盗賊の捕縛といった命のやり取りをするようなレベルのものまでさまざまであり、ランクわけされている。ランクはあくまでも目安でしかないが、ミルフィアが勧めているのは本人のランクと同じか、それよりも一つ上程度である、が依頼を受けるのは個人の自由であるため実はいくらでも高ランクの依頼を受けることができる。

ちなみにランクは星一（シングル）から始まり、星二（ダブル）、星三（トリプル）まで、そしてその上に月（ルナ）、太陽（フィア）があり、五段階となっている。

受けた依頼を達成した時はミルフィア登録時にもらえる指輪を各支部で提示すれば何処でも報酬をもらうことができるようになっている。

「以上がこのミルフィア登録における説明ですが、よろしいですか？」

目の前の女性が（おそらく営業用の）笑顔でたずねてくるのを聞

き、ニミウスたちは頷いた。互いに、名前だけの自己紹介をしたあとにここ、依頼取引施設（ミルフィア）へとやってきたのだ。

ミルフィアに登録することは実は結構大きな特典がある。依頼でお金を稼げることではなく、過去の経歴を問わないというものだ。

ミルフィアでは、腕が立つのであれば誰でも、あるいは腕が立たなくても登録ができ、その時に身分証明の形として、ミルフィア所属の証として指輪をもらう。この指輪はつたが絡まったようなデザインをしており、なかなかこった装飾をしている。見た感じはただの指輪なのだが特殊な術がかけられており、それで、個人識別までやってくれる。指輪は身分証明になるため、各国にある関所のようなところはフリーパスとなる。

そして、この指輪を持っていると犯罪を犯さない限りはミルフィアの庇護下にいることを表している。このときの犯罪というのはミルフィア登録後に犯したもののことであり、それ以前のことは一切問われないのだ。

まぁ、登録後に犯罪を犯すとミルフィアの腕の立つ方々が始末に来るので登録後に犯罪を犯すやつというのはめったにいない。逆に、登録前に犯罪を働き、ミルフィアの庇護下に入ることで権力からの追求から逃げる者はたくさんいるらしい。例えば、いま、ニミウスの横にいるナギのもその中の一人だ。

「では、こちらの紙にお名前を書いてください。」

「名前だけでいいんですか？」

「ええ」

質問に答えてもらったナギは紙に名前を記入する。ナギ、とカロンの文字で書く。

カロンというのはヴァダリアと隣り合った国のことだ。カロン王国というこの国の細かい説明はおいといて、この世界での公用語はカロンの言葉で、もとは妖精族や、竜族などが使っていた言語を人

が使い出した。そして人がその言葉に対して文字を作り、今度はそれを妖精族たちが使い出したので世界中に広まり、基本的に重要な証書などの類はすべてカロンの言葉で書かれている。ヴァダリアではまったく別の言語が使われてるのだが、そこも、まぁ、今は割愛しておく。

「ナギはカロン語が書けるのか？」

「？ええ、家の事情で教えられましたから。一応、会話もできますよ？」

カロン語を覚えさせられるということはそれなりの家の出なのだろうか、とニミウスは推測する。互いに素性は明かしていない、名前だけだ。カロン語を使えるなら、ニミウスが言語解析の術を教える必要がないんじゃないかと言おうと思ったのだろうが、今はミルフィアへの登録の方が先なので、ニミウスもカロン語で名前を書き、提出する。ちなみに二人ともフルネームではないのだが、受付の人はその紙を受け取り、奥へ行った。しばらくして、指輪を二つ持ってくる。どちらも同じデザインの、つたが絡まったような感じのする指輪だ。

「では、こちらがミルフィア所属の証となる指輪です。登録は無料ですが、この指輪をなくされた際には十ギリアム払っていただきます。」

ギリアムは金貨のことだ。１キルが銅貨一枚で、百枚集まって銀貨一枚の１ミルア。銀貨百枚で金貨一枚の一ギリアムとなっている。

十ギリアムはだいたい星三（トリプル）の依頼報酬の平均よりも少し高いくらいなので、星一（シングル）（依頼報酬１キル～１ミルア程）である今の状況で無くすと結構、どころでなく、かなり大変なことである。この通貨単位は全国共通である。

「それと一定期間の間まったく依頼を受けられない、となりますと指輪を持っていらしてもミルフィアのメンバーとは認められなくなります。一定期間依頼を受けられない場合はあらかじめミルフィアに連絡をお願いします。もしくは一定期間後に受けられなかった理由を提示してください。それらがない場合には再登録をお願いします。再登録は個人の自由ですが、その時にはお金がかかります。」

「一定期間とは、どのくらいなのですか？それに、連絡はどのようにするんですか？」

そう聞いたのはニミウスだ。再登録はできても、お金をとられるというのがあまり気に入らなかったようだ。

「一定期間は秘密とさせていただきます。連絡は指輪をミルフィアに届けていただければ、それを一時的に預かる、という形で指輪の持ち主を休業扱いにさせていただきます。」

話を詳しく聞くと、一定期間を利用したずるいやつがいたらしいので、それ以来一定期間については公表しないそうだ。何をしたかというと、期間ぎりぎりまで、依頼を受けず、ぎりぎりに簡単な依頼を受けて、ミルフィアの恩恵を受ける、というものらしい。確かに、ずるい。

「それと、立ち寄った町や村で依頼取引所（ミルフィア）がありましたら必ず立ち寄ってください。受付に声をかけていただきますとその周辺の宿を安く借りることができます。割引率はランクによって変わりますが…星一（シングル）ですと五分引きで、太陽（フィア）ですと無料になります。」

最後に受付の女性はそう言って締めくくった。

「どうする？早速依頼を受けるのか？」
「いえ、目的は登録だけです。もしも依頼を受けるなら首都を出てからにしましょう。依頼を受けたことで変に足止めを食らってしまうのはよくありません。」
受付から離れたところで話し合い、首都脱出方法を考える。
「やはり一番厳しいのは、この時期だという事でしょうね。今は救世主様目当てで首都に”入る？人ばかりで”出て行く？人はほとんどいませんから、普通に出て行こうとすると簡単に見つかってしまいますね。
それに、いくらフリーパス、と言ってもさすがにこの国では無理でしょうね。」
「そりゃあ、国家が追っている犯罪者だからな、ナギは。
それよりも本当にこの国を出ないといけないのか？…俺としてはやっぱりまだ審査会への出場を諦めきれないんだが。」
「諦めてください。やはり移動するとなると夜ですね。それも早いほうがいいでしょう。あたしが首都から出たという情報はまだないでしょうし、ニミウスが宿にいないのはそろそろ気付かれているころでしょう。なら変に守りを固められる前に突破しましょう。」
ニミウスの未練をばっさり切り捨てるナギ。やはり、彼女は（当然だが）捕まりたくないのだろう。出て行くことを最優先にしているので、残りたい、というニミウスの意見は聞き入れることができないらしい。てきぱきと計画を立てて行く彼女を見つつニミウスは質問した。ちょうど、彼女は砦の上の見張りの交代時間や、その配備位置についての説明をしていた。
「なぁ、何でそんなに警備体制とかに詳しいんだ？」

ニミウスとナギの前に広げられているのは首都全体を書いた地図。ナギはそこに説明をしながら通る予定の脱出経路に印を書き込んでいた。

「え？知人に詳しい人がいまして、その人に教えてもらったんですよ。」

ナギは少し動揺しつつも答えた。その動揺を怪しみながらもニミウスはけっきょくナギの話に耳を傾けた。先ほどの一団に見つかった時から、彼の中では一団から離れるために首都を出ようとする気持ちと、首都に残りなんとしてでも救世主の仲間になりたい気持ちの二つがせめぎあっていたのだがここまでくると、もう首都脱出しかないと思ったのだろう。

一方のナギは内心ひやひやしつつ計画をニミウスに話した。変わった人だと、出会った時から思ってはいた。見た目が、ということもあるが、見た目のわりに幼い、といえばいいのか、見た目のわりに大人だと言えばいいのかがよく分からない。だがカロン語のことといい、今のこととといい、そんなことを無視しても妙なところで鋭いのだ。

気付かれてはいけない、知られてはいけない。そう心の中でつぶやき、計画を話し続けた。

二人が依頼取引所（ミルフィア）を出たのは日もとっぷりと暮れたころのことだった。

1－3（後書き）

「今回は説明が多かったね」

『じゃあ、ちょっとまとめましょうか？

・依頼取引所（ミルフィア）

他の小説ではギルドと呼ばれることが多いと思うわ。

・キル、ミルア、ギリアム

お金の単位ね。順番に銅、銀、金貨。百枚ごとに単位が変わるわ。

・カロン王国

ナギたちがいるヴァダリア皇国の隣にある国ね。

今は単純だけど、こんなものかしら？』

「それでいいと思うよ。

次回はいよいよ首都脱出！！ナギたちは無事に出ることができるのか？」

『この作品では評価、感想、アドバイス、指摘、メッセージ、お気に入り登録など、何でも待っています。ので、ぜひぜひよろしくお願いします』

「それと、失踪の方にキャラ紹介がほしいかっていうアンケートにも回答お願いします」

1―4

さて、門を通らずに首都から出ようと思うならば砦を超えていく必要がある。この砦の上部には見張りが常に立っており、魔物の襲来や、首都内での火事といった目立つ災害に目を光らせている。夜は魔物たちの活動が活発になるので、一時も気は抜けないため、見張りにはほぼ死角がないようになっている。

「それだけすごい見張りですが、まずは砦の上に行けないと意味がありません。さすがに、砦内部にある階段の出入り口を使うのはいざ見つかった時にはさまれたりすると危険なので使えません。」

「じゃあ、どうやって砦を越えるんだ？」

「こうやるんですよ。『集え、風よ。形成（カタナ）すは球。』」

ナギの詠唱によってナギの周囲に風が集まる。さらに、ナギの体が浮かぶ。さらに体が上下に移動し、自由自在に移動する。ちなみにここは、路地裏。彼らは現在、突破ポイントの近くにいた。すぐ隣は砦がある。夜になっており、ちょっと大通りの方に目を向けると、そこからは楽しそうな、にぎやかな喧騒が届いてくる。しかし、ここは、静かで、明かりも無いため、真っ暗とはいかなくても、暗い。

そして魔法による浮遊。というのがナギの示した方法だった。だがしかし、これには実は問題があった。実は――――。

「俺は風の魔法は使えないんだが……。」

そう、ニミウスは風系の魔法が使えなかった。属性は大きく分けて四種類ある。本当はもっと細かいのだがたいていの人が四種類の内一種類は使える。地、水、火、風のことだ。ナギは囲まれた時に

突破するのに、今も風を使っていることから風属性が得意なのだろう。ちなみにニミウスは炎を使える。さらに細かい属性は今は置いておくが。

「そうですか……。そういえばニミウスさんは魔法使いですか？剣士ですか？」

「剣士だよ。ある程度でよければ魔法も使えるけど、近接距離の方が強いよ。そう言うナギは？」

「あたしは魔法使いですよ。」

魔法使いと剣士は正確な区分がされていない。魔法が使えても近距離の方が強ければ剣士と名乗っている人もいる。この区分はその人により強くなれば強くなるほど二極化していくか、あいまいになっていくかである。

「では、そんなニミウスさんに提案です。」

「なに？」

「あたしは砦の上といった狭いところで戦うのは苦手ですので砦の見張りを倒してくれませんか？　かわりに、というと変ですが砦の上まで運びますよ。」

「分かった」

そう言うニミウスの顔はどこか浮かばない。国の兵に手を出すのが嫌なのか、それともまだ、首都の外へ出ることが嫌なのか。おそらく後者だったのか、ニミウスは最後の悪あがきに出た。

「門から出ずに首都から出るのってやばいんじゃないの？」

「いえ、ここで重視されているのは入るときだけです。よほどの犯罪者がいない限り出ることは簡単にできます。ただ今回はよほどの犯罪者がいますから……。」

ニミウスを巻き込んだ後ろめたさがあるのか、ナギの顔は少し暗い。そこで、ニミウスは気になっていることを聞いた。

「何を、したんだ？」

「え？」

「お前は、何をして追われてるんだ？」

ナギの顔が強張る。それは、まるで、何かに恐怖しているようなものだったが、暗かったため、ニミウスはナギの顔が強張ったところまでしか認識できなかった。

「では、ニミウスさんはなぜ、先ほどの人たちに追われていたのですか？」

今度はニミウスが固まる番だった。ナギは単純にニミウスが裏切ったのだと思っている。それは間違ってはいないのだが、ニミウスが追われる理由は、話せば長く、説明するとややこしく、人にはとても言えないようなものである。ナギが言わないのも同じ理由なのだが。

互いに気まずい沈黙が流れる。

（嫌なことを思い出した八つ当たりのようなものとはいえ、少し、言い過ぎてしまったでしょうか…。）

（触れられちゃまずいことだったか？）

互いの思いはこんなところだ。二人から切り出すにはつらい沈黙は別の存在によって切り出された。

「おい、おぬしら――――。」

敵か、と思い声をかけられた二人は声のしたほうに勢いよく向く。ニミウスは腰にさしている短剣を構えたくらいだ。それくらい、突然だったのだろう。だがそこにいたのは、兵士でも、一団でもなかった。

「ばーさん！？」

そこにいたのは、今日一（まだ今日のことなのか、とこのときニミウスは思った）、ニミウスに助言を与えた老婆だった。老婆は短剣を向けられたことにびっくりしたのか地面にへたり込んでいた。それをニミウスが手を貸して立たせる。

「まったく、若いもんはすぐ暴力に訴えるから嫌いじゃ。」

腰をさすりながら立ち上がった老婆はそう言った。

「ニミウスさん、そのお方は？」

「この人に言われたから今日は『熊酒』に行ったんだよ。で、今こんな状況になっているんだがな。」

「ふむ、して、望みは叶ったかの？」

「半分ほど、な。状況的には悪くなってるけどな。」

疑いの目を老婆に向けるナギ、苦笑するニミウス。そして少しばかり満足そうな老婆。三者三様の反応を示しながらもニミウスは簡単に説明した。その説明にナギは納得したのか老婆に歩み寄って自己紹介をしていた。

「しかし、こんなくらいところで何をしているのかと思えば……。そういうことか。しかし、いくらここがそのポイントとはいえ、こ

こに居続けていいのかの？」

ナギは老婆の能力のようなもの―（占い師的なあれ）については一応、ニミウスから聞いていたので驚いたものの、それとは別の、老婆が含むように言った言葉の方が気になった。

「居続けても、ってどういう意味ですか？」

「ふむ、おぬしらの相に遭遇のものが出ておる。それも、あまりよい物ではなさそうじゃの。」

しかし、遅かったようじゃな。そう言った老婆の呟きは飛んできた短剣によってかき消された。飛んできた方向を見ると、そこにいたのはニミウスを追っていた一団。皇国兵も少しばかり混じっているようだ。どうやらあのあと互いに協力しあうことにしたらしい。いま、彼らの目の前にいるその人数は昼間よりも明らかに増えている。どうやら、昼の時にはいなかった仲間も加わっているようだ。

「よう。裏切り者。」

一団の代表―昼間の男のようだ―が機嫌よく声をかけてきた。どうやら、話し声がするから見てみるとそこに偶然いたのがニミウスたちだったらしい。彼らにとってはまさに神の思し召しといったところであろう。一団の中に神に祈る、という習慣を持つものはいないが、皇国兵の中にはいたのだろうか、とどうでもいいことを考えることはなかったが、場所が悪かった。すぐ後ろには、砦。大通りに出て隠れようにも、大通りは追手たちの後ろであり、ここから行くのはかなりつらい。そうなると、砦伝いに逃げるしかないのだが、そろそろ予定の時間なのであまりここから離れたくない。

「『集え、風よ。形成（カタナ）すは…』」

「『集え、炎よ!!』」

ナギの詠唱よりも早く、一団から魔法が放たれる。呪文の一部の詠唱を省略する短縮詠唱で、後出しにも関わらず、だ。短縮詠唱ができることから、一団の術者は一流の存在であることが伺えるが、今はそんなことを考えている場合ではない。ニミウスは余裕で、呪文に集中していたナギはギリギリで避ける。放たれた炎は砦にぶつかるが砦はびくともしていなかった。どうやら、というよりもやはり魔法で強化されているらしい。

とりあえず、ニミウスたちは正面衝突を避けるべく、砦沿いに駆け出した。ナギのあとについていく形になるニミウス。

「『集え、風よ。形成(カタナ)すは波!!』」

「『集え、ほの…』」

ナギの放った突風によりひるむ。詠唱が途中で途切れたらしく、うまい具合にけん制できたようで、魔法の追撃は無かった。その代わりに「追え!!」や「逃がすな!!」といった怒号に近い命令が彼らの背をたたいた。

「何処に、行くつもりなんだ?」

「正直、今の計画は無理そうなので別の計画に移ります。正直、この手は、使いたくは、なかったん、です、けど。」

走りながら喋っているとみるみるナギのスピードが落ちていく。自身のことを魔法使いと言ったナギは典型的な魔法使いらしく体力があまりないようだった。ナギに案内を任せているニミウスは迷わないようにするためにナギを追い越すことができない。このままでは間違いなく追いつかれて捕まってしまう。ナギをここで見捨ててもいいのかもしれないが、捕まったナギがどんな目に合わされるか

を考えると、見捨てるのは寝覚めが悪い。第一、そんなことをしたらこの入り組んだ道では迷ってしまう。そんなことになるのを避けるべくニミウスはナギを担いだ。当然、突然のことにナギは困惑する。

「えっ？　ニミウスさん？」
「とりあえず、行き先の指示だけをくれ。こんな計画にまで乗っているのに、俺は捕まりたくない。」
「でも、重たくない……。」
「大丈夫だ。だから早くしろ！！」

最後の方は語気が荒くなったニミウスに恐怖したのか、ナギはニミウスに行き先の指示を出し始めた。もちろん、完全に撒けるとは思っていないのだが、ナギの指示によって大通りに出たころにはその数も少なくなっていた。これは、撒けたのか、それとも別のところに人員を配したのかは分からないが一息つけると思い、ニミウスはナギをおろした。ナギを担いだままだと人の視線が痛い、というが理由だ。

「このあとは、北の門に向かいましょう。そこの詰め所から出ましょう。」

そう言ってナギは歩き出した。ところどころで、食料を買っては、食べたり、バッグに入れたりと手際よく進んでいく。のんきそうに見えるその行動、これから詰め所へ行く、という緊張感はまったくなさそうだ。なぜ、緊張感がいるかというと。

「でも、夜は門の詰め所に人がいるんじゃないのか？」
「いえ、北門ならどうにかなるんですよ。」

そう言われては反論しようにも、どうしようもない。気が進まないのだが、おとなしくナギについていくニミウス。

（でも、北門に行くってことは詰め所に入る兵士と顔をあわせるってことだろう？俺はともかくナギはいいのか？）

詰め所には必ず、兵士が一人、ないし二人いる、そう言っていたのは宿屋を切り盛りしていたおかみさんだった。そこを通り抜けようとした場合、ナギの立場だと―（ニミウスは自分の立場は考えていない）ほぼ間違いなく兵士と戦闘になる。

ニミウスも、ナギのように物を口に運びながら歩く。審査会までは連日祭りのようなにぎやかさだ。もともと、南北を結ぶ大通りは夜にはにぎやかになるものだが、ここまでにぎやかなのは普段ではなかなかないらしい。やはり、審査会目当てで冒険者がたくさん来ているからだろう、というのは宿屋で聞いたことだった。

（そういえば、あの宿屋の料理はおいしかったなぁ。）

宿屋の恰幅のよいおかみさんの笑顔を思い浮かべながらそんなことを考えているニミウスもはたから見るとナギと同じくらい、のんきな顔をしていた。

1－4（後書き）

「いつ以来の投稿だろうね？」

『気にしちゃ負けだと、紅月は言っていたわ。それにしても少し展開が早くないかしら？』

「それは紅月自身も自覚してるみたいだよ？どうしたら、描写を細かくできるか、とか悩んでたし。」

『それにしても、魔法ってすごいわよねぇ。空も飛べるんだもの』

「それくらい、ボクにだってできるけど…。」

『知ってるわよ。それよりも、紅月が伏線のうまい張り方が分からないって言っていたわね』

「本人は伏線張ってある話ってのは大好物なんだけどねー。本人にその才能がないのは残念な話だね。」

『ま、それでは次回と言うことでいいかしら？』

「そうだね。それではいつになるかわからない次回の後書きで、また会いましょう。」

1―5

彼らが追っているのは裏切り者だ。そういう一団に所属する彼女もまた、当然のように彼を追っていた。理由は知らない。ただ、もともと、彼の考えが彼女たちの考えとは違い、甘いものであったことは知っていたので、裏切った時に「やっと殺せる」と逆に安堵したくらいだった。彼の深く青い瞳の色は好きだったが、それはまた別の話だ。もし彼女が彼女の手で彼を殺めることができたなら、そのきれいな目だけはくりぬいて大切にしよう、くらいは考えていた。

まぁ、理由はどうあれ、彼女はニミウスを追っていた。場所は北門と言われる場所の近く。リーダー分の男からここにいるようにと言われたので、見張りもかねて北門の近くにある居酒屋の外の様子が見える席でお酒を飲みながら、出される料理に舌鼓を打っていた。いまだ、それらしき人物はいない。男によると、連れに皇国の娘を連れていると言っていたのだが、彼女の前をそういう異色の組み合わせが通ることは今の所なかった。彼女の気持ちは監視よりも、完全に料理を楽しむ方向に傾いていた。ここにはこないだろう、という思いからだ。

「てか、ほんとにこんなところ通るのかしら。私だったら砦をぶっ壊してやるわ。…あ、これもおいしいわね。」

自分の手柄にできないことは悔しいが、ニミウスとやりあうリスクなどを考えるとなんともいえない。だが、幸か不幸かニミウスたちは彼女の近くを通り過ぎる形で彼女の元へ向かっていたのだった。

彼女の言ったとおり、彼らもはじめはそのつもり（壊すわけではないが）だったのだが、状況は兵と、ニミウスの追手に見つかったことで変わっていた。皇国兵と、ニミウスの追手の集団から一応ではあるが逃げ切ったナギたちはゆっくりと北門に向かう。ナギの手

持ちは無尽蔵なのか、大量に食料を買っている。それを食べたりバッグに入れている。ナギのように空間をいじってあるバッグは、時間の概念がなく、生ものを入れても悪くなることはない。

それにしても、ナギの金銭感覚はどこかおかしいとニミウスは思わされた。

例えば、パンがある。砂糖をかけたりしてあって、子供に人気のあるものだ。これはよほどのものでない限り二キルほどあれば買うことができる。だが、ナギはそれに対してキル硬貨があるのにもかかわらず、ミルア硬貨を出す。しかも一枚じゃなく、二枚。ナギ曰く「こんなにおいしいのだからこれくらい出しても足りないかもしれないと思った。」だそうだが、見ていたニミウスはとてもひやひやとしたのであった。もちろん、高価なものに対してものすごく小額で支払いを済ませようとしていたシーンもあった。そんな時は思わずナギの頭をたたいてしまっていた。頭をさすりながらナギは言った。

「うーん。ニミウスさんといると勉強になりますね。」

「いや、常識を知らないのはお前だ。」

そうして、居酒屋の露店を通り過ぎ、北門に到着した。当然、門は閉まっているが、横にある小さい扉からは外に出ることができる。が、そこには皇国の兵がいて、出るときも、入るときもチェックされる。夜に入ってくる人も出て行く人もいないので、詰め所に人がいる必要はないのだが念のため、というやつだ。

「本当に行くのか？」

首都を出たくない思い半分、ナギの立場を思う気持ち半分のニミウスが尋ねる。

「当たり前です！！首都を出ないと話になりません。こんな息の詰まる場所なんて…。」
「そりゃあ、追われてる身であるお前には息苦しいだろうな。」
「…先ほどからニミウスさんはその手の話題をたびたび持ち出していますが、そんなに審査会の方に未練があるんですか？」
ナギの意思は固いらしい。逆に、思っていることを当てられてしまう。

◆◇◆◇◆◇◆

舌鼓を打っていた彼女は思わず口に含んでいた酒を吹きそうになった。リーダーの男から言われたとおりの組み合わせが目の前を通って行ったのだから当然と言えば、当然だろう。彼女の思いを完全に裏切っての登場だった。思わず立ち上がり、おざなりにお金を支払い、彼らを追った。
酒のせいで足元がおぼつかない。油断していたとはいえ、多めに飲んでいたことを後悔する。
何とか、彼らの足を止めないといけない。かと言ってこんな人の多いところで魔法を使うのはためらわれた。皇国の兵と協力している時点で微妙なところだがリーダー分の男からは隠密行動を命令されている。だから、彼女は、叫んだ。

「ニミウス！！」

詰め所まであと少し、というところで呼ばれたニミウスは振り返った。彼女はニミウスが足を止めたことに安堵するが、ニミウスの方は違った。あせったように（実際、焦っているだろうが）連れの娘に声をかけたかと思うと一目散に詰め所に向かって駆け出した。
詰め所までの距離はさほどなかったため、彼らはすぐに扉の向こう

へと消えた。
しめた、と彼女は口元だけで笑った。詰め所は首都のほうからは簡単に入れるが外へ出て行くときは詰め所内にいる兵士の持つ特殊な鍵でないと開かないようになっている、と皇国兵と協力体制を組んだときに聞いた。仮にあの二人が兵士から鍵を奪ったとしても彼女が詰め所に入り込むほうが先だと、彼女は確信していた。彼らはわざわざ袋の鼠になりにいったのだと、そう思った。

ドゴォォォン

轟音が発生し、周りにいた人たちが音の発生した場所、先ほど彼らが駆け込んだ詰め所へと目を向ける。が、そのあと、特に何も起きないことを見ると少しずつ視線が離れていった。音がしてから十秒もたたないうちに詰め所に駆け込んだ彼女は絶句した。
そこにいたのは詰め所の中ほどに震えている兵士が一人だけで、袋の鼠になったはずの彼らの姿はない。その兵士の奥にはおそらく魔法で吹き飛ばされたのであろう、扉があっただろうその場所に大きな穴が開いていた。

「何があったの！！」

何があったのか、だいたい予想がついているが、聞かずにはいられなかった。彼女の気迫に圧されたのか兵士は震えながらも口を開き、彼女が予想したとおりのことを口にした。

「な、なんか変な二人組みが、やってきたんだ。そしたら、男の方が炎の魔法を発動して、そこから出て行ったんだ…。」

最後の方は尻すぼみになっていたが、つまりはこういうことだ。ニミウスが魔法をぶっ放して二人は首都から出て行ったと。しばら

くすると、彼女の仲間もやってきて、皇国兵もやってきた。詰め所にいた兵士は人が来るたびに同じ説明をしていた。

それを聞いていた彼女や、彼女の仲間はすぐさま二人が行ったであろう方向へと向かった。残された皇国兵は一人の代表と、詰め所にいた兵士の二人組みが明日の朝、報告に行くこととなった。なぜすぐに、じゃないかというと、彼らを統括しているのは良くも悪くも時間に厳しい人だったので夜に起きたことの報告は次の日の朝にしか受け付けないのであった。片付けも、明日の朝以降ということになり、兵士達も解散した。一人残った詰め所の兵士は穴の外、上に向かって声をかけた。

「もういいぞー。降りてこーい。」

その声を受けて降りてきたのはナギとニミウスだった。

◆◇◆◇◆◇◆

少しばかり、時はさかのぼって、ナギとニミウスの会話。

「でもちょっと待てよ？ナギはさっき特殊な鍵があるから開けるのは難しいって。」

「そうです。見つかっていなければ兵士一人をニミウスさんが伸してくれればそれでいいですけど、見つかったとなると鍵を奪っている暇はありません。」

「じゃあ、どうやって、開けるんだ？」

「別に開ける必要はないのです。壊せばいいんですよ。かなり賭けの要素が強くなりますが。」

「どうやって…ああ、分かった。」

◆◇◆◇◆◇◆

詰め所にて。

「お、お前らは！！」

「ニミウスさん、早く！！」

「分かってるよ！！だいたい、見つかったのは俺なのに、何でお前のほうが慌ててるんだよ。『集え、炎よ。形成（カタナ）すは拳（コブシ）！！』」

慌てる兵士には目もくれずニミウスは自身の腕に炎を纏わせて壁を思い切り殴った。砦と同じように、詰め所の壁にも魔法で特殊な処理を施してある、のだがその処理を上回る負荷をかければ当然、壁は壊れる。これは破壊力の高い、炎属性であったことと、剣士であるニミウスの力だったからできたのだろう。ナギが炎の魔法を使ってもこうはいかないだろうし、ニミウスが風を使っても無理だっただろう。

ドォォォン

音と、衝撃が詰め所内で発生し、壁に穴が開く。そのまま駆け出し、しばらくしたところでナギが風を使っての浮遊魔法を発動させる。そのまま、灯台下暗し、という言葉のように気付かれないだろうと踏んで砦付近で待機。今に至るというわけだ。

「それにしても、ここにくるなんてな。」

「まさか、上にいることを気付かれていたとは思いませんでした。それに、よかったのですか？」

「何が？」

「あたし達のこと、黙ってて。」

「かわいい娘がつかまるなんて俺には耐えられんよ。」

どうやら二人は知り合いらしい。明るくけたけたと笑いながら話す兵士とナギは笑いながらも真剣に話していた。ニミウスは二人の会話を中断させて、尋ねた。

「二人は親子なの？」

「違いますよ。ぜんぜん似てないじゃないですか。知り合いですよ。昔からよく遊んでくれた人です。近所の気のいいおじさん的な人です。」

「そうだな、こいつは俺にとっちゃあ、娘のようなやつではあるがな。そう言うお前は？」

「あ、俺はナギと一緒に行動することになったニミウスといいます。」

「そうか。俺は空雅（クミヤ）だ。よろしくな。あと敬語やらさん付けやらはナギだけで十分だからタメ口でいいし、呼び捨てでいい。」

互いに自己紹介をし、和やかな空気が生まれる。ナギに警備体制に関するいろんなことを教えたのは彼だろうかと、ニミウスは考えるが、それをたずねることはできなかった。なぜなら空雅が顔を引き締めると二人にとっとと首都から出て行くように言ったからだ。

「誰が、いつ戻ってくるかわからないからな。とっとと行け。」

「そうします。今までお世話になりました。」

「ちゃんとした出会いじゃなくて悪かったな、ニミウス。まぁ、こいつは言い出したら聞かないやつだが、根はいいやつだから我慢してやってくれ。」

「今日一日で、その辺はよく分かっているつもりだよ。」

「そうか、じゃあ、いつかまた、どこかで会おう。それまで、元気でな。」

そう言って握手を求めてくる。その手をニミウスは握り返し、ナ

ギはそれをただ見ていた。

1－5（後書き）

「空雅（クミヤ）登場！！そして一章は次で終わりです。」
『やっぱり展開が早いんじゃないかって紅月は悩んでいたわね。』
「それでも、予定よりかは長いんだよ？本当なら砦越えは成功してるはずだったし。」
『まぁ、あの老婆が出てきたのは紅月も予想外だって言っていたじゃない。』
「ま、何が一番予想外かというと、昨日に投稿して今日も投稿してるっていう紅月の行動だけど。」
『なんにせよ更新するっていうのはいいことだわ。』
「そうだね。それじゃあ読者の皆さん、いつになるかわからない次の話まで、さよなら」

1－6

このあと、彼らはヴァダリア皇国の首都から離れたところで休憩を取っていた。まもなく、日が昇る。ナギのバックに入っている食料を食べながらその時を待つ。少し高い、丘の天辺と言えるその場所で休憩をしたいと言ったのはナギだ。何でも、太陽が見たいらしい。

「わぁーーー。」

ナギの顔は明るい。子供のようにはしゃぐ。

「ニミウスさんを追っている方々はどこかに行ってしまいましたし、しばらくは安心ですね！！」

「でも、俺らより先のほうにいるってことは罠を張られたりしてるんじゃあ」

……。

「あっ！！」

ナギはしまったという顔をしている。ニミウスはため息をついた。

「まぁいいよ。それにしても、これにて俺はめでたく犯罪者の仲間入り、か。」

「そうですね。お仲間ですね！！」

昨日一日で、ニミウスがやったことは詰め所の壁を破壊したことだけなのだが間違いなくニミウスのことはナギの《・・・》仲間と

して認識されてしまっただろう。ナギの明るい笑顔を見ると、首都の中では見たことがなかった裏表のない、笑顔を見ているとなんだかどうでもよくなってきた。

「これから、どうしましょうか？」

「そうだな。とりあえずカロンに行こうか。」

北門から出て、大きな道を行くとカロン王国へと続く橋に出る。そこから、カロンへ行こう、という考えだ。首都を出た後について特に考えていなかったナギはそれをあっさりと承諾した。彼女は見たことのない異国を思い、早く行こうとせかしたが、彼らがその場を離れたのは日が登りきってからのことだった。

1－6（後書き）

「今日も、というか今日だけで二話も更新しちゃったね。」
『ここまできたらさっさと終わらせたかったらしいわよ。短いのは一章の最後は幕間みたいな感じだから、らしいわ。』
「で、次は一章で出てきた人物やらの用語集的なものを作るんだったね。」
『ええ、基本的に一章に出てきたことばかりをのせるらしいわ。』
「それも一月中には書いちゃうつもりらしいよね。」
『むしろ明日には書くつもりのようよ。冬休みの内に終わらせたいんですって。』
「ああ、なるほど。区切りよく終わらせておきたいんだね。紅月はそう言う人間だね。」
『で、二章の開始が未定なのよね。』
「冒頭の方の構想はできてるらしいけどね。」
『それじゃあ、また、次の話の後書きで』

第一章用語集（前書き）

この用語集では一章で出てきた単語について記載していきますが、〇〇が乗ってないということがあるかもしれません。

また一部は二章に入ってから説明するものも含まれており、先行公開的なネタばれ的な要素を含むと思われます。

第一章用語集

・人物

ニミウス

この話の主人公の一人。

いろいろあって、仲間を裏切って首都に来ていたところでナギと出会う。

魔法の属性は炎＋α（未公開）。

近距離戦を得意とする剣士。

格好は動きやすい軽装ではあるが、最低限の防具はちゃんとつけている。

防具に関しては動きやすさを優先した結果。

武器は長剣一本と短剣二本で、三本とも腰にさしている。

ナギ

この話の主人公の一人。

ヴァダリア皇国出身。

なんか、皇宮（王宮的なところ）で何かしてきたらしく、皇国の兵士から追われている。

偶然ニミウスと出会い、行動を共にすることにした。

魔法の属性は風＋α（未公開）。

魔法使いで、近距離の戦いを得意としていないせいか、体力もあまりない。

格好は皇国の民が基本的に着ているような衣服（二章本文参照）。

防具などはつけていない。

武器は特にないが、空間をいじってあるバックをもっている。

老婆

ニミウスに助言をして、ナギと引き合わせた（？）張本人。

占い師的な能力（未来予想、過去視など）を持っている。

空雅（クミヤ）

ナギを「娘のような存在」という男。

職業は皇国の兵士だけど、実は…。

実力は…。

なんというか設定をいろいろ公開できないので謎な男になってしまった…。

ナギたちを逃がすのに一役買っている？

救世主

ニミウスが首都に来る約三ヶ月前に異世界から召喚されたと言われている人。

実力未知数。

一部の上層の人は知ってるけど、皇国民は存在だけは知っていて顔も知らない。

ただし、この世界の常識などにはまだ不慣れらしいので、補佐してくれる人を求めているらしい（国が）。

一団

ニミウスを追っている人たちのこと。

基本的にニミウスと同じくらいｏｒそれ以上の実力保持者ばっかり。

１－６で出てきた彼女もそう。

基本的な性格は、殺られる前に殺れ、出る杭は打つ。

人物はこんなとこでしょうかねー。救世主とか、まだ名前も出てませんね、はい。空雅は呼び名を「クウガ」にしようか悩んだのですが響き的に「クミヤ」で落ち着きました。

◆◇◆◇◆◇◆

・地名、施設名
ヴァダリア皇国
「皇帝」が国を治める君主制の国。
政治形態は皇帝の独裁政治。
独裁政治と言っても現皇帝は人の話をわけ隔てなく、誰からでもよく聞く人なので実際は民主主義的。
この話の始まりの国でもある。
国民の特徴としては黒髪黒目が挙げられる。
「ヴァダリア」や「皇国」と呼ばれている。（作中では皇国で表記）

・カロン王国
「カロン」、「王国」と呼ばれる国。皇国と違って、多種多様な瞳、髪の色を持つ人がいる。
国名から分かるように王政。
実際は選挙をして、代表を出して会議する民主制。
王は議会における最高権力者。
ヴァダリアの北に位置している。
ちなみに世界共通語はカロン語。

・依頼取引施設（ミルフィア）
ギルド的なあれ。
ただそれだけ。
ランクは下から星一（シングル）、星二（ダブル）、星三（トリプル）、月（ルナ）、太陽（フィア）。
受ける依頼のランク制限はされていない。
ランクを上げるときはランクアップ用の依頼が設定されている。（細かい設定は二章以降）

土地名とかもこんなもんかなー。ほんとは国はまだあるけど、今の所、これくらいしか出てないしねー。依頼取引施設のことも統括

組織もみんな呼び名はミルフィアで、二つまとめてミルフィア。ていうか何で依頼取引施設って長い名前にしちゃったんだろう…。

ちなみに、皇国と王国の政治の差は最終決定権が皇帝（トップ）あるか議会（民衆）にあるかの違い。え？よく分からない？聞こえないなぁ。

◆◇◆◇◆◇◆

・お金について

銅貨…キル

銀貨…ミルア

金貨…ギリアム

百枚で単位が変わります。

一万キル＝百ミルア＝一ギリアム。

キル（キロ）、ミルア（メガ）、ギリアム（ギガ）という由来。

単純にどうしようかふと迷った時に浮かんできたので、そのまま採用している。

物価の価値観としては、銅貨一枚はほぼ１００円だと思っていただければ…。

◆◇◆◇◆◇◆

・魔法について（二章で詳しく説明します）

基本の属性が、地、水、火、風の四つ。

基本だけあって、たいていの人がどれかひとつは使える。

ナギなら風で、ニミウスなら炎といった具合に。

呪文詠唱はすべての属性において共通で、

『集え、〇〇。形成（カタナ）すは～～。』

という形式になっている。
前半部で、自身の魔力を使い、空気中にある魔属粒子に干渉することで、その属性を扱えるようにする。
後半部では、術者のイメージした形にする。
例：竜巻、波、球など。
術者が想像できるなら一応どんなものでも形作れる。
大きいものほど魔力消費が激しい。

魔属粒子やら、細かい属性については次章に持ち越しですが簡単に説明を。
魔法を使う時は魔力の質を変えます。そうした魔力を空気中に放出すると、魔属粒子がそれに反応してその質にあわせた属性になります。人によって使える属性に差があるのは質を変えられる幅などが違うから。

◆◇◆◇◆◇◆

いかがだったでしょうか？
〇〇がない、と思った方は教えてください。それと本文中と書いてることが違う、となった時も教えてほしいです。
次章以降持ち越しな物が多いせいか詳しく書けない、書かないなどがございましたが気を悪くせずにいただけますとうれしいです。
二章の開始は今月末、もしくは二月頭を予定しておりますので、しばらくお待ちください。
今日までのＰＶアクセス７５９２、ユニークアクセス１８７８になってました。ありがとうございます。そしてこれからも、ぜひぜひごひいきに。
それでは。

2－1もう一つの魔王討伐ご一行様も・・・

ナギたちが首都を出たその次の日から、二日間に分けて救世主と共に旅に出る者を選ぶ審査会がはじまった。さすがに、かなりの猛者たちが集まっていたのだがその中でも、群を抜いて際立ったものたちがいた。

一人は屈強な剣士で、十人がかりで攻撃されてもそれを全く苦にせず攻撃してきたものたちを逆に倒していた。

一人は見事な魔法を使っていた。その人は多種多様な魔法を持ってして他の参加者を自信の近くに近寄ることさえさせなかった。

また別の一人は戦いで傷ついた人たちを魔法を使い驚くべき早さで治していた。そしてその人は人体構造にも詳しく、魔法を使うまでもない人には見事な処置を施しており、高位の治癒術士であることが窺えた。

そして一人の剣士は小柄な体を活かし、縦横無尽に駆け回り剣士とは対極的に早さで持って他を翻弄していた。

◆◇◆◇◆◇◆

その四人が選ばれたのはある意味当然の流れだった。

今、彼らのいる場所は謁見の間と言われる場所。皇宮の最奥にあるところ。

「今日そちたちを呼んだのは他でもない、先日行われた審査会のことだ」

そう言って四人の前にいるのは玉座に座っている現皇帝。周りには重臣達がずらりと控えている中、彼らはいた。片方の膝を床に着け、礼をしている。右のほうから順に、屈強な戦士、魔法使い、治

癒術士、小柄な剣士の順だ。彼らはその言葉をきき、垂れていた頭をより深く下げる。

「そんなにかしこまる必要はない。頭を上げるがよい。」

そう言われて断るのは逆に失礼、ということを分かっているのか四人とも顔を上げる。

「こちらでも協議したがやはり群を抜いていたそちたちに、救世主とともに魔王を屠るべく旅に出てもらいたい。」

四人は口を開かない。この国では、否、この場では上位者からの許可が出ないと喋ることは許されないのだ。皇帝のほかにも、宰相や、将軍といった要職の人物も激励の言葉を彼らに送る。

「それでは、そこのものに案内をさせる。そこで待っておるがよい。しばらくすると救世主がそこに行くのでな。」

四人は一言も話さず礼だけをして、皇帝の前を退いた。そこから女中の一人に案内してもらった部屋で待つこととなった。

◆◇◆◇◆◇◆

「それにしても、救世主様ってどんな方なんでしょうねー。」

そう言ったのは小柄な剣士の女性だ。審査会では剣を使っていたが、本来は弓の名手であり、ギルドでも弓士として名が通っている。名前をミール・エミシュードという。茶色の髪を肩口で切りそろえており、丸い、くりくりとした髪と同じ茶色の目は、彼女の体が小柄なことと、その口調もあいまって実際の年齢よりも若い印象を与

える。彼女は、皇帝が与えてくれた一室で、これからともに旅するであろう仲間と一緒にいる。

「気になりますわ・・・。」

相槌をうって、言葉で返したのは魔法使いの女性。こちらはエルフらしく、尖っていて、人のそれよりも長い耳が生えている。髪の色は金色、肌の色は人のそれよりも白い。ハンナ・ガボットというのが彼女の名前だ。

「誰だっていいじゃねぇか。俺たちがやることは変わらねぇんだからよ。」

からからと、豪勢に笑いながら用意されたお茶を飲むのは屈強な剣士である男、ジェフ・ゴーディ。彼の屈強さを示すように腕や顔は日に焼けており、腕の筋肉は普段から鍛えられていることがうかがえる。

「確かに、それは言えますわ。でもなんと言っても、救世主様ですもの。光の神が遣わしてくださった闇を打ち滅ぼすお方……。きっと神々しいお顔をなさっていたでしょうね。」

うっとりと夢を見るように虚空を見つめるハンナはエルフらしく、光至上主義というか、光信仰らしい。

「僕は、お金さえもらえればそれでいいので。別に興味はありませんが。」

そう言ったのは、治癒術士の男だった。ギルドではお金にがめついことで有名な彼は眼鏡の位置を直し、黒い瞳をハンナに向けなが

ら言った。ハンナは大げさな動作と声色で嘆き、天を仰いだ。今回の同行者には皇国から大量のお金が前金で支払われている。そうでなければ彼は今ここにはいなかっただろう。

「ああ、なんと言うことでしょう。神の使いたる救世主様に興味がないなんて。
神よ、このおろかな郷（ゴウ・ロンホウ）龍望に救済を！！」

郷　龍望というのが彼の名前である。彼ら四人は特に自己紹介などはしていない。四人ともギルドでは名の知られた者たちであり、互いに協力して、何度か依頼もこなしている仲なのだ。だから、互いの実力は疑っていない。むしろ、このメンバーなら雑魚の魔物が百を超える量で襲ってきてもまったく苦にならないということを理解しているくらいだ。

ランク星三（トリプル）『距離無き弓矢』ミール・エミシュード
ランク月（ルナ）『四季の絵描き』ハンナ・ガボット
ランク星三（トリプル）『戦鬼』ジェフ・ゴーディ
ランク星三（トリプル）『欲深き癒し手』郷　龍望

それが彼らの立ち位置であり、周りからの認識であり、彼らも自覚しているものだった。この中に、皇国の正規兵がいないのは皇国側としても悔しいものだろうが、国よりもギルドの方に有能な人間が集まっているという現在の状況がよく現れている。彼らが思い思いに喋っていると、部屋の扉が開いた。

2―2

扉から入ってきたのはきれいな身なりをした女性だった。四人は弾かれたように立ち上がり彼女にたいして礼をした。彼らは知っている。その女性に名はないことを。

そう言うと変な感じかするだろう。皇国では皇帝の家系に嫁入り、婿入りする際にそれまでの名前を捨てさせるという風習がある。嫁入り、婿入りするというのはその時の皇帝の伴侶となるときのことを指しており、その人がそれまで所属していた家と縁を切ることも表している。皇族に嫁いだ人間はそれまでの家の人間ではなくなるので、それまでの家の名を名乗ることは許されなくなる。では、皇族として名を与えられるのかというとそうでもない。ただ、こんなことをしているのは皇族だけで、皇国の民の婚姻の際には単純に姓が変わるだけである。そんなわけで、彼女に名はない。が、彼女の立場を表す現在の呼び名である記号はある。

「あなた方が救世主様と旅に出られる方ですね。わたくしは皇華皇妃です。」

皇華皇妃というのは皇帝の妃のことだ。賢帝と呼ばれる現皇帝を政治面でも、生活面でも支えている彼女のことを周りは皇妃と呼んでいる。そんな彼女の後ろにいるのはこの国の宰相。そしてもう一人、彼女の後ろに隠れるようにして縮こまっている人物がいる。皇妃が促すことで前に出てきた。口をパクパクと動かして何かを言おうとしているが、声が出ていない。

「は、はじめまして。サノ・メグミといいます。これからよろしくお願いします。」

緊張しているせいか声が出なかったらしい。ようやく出た言葉と一緒に勢いよく頭を下げる少女、サノ・メグミを皇妃が紹介する。

「彼女が救世主様よ。カロン風に言うならメグミ・サノになるわ。」

黒い髪に黒い目。皇国の人間と見た目はほとんど変わらない。年齢もまだ二十歳になっていないだろう。ただ、彼女から感じることのできる魔力の質がこの世界のものとは違うもので、それに気づいたハンナが息をのみ、龍望はメグミを凝視していた。

それに気づかなかったミールは挨拶を返していた。

「へぇ、こんなお嬢ちゃんが救世主かよ。すげぇなぁ。」

ジェフはメグミの肩をバンバンと叩きながら自己紹介をした。メグミは叩かれるたびに体勢を崩していたが笑顔でそれに答えていた。

そして彼女の視線がハンナたちの方に向いた。

「あなたたちの名前はなんですか?」

「わたくしはハンナ・ガボットですわ。ハンナと呼んでくださいませ、救世主様。」

「僕は郷龍望。よろしく。」

「こちらこそ、です。あと、ハンナさん。その救世主ってのはやめてください。結構恥ずかしいです…。」

慌てて返事をする二人に首をかしげつつもメグミは二人に苦笑しながらそう言った。ハンナは何かを言おうとしていたが結局、了承の意だけを口にした。メグミは興味深そうにハンナを見る。

「どうかなさいましたか、メグミ様。」

「できれば、その、様ってのもやめてほしいんですが・・・。」

「救世主様に、様をつけないなんてばちが当たりますわ。それよりも、わたくしがどうかなさいましたか？」
「あ、それは。その・・・。ハンナさんってエルフなんですか？」
「ええ、そうですけど、それがどうかしました・・・」
「本当ですか！！うわぁー。私、エルフってはじめてみたんです！！本当に耳が長いし、肌も白いんですね！！」

なにやら一人で盛り上がり始めたメグミを皇妃がなだめている。どうやら、メグミのいた世界にはエルフはいなかったらしい。

◆◇◆◇◆◇◆

「龍やら妖精やらもいませんよ。だから、彼らに会うのも楽しみなんです。」

時間は過ぎて、皇妃や、宰相も部屋から出て行って、彼らは互いに話をしていた。だいぶ打ち解けたらしく、一番初めの緊張やらも無く。メグミが萎縮することもなくなっていた。主に話しているのはメグミの方で、異世界の話を聞きたいというミールとジェフに押された形だ。もともと、この世界の住人であるハンナたちには信じられないことばかりであったし、半信半疑であった異世界の存在を見せつけられた、というのが正直な感想であった。

一番信じがたいのが『科学』というもので、メグミがどれだけ「魔法ってすごいですね」と言っても、四人の感想は「いや、科学のほうがすごいというよりもおかしい」であった。

「とりあえずー、メグミの戦力を聞きましょうかー。」
「あ、はい。どのくらいの強さかは他の人とあまり比べたことはありませんから、よく分かりませんが、空雅（クミヤ）さんからは星（ダブル）ニレベルの魔物なら普通に倒せるって言われました。あと、魔法は光属性しか

つかえないです。」

ミールに促されてメグミは喋ったが、思わず、席を立ったのが二人いた。

そのうちの一人はジェフで、皇妃の側近の一人である空雅に鍛えてもらったということに興奮していたし、驚いていた。

「そんなに空雅さんってすごい人なんですか？」

「すごいも何も、あの人は短期間で月（ルナ）まで上り詰めて、そのまま皇妃に雇われた”伝説？なんだぜ。しかも・・・」

「ジェフの話はどうでもいいですわ。それよりもメグミ様。本当に光属性しか使えないんですか？」

ジェフが熱く語りだしたのをさえぎって、メグミにたずねたのは立ち上がったもう一人、ハンナだった。ハンナがたずねたのには理由がある。光属性しか使えないなんてことは本来ならありえないからだ。

魔法の属性は、基本属性の四つ（地水火風）のほかに、派生属性の雷、氷、上位属性の光、闇がある。闇は主に魔物が使い。光は聖職者や、エルフの中にその使い手が多い。普通は基本＋派生＋（使えれば）上位の属性を使えるがメグミは光しか使えないらしい。

「そう、ですよ。」

メグミの顔が少しばかり引きつっていたが、それはハンナの剣幕に押されてのことだろう。ハンナはハンナで、やはり、異世界からやってきた救世主だからありえるのだろう、と考えることで納得していた。

2－2（後書き）

「いやぁー、大変お待たせしました！！ようやっと続きです。」
『一月半ぶりかしら？三月頭に更新する予定だった割には遅すぎるわ。』
「まぁ、遅れた理由は単純に書いてなかったってのがあるね。」
『ま、テストの結果があれじゃあね。』
「紅月の事情なんてどうでもいいよ！！それよりも、空雅、空雅だよ。」
『まさか、皇妃様の側近だなんて驚きねぇ。』
「嫁ぐ時のシステムも変わってるねー。そんなわけで、次回予告！！」
『唐突ね。しかも次回予告なんてはじめてじゃない。』
「ここで、書いとくと、次の話が書きやすいとか書きやすくないとかって紅月が言ってた。」
『そう。』
「そういうわけで、次回！！救世主様ご一行、皇国を発つ！！」
『サブタイトルは章始めの時だけじゃないの？』
「えーと、なになに？『まぁ、最終目標はそこまで書くことです』だって。紅月の目標だったねー。」
『少しでも早く書いてくれることを願うわ。』
「それではいつになるかわからない次回でまた会いましょう」

2―3

「では、まずはじめにカロンへ参るというのか？」

場所は再び謁見の間。メグミをはじめとした五人が皇帝に頭を垂れていた。

「はい。みんなで話したのですが、そうしようということになりました。」

「それは、なぜか説明してもらおうか。」

口を挟んだのはこの国の防衛を一手に引き受けている将軍だった。実は、この国、ヴァダリア皇国は大陸の中でいちばん魔物による被害が大きい。魔物は大陸の中心にある、ノーストリ山脈からやってくることが分かっている。彼としてはさっさと山脈へ向かい、本拠地を探し出し、魔物を殲滅してほしいのだろう。それに対してハンナが返した。

「魔物がノーストリ山脈からやってきているのはわたくしたちも知っていますわ。ですが、気になることがありますわ。」

「気になることだと？」

「ええ、同じように人種族が多く住むカロンにはヴァダリアほどの被害が見られないことですわ。」

ヴァダリアが、首都を守るために砦を作り日々砦を強固するために砦に強化の魔法をかけているのに対し、カロンには首都を守るための物が何も用意されていない。二国に対する魔物の態度が違う、というとおかしいが、魔物はカロン領に現れてもカロンの民を襲うことは滅多にないという。

「ですから、わたくしたちはカロンの何かに魔物が嫌うもの、あるいは魔物を退けるものがあるのではないかと考えているのですわ。」

なかなかに説得力があったのか、将軍は不承不承ながらもカロン行きを認めた。

「ふむ。もとより我はそちたちの行動を制限する気はない。我のもとへの報告さえ怠ることがなければどこへ行っても構わん。」

「よろしいのですか？」

そうたずねたのはメグミだ。驚いているのは他の面々も同じようだ。

「我がこの国を統治しておる間なら、最終的に魔物を根絶やしにしてくれるのならば構わん。その代わり、というと悪いが時折、我の方から依頼をするかもしれん。その時にはそちらを優先してもらいたい。」

「それくらいなら、別にいいですけど……。」

「では、早速だが…」

メグミの了承をうけ、皇帝は早速依頼をしてきた。

「虹牙（コウガ）は知っておるな？」

「はい。」

「近々、カロンの方へ挨拶へ行こうと思っておったのだが、虹牙が行くと行ってきた。道中には魔物も出てくるから、わが国の兵をつけるつもりでおったが、そちたちがカロンへゆくなら、虹牙の護衛をやってもらいたい。」

どの道カロンへ行く予定だったメグミたちは快く了承し、退出した。皇帝からは出立は明日だと告げられた。

◆◇◆◇◆◇◆

「母上。」
「どうかしたのですか、虹牙。」

皇妃のもとへ一人の青年がやってくる。黒い髪をきれいに結い上げ、烏帽子のようなものをかぶっている。ゆったりとし、きらびやかな衣装の上からも鍛えられているのが分かるほどしっかりとした体つきをしている。警護職ではない限りは帯剣を許可されていない宮中で帯剣をしているのはひとえに彼が皇位継承権の持ち主だからなのかもしれない。

「このたび、私はカロンへ行くことになりました。救世主一行が護衛につくそうです。」
「そうですか。」
「はい。これがうまく行けば、私はまた一歩皇帝の座に近づきます。」

この国の皇位継承権を持っているのは四人。彼はその三番目に当たる。わずかなことでも、うまく働けば彼はよりいっそう皇帝の地位に近づくのだ。

「それでは、気をつけて行ってくるのですよ。」
「はい！！それでは、準備がありますので失礼します。」

晴れやかな顔で母親である皇妃のもとを去っていく彼とは対照的に、皇妃はそれまでたたえていた微笑を崩し、暗い顔をする。

「暗い顔をしているのだ、皇（オウ）の妃よ。」

まるで影から語りかけるようにして、皇妃の後ろに人が現れる。黒い、という印象なのに眼だけが金色に輝いている。その目はどこか楽しげにゆれる。

「そうね。わたくしの息子も皇位にしか興味がないのだと見せ付けられてしまったようで、悲しいわ。」

ただ一人を除き、他の皇位継承権を持つ三人は、『いかに国を統治するか』ではなく『いかに皇帝となるか』に対して躍起になっている。それではだめなのだということを皇妃は知っている。ここは皇帝が国を統治するあれこれについての絶対的な決定権を持っている国なのだ。だから、意識が違うということもあり、他の三人とその一人には絶対的な差が生まれている。

「だからこそ、わたくしは彼女に皇位をついで欲しかったわ。」

だが、そんな彼女はもういない。四人の中でただ一人『統治』に意識を傾けていた、東宮と呼ばれていた皇位継承権第一位の彼女はいなくなってしまったのだから。

「僕も同じ気持ちなのだ、皇の妃。だからこそ――――。」

「ええ、分かっています。彼女の頼みである『東部の統治』わたくしが誰になんと言われようともやってみせましょう。」

それが、皇妃にできる唯一の償いであることを、彼女は自覚している。自分たちが彼女を追い詰めたのだと、理解している。そう理解しているのは皇妃だけなのかもしれないが。

「ふむ、ならば僕はもう行くのだ。」
「あなたの主のもとへ？」
「そうなのだ。さらばなのだ、皇の妃よ。」
そのまま、その『黒』はそこから消えた。

◆◇◆◇◆◇◆

次の日、虹牙や救世主一行を乗せた馬車が皇国を出た。
虹牙とメグミたちは同じ馬車に乗っている。
本来ならば虹牙とメグミたちが同じ馬車に乗るのは身分が違いすぎて、許されないのだが、虹牙がそうしたいと言い張ったために、その主張が通った形となった。

「それじゃあ、お前らに確認しておく。まず、カロンまでの道中はお前らが俺の護衛をする。」
「はい。」
「そして、俺の命令には絶対服従しろ。」
「…はい。」
「勝手な行動をしない。」
「はい。」
「今言ったことをしっかりと肝に銘じとけ。」

それだけいうと虹牙は何があっても起こすな、と命令し眠り始めた。

「なんなんですかー？この俺様野郎。」
「この人はヴァダリアの皇位継承権第三位の方なんです。」
「偉い人って感じだけどよぉ、いけすかねぇな。」

「わたくし、いまさらながら皇帝にやめたいって言いたくなりましたわ。」

昨日の皇妃の前とはまったく違い態度が横柄となった虹牙を見た感想がこれだった。彼らは后妃の前での態度を知らないが、こっちが地であろうことは容易に考えることができた。

「僕も気に入りませんね。」

「珍しいですわね。龍望がそう言うなんて。」

てっきり、いい金づるになりそうとか言うと思ってましたわ、とハンナが茶化したが龍望は言った。

「僕が人を駒のように扱うのはいいですが、僕が駒のように扱われるのは嫌いなんですよ。自分で選んだ仕事ならまだしも、選んだ仕事のおまけでこんなことをされてはたまりませんからね。ちょっといたずらしてやりましょうか…。」

くっくっく、と龍望は笑う。それに黒いものが混じっているのに気付いたほかの一同は何も言うまい、龍望と虹牙の間に何が起きても首は突っ込むまいと強く肝に銘じたという。それこそ、虹牙に命じられた以上にというのは言うまでもないことだった。

2－3（後書き）

『今日で春休みが終わるそうなので頑張って投稿したみたいよ』
「失踪が欠片も進んでないのにね」
『まぁ、そっちも結構悩んでいたみたいよ』
「今回は皇族が出てきました」
『虹牙のキャラは「皇族なら俺様、腹黒、真面目、弱気！！」という紅月の意見のもと俺様系よ』
「それをうまく表現できるかは紅月の腕にかかっているけどねー。」
『というわけで、次回、その龍は影に潜む』
「では、いつになるかわからない次回にまた会いましょう。」

2―4

夕方には彼らは村についていた。今日はこの村で宿泊することになるようで御者が近くに馬車を止めておいてもいいかと聞きに行っていた。この間も虹牙は寝ている。昼ごはんのときに龍望と口げんかした後に不貞寝をしたのだ。その際にも起こさないようにと命令されている。正直、いつまで寝ているのか、そもそも、寝ているように見えるけど生きているのだろうかと思ってしまうほどによく寝ている。龍望が「起こすな、と命令されているのですから起こさない方がいいでしょう」と言わなかったら誰かが間違いなく起こしていただろう。

やがて戻ってきた御者からよかったら、村に泊まっていってくれという返事を聞き、御者、勇者一行は村の外れに馬車を止めて村へと向かった。

虹牙をおいていったのは龍望がそう言ったからだ。

村ー四寿（ヨス）村ーの人たちは快く彼らを迎えてくれた。村の人間が食べるには豪華すぎるような料理まで出して歓迎してくれる。勇者一行もそのありがたくその意を受けて、歓迎会という宴会を楽しんでいた。

「それではこれからカロンへ向かわれるのですか？」

「はい。」

「エルフなんて初めて見たわ。」

「すごーい。髪の毛さらさら。しかも綺麗。」

「ありがとうございます。」

「あんちゃんいい飲みっぷりだね。」

「おうよ。まだまだいけるぜ！！」

「えー。おねえちゃんもきゅうせいしゅさまなの？」

「みえないー。」

「なんなんですかー。私は結構強いんですー！！」　質問に答えるのはメグミ、村の女たちに囲まれて誉められているのはハンナで村の男と飲み比べをしているのがジェフで、ミールは子供たちに遊ばれている感じた。それがまた賑やかさに拍車をかけていた。

「あなたがが救世主様？」
「うん、そうだよ。」

十才くらいの子供がメグミのところにやってくる。どうしたの？といった顔で子供を見ると固い顔をした彼ー男の子だーは勢いよく頭を下げた。

「お願いです！！」
「え？」
「三日前に僕を魔物から助けてくれた人たちがいたんです。でもその人たち、魔物の話を聞いたら魔物の住みかに行っちゃって……。」
生きているかはわからないけどどうにかして生死の確認ができないだろうか、ということだそうだ。

「女の子とカロンの国の人でした。女の子の方はナギと呼ばれていました。」

ナギ、という単語にメグミはわずかに反応したがそれには気づかなかったらしい少年はひたすら頭を下げている。何事かと他の人たちが遠巻きに見守るなか彼の祖父とおぼしき老人が現れた。どうやら老人はその二人組のことを忘れるようにと言っていたようだ。

「わざわざ死にに行ったような連中のことをいつまでも引きずるんじゃない！！」

「でもじいちゃんだって気にしてたじゃないか！！」

そのまま子供は泣き始めてしまった。

先程までの歓迎ムードとはうってかわって静かになる。どうしたものかと勇者一行の面々は顔を見合わせる。三日前となると生きている可能性は無いと言ってほぼ間違いない。それに、彼らは今虹牙をカロンまで連れていくという仕事がある。でもこのまま無視するのも気分がよくない。

この状況を打破したのは彼らがすっかり忘れていた人物によってだった。

「行きたいなら、行け。この南宮が許す。」

南宮―皇位継承権第三位を表す号だーこと虹牙がそこにいた。

「でもいいのですか？カロンへの到着が遅れますが。」

「かまわん。民の憂いを払うのは皇族の役目だからな。」

龍望は遅れると体裁が悪いのではないのかというつもりで聞いたのだろうが、虹牙はそれを気にせず民を優先した。

（ここで機嫌をとっておけば後々俺にとって有利に働くだろうからな。）

虹牙の心情にはみんなが感心していたために気づかれることがなかった。

「それより、お前。ちょっとこっちに来い。」

虹牙は龍望を呼ぶとそのまま馬車の方へと向かっていった。当然

のことだが、馬車のところには人はいない。別に、何か怪しいことをするわけではなく、ただの龍望の憂さ晴らしの時間である。

「なぜ、俺を起こさなかった。」

「おや？虹牙様が起こすなとおっしゃったから僕は起こさなかっただけですが。」

「俺は何か起きたら起こすようにと言ったな。」

「ええ。ですが何事もなくこの四寿の村についたので起こさなかったのですが、何か問題がありましたでしょうか？」

龍望がずっとやっている行動。それは虹牙の言動に対する揚げ足取りだ。どうやら虹牙があれやこれやと命令したことを龍望なりの解釈で受け取り、あえて虹牙の癪に障るように行動しているのだ。理由は自分達を駒としか見ていないところ、別に荒く扱っても構わないと思っているところだろう。

（僕自身が選んだ仕事の依頼人がこんな性格だったら自分を呪いますが、ね。）

八つ当たりにも近い行動ではあるが、メグミをはじめとした仲間は飛んでくる火の粉を恐れてか一切口を出さない。それも、龍望の八つ当たりを加速させている一因でもあった。

だが、このまま虹牙の怒りが頂点に達してもよくない。これでも一応は皇位継承権を持つ人間だから、怒っている声が四寿村の人たちに聞こえるのはよくない。彼ら皇族のイメージを損なわせるのは龍望の依頼主であるヴァダリアの皇帝も望んではいないだろう。

なので、龍望は心にもないことを口にする。

「ですが、虹牙様がああ言ってくださったおかげで村の者達はきっと感謝しますよ。」

「そうか？」
「ええ。小さい子供の願いまで聞いて差し上げる皇族の方なんて他にはいらっしゃらないのではないですか？」
それを聞いて照れるようにして顔をゆがませる虹牙。正直、こんなことをほざいた口が気持ち悪くなった龍望。二人はまったく対照的な顔をし、しかし互いにそれには気付かずにメグミたちや、村人たちのいるところへと戻っていく。

2－4（後書き）

「新連載、始めました。よかったらそっちもどうぞー。」
『軽く触れたところで今回の話。』
「龍望って意外にねちっとした性格してるよね。」
『紅月の中ではお金にがめつい、と言う時点で決定していた性格けれど。』
「前回、あれだけかっこいいサブタイみたいなのいっときながらグダグダだねー。」
『まぁ、言ってしまった以上仕方なかったみたいよ。』
「さて、それじゃあ、次回は？」
『えーっと。森へ向かうことになった救世主一行様。魔物が襲ってくる中、森の奥で見たものとは？』
「というわけで、次回。お楽しみにー。」

2―5

「だー、もうきりがねぇ！！」

ジェフが横に薙いだ剣に斬られた魔物が鮮血を飛ばし崩れ落ちる。四寿の村の人たちに頼まれてやってきた森。その名も四寿の森。狼のような魔物がいついているこの森に飛び込んでいったという人(馬鹿)を探しているものの見つかるわけもなく、救世主御一行の面子は魔物に襲われていた。

魔物に襲われているとは言えどそこまで強くない魔物に苦戦する筈もないのだが、数が半端なかった。実際にはそんなものは発見されてはいないのだが、その辺に魔物がわいてくるポイントでもあるのかと思ってしまうほどに、その数が減っているという印象が全くない。

「まったく、雑魚のくせに数ばかりいてムカつきますわ。《風よ》！！」

仲間(ハンナ)の攻撃にあわせてミールが動く。この辺のコンビネーションはさすがと言えるだろう。風の刃が襲い、あるものはいきたえ、あるものは命あれども体勢を崩したりしているなかをミールが小刀を構え駆け回る。

「でも、この数はやっぱり異常ですね。」

龍望が呟く。回復魔法に特化している彼は他のみんなほど戦えるわけではないがそんなことを言っている場合ではないようで、魔物の数を減らすことに専念している。

龍望の後ろ、一番魔物から遠いところにいるのはメグミだ。

「皆さん、下がってください。」
「わかりましたわ。《風よ》」

メグミの声を聞いてハンナの突風で魔物を牽制しながら全員が下がる。

「《神が授けし十字架は魔を貫き光の洗礼を与えん　その身に光宿し闇打ち払え　聖なる十字架（クロス＝クロス）》！！」

メグミの詠唱が終わると同時に空が、白く染まる。森が瞬く。
空から降ってきた無数の光る十字架が彼女たちに迫っていた魔物に突き刺さる。突き刺さって魔物を塵へと変えていく。それを見てメグミはほっとしたような笑顔を浮かべた。

「成功、ですね。」
「聖なる十字架（クロス＝クロス）……。」
「すごいですー。一瞬でしたよー。」

呆然とする龍望に対してミールはメグミに抱きついて騒いでいる。
あたりは魔物がいなくなったことで静かになっている。森には一切の影響が出ていない。

「一応わたくしも使えますが、あんなにも高密度、高威力なのは初めて見ましたわ。」

さすがは救世主様ですわね、というハンナにメグミは照れたように苦笑する。魔法は空気中の魔属粒子に干渉することで発動させるが、上位属性とされる光属性は基本、派生とは違い魔属粒子に干渉せず発動させる。それがとても難しいのだ。

一応、全部の属性―（闇をのぞく）を使えるハンナだが、光属性はあまり得意とは言えず、使えるというレベルでしかなく、戦闘中に使えるものではないらしい。一応ではあるが周りにもう敵がいないかを確認する。森に被害は出ていないが、魔物は消え去っている。おそらく光に浄化されたのだろう。

「闇に堕ちしものに光の戒めを。」

ハンナはそう言って手を組み黙祷する。

「ハンナさんは何をしているんですか？」

「メグミは初めて見るの―？

光信仰ってわかるー？あれはね―、それ独特のものなんだよー。」

「どうしてですか？」

「えー、あー、それは―……。龍望ー。」

メグミに説明しようとしたものの度忘れしてしまったミールはジェフを治療している龍望を呼んだ。ジェフの傷はかすり傷がほとんどでミールが声をかけたときにはもう治療は終わっていた。

「ああ、あれですか。

光信仰ーヨシュネア信仰とも言われますがーでは魔物とは闇に堕ちた人間であると言われているそうです。あの言葉の意味は『闇に堕ちた馬鹿な人間は神から罰を与えられて反省しろ』というものですよ。」

「へぇ。」

「そんな乱暴なものではありませんわ。『闇に誘われ、堕ちた魂よ。神の御心のもと清めの戒めをその魂に刻め。』と言っているのです。」

大して変わりませんよ。
いいえ、清めの戒めは罰ではありませんわ。
龍望の乱暴な解釈に腹を立てたのか、ハンナが食ってかかっている。ずっと続きそうな勢いではあったが、森の向こう、奥のほうから突如、威圧感を感じて押し黙る。

「おかしいですよ。だって、さっき魔物は消滅したはずなのに・・・。」

光の魔法は魔物を倒すのではなく、消滅させる。それこそ跡形もなく。なのに、この森にはまだ、何かがいると言うのだ。魔物が住み着いて、誰もいないはずのこの森に。まさかとは思うが、先日、四寿の村の少年を助けた二人組みによるものなのだろうか。少年と約束した以上、一応確認しないといけない。意を決して彼らは進みだした。メグミによる魔法に恐れをなしたのか、はたまた、もうこの森に魔物はいないのか、彼らが襲われることは威圧感のもとにつくまではなかった。
そこは広場。実は広場、と言うほどの広さはないのだけども、これまで木の根などによって不安定になっていた足場が、ここでは平らな地面になっていた。不思議な空間である。森特有の暗い感じがありながらも光が射していて、清らかな感じがする。

「ここはー、なんなんでしょー?」
「空気がいいのは間違いないぜ?」

ジェフが大きく深呼吸をしている。

「確かに、きれいです。でも、きれいすぎますね。」

龍望の言葉にジェフは首をかしげる。

「それの何がいけねえんだ?」
「きれいすぎる、ということはここには魔物ではない何かがいるということですわ。」

全く、という感じに肩をすくめてハンナが説明した。きれいすぎる空気。魔物には作ることはできないし、人にしてもメグミほどの光属性の使い手でないとできないだろう。
空気がきれいであるというのは、清められているということで、それは魔属粒子すら清められていることを意味する。清められた魔属粒子はなにもしなくても魔物に対して協力な結界になる。
いったい、誰がこんなところにいるのだろうか、そう思ったのが誰かはわからないが、答えが帰ってきた。というかやってきた。

「何故、ここまで来た?」

それが言葉を発するだけで地面に叩きつけられるような威圧感に襲われる。すぐに理解できた、これは人ではないと。

2－5（後書き）

「魔属粒子って光属性の影響を受けないのに清めることができるの？」

『その辺のことは二章の章末でやるそうよ。』

「それにしても前回の次回予告もどきは達成できたと言えるのかな？」

『一応できたんじゃないかしら。紅月はさほど気にしてないみたいよ。』

「あー、ちょっとした連絡です。今回から少しタイトルが変わっています。」

『あらすじもね。単純に紅月のミスなのだけど。』

「活動報告のいいネタだって言ってたから詳しく知りたい人はそっちまで。」

『内容に大きな変化はないわよね。』

「てか、改稿しようと思っても紅月にその暇がないし。」

2―6

「何故、ここまで来た？」

そう尋ねてきた男の服装は簡素なもので布一枚で全身をゆったりとおおっている。黒の髪と瞳は森の薄暗い闇のなかであっても、淡く発光しているようだ。威圧しているつもりが向こうにあるのかはわからないが、その言葉だけで彼らは地面に膝をつけてしまうような重さを感じる。

「あなたは、何者ですか？」

尋ねたのはハンナだ。金色の瞳をじっと男に向けている。

「魔属粒子すら清めてしまうなんて、人間にはなかなかできることではありませんわよね。」

感心したように男が目を細める。

魔法を使う、という行為は空気中にある魔属粒子に干渉することを言う。魔力は魔属粒子に干渉するための力であり、形を持たない魔属粒子に形（属性）を持たせるための力でもある。また、人によって魔属粒子に与えられる属性には幅があるし、形を与えられる範囲も違ってくる。魔属粒子に属性を与えて魔法を放つことならば、魔力の使い方をわかっている術者には容易なことであるが、魔属粒子に属性を与えずにその状態を変えるのは、全属性を扱えるハンナであってもできることではない。世の中にはそれができる人間もいるらしい。龍望が昔会ったと言っていたが太陽（フィア）のランクらしいが、あれはもう人間と言えるか微妙な領域だったとか。幸か不幸か、ハンナは会ったことがなかった。

一方、尋ねられた男は答えるためにか、口を開くが、何も言わずに口を閉じる。

「馬鹿に、してらっしゃるんですか？」

「……。」

相変わらずの重圧が続く。拮抗とは言えない沈黙を破ったのはメグミだった。男を睨み、けん制するようにしながらであった。

「ここに、最近人が来ませんでしたか？」

「何故、それを問う。」

「四寿の村の子供を助けてもらったそうで、その子供がこの森に入ったことを心配していたので。」

「ふむ。」

顎に手を当てて考え出す男。考えていて意識がメグミたちから離れたせいか、重圧が無くなる。その瞬間にジェフとミールが斬りかかったが、男をすり抜けてしまう。それを見ていたメグミ、ハンナ、龍望は驚いていたが、それ以上に衝撃を受けたのは斬りかかったジェフとミールだった。なぜなら、男を斬ったという感覚が二人にはしっかりと感じられていたのだから。

あまりのことに全員が呆然としているなか、何もなかったかのように考えるのを終えた男がメグミに声をかけた。

「お前は何者だ？」

「私は佐野恵。救世主です。」

「そうか、ならば……。」

男が指を鳴らすと先程の重圧が襲ってきた。だが先程のはなんとか立っていられるというものだったのに対し、今回はあっさりと地

面に押し付けられてしまう。

「何しやがる！！」

怒るジェフを冷ややかな目で男は見る。それに気圧されたのかジェフは押し黙る。

「おそらく、お前たちが探しているだろう者たちなら、つい先程この森を出ていった。」

「それじゃあ、こんなことをする説明になってませんよー。」

「それでだ。娘の方に頼まれたのだ。もしも、自分を追って誰かが来るならそいつを最低でも三日の間、ここで足止めしてほしい、とな。別に貴様らが救世主一行だからというわけではない。」

メグミが救世主だと聞いた後の行動だったためか、男はそう弁解する。が、その弁解がメグミたちには余計に白々しく感じられたのは向こうに行動を起こされたからだろう。

「その娘の名前って、ナギじゃないですか？」

「何故、その名を……。ああ、助けられたとかいう村の子に聞いたのか。」

メグミの問いに驚いたのか、軽く目を見張りながら男は頷いた。メグミもまた、目を見張りそして悔しそうに唇を噛んでいた。四寿の村の子供を助けたというその人物に礼を言えないのがそんなに悔しかったのだろうか。

「救世主、メグミと言ったか？　貴様、なぜあの娘を追う？　ただ、礼を言う、安否を確認するというだけにしてはえらく固執しているように見られるが。」

「そんなこと、あなたに言う必要はありません。」

確かに、それもそうか。と頷き、男は続けた。

「何故、あの娘が逃げ、お前が追うのかは知らんが、頼まれた以上足止めはさせてもらおう。なに、そちらがなにもしなければこちらもこれ以上のことをする気はない。」

それだけ言うと男は姿を消した。残されたメグミたちは、色々と（光魔法やらハンナの最強魔法など）試してみたのだが、全てが無意味に終わった。結果、この拘束から逃れる術は無いという結論にいたり、ただおとなしくしているしかなかった。

「それにしても、アレはなんだ？」

アレ、とは先ほどまでここにいた男のことだろう。確かにそう問いたくなるような存在であったと言えるだろう。

「知らないですよー。でも、私たちの敵ですー。」

「いえ、彼は僕たちの敵ではないはずです。『頼まれた以上』とも言っていましたし、これは彼自身の意思ではないと、僕は考えますね。しいて言うならナギという少女の味方であると見るべきだと思いますよ。」

「なら、あれじゃないのか？　えーと、そう。そのナギってやつが魔物なんじゃねえの？」

「それは、違います。」

何気ないジェフの言葉。ジェフ自身は、救世主の邪魔をするのは世界中でも魔王を殺されて困るのは、その魔王の命令に従っている魔物しかいないだろうと思っての言葉だったが、メグミがそれに強

く反発した。

「メグミはどうしてそう思うんですー？」

ミールの疑問は当然の物である。メグミに四人の視線が集中する。

「それは……そうですね。まずは、魔物なら人を助けないと思います。それに、先ほどハンナさんが言ったようにここの空気はきれいなので魔物にはつらいかと思います。

あと、これは空雅さんから聞いたのですけど人型の魔物は発見されてないそうですから。」

魔王が現れてから魔物の動きは活発化したが、人と魔物の戦いの歴史はそれなりに古い。そこまで頻繁にあったわけではないので魔王が現れるまでは国の防御も最低限のものだった。皇国の首都の砦を調べればわかるが、あの砦はそこまで古いものではない。そして、過去の記録や、現在の研究、観察によっても人型の魔物というのは発見されていないため、いないという意見が多数を占めている。

多少の間を不思議に思いつつも、メグミの回答に納得する。　そこから三日の間は特にすることもなく、過ぎていった。三日の時が経っているのかは彼ら自身では判断できていない。太陽の光を確認できないほどに葉が茂っていたのもあるし、空腹を感じることもなかったのだ。眠くはなったが、三回眠る＝三日経った、ということにはならないと考えていたので男が再び現れて三日経ったと言われてはじめてそうだと理解したのだった。

「頼まれ事とはいえ悪いことをした、体に支障はないか？」

その問いに全員が首を布留。何も食べていないのに調子は悪くない。むしろ森に入った頃よりもいいくらいになっている。

「ならば、今から貴様らを森の外まで送ってやろう。入ってきた場所に飛ばしてやるから後は好きにするといい。」
「わかりました。最後に一ついいですか？　ききたいことがあるんですが。」
「なんだ。」
「この森はかつて十寿（トス）と呼ばれていたのではありませんか？」

男は驚き、その後にしてやったりというような顔をして、龍望の問いにそうだと答えた。

「他に何かあるか？」
「いえ、それだけ聞ければ満足です。」
「そうか。では今、きっと貴様の中である結論に至っただろうがその事をあの村の者たちに言うことは許さん。仲間にも、目上の者であっても尊敬する人物であっても誰一人にもそれを話すな。」
「わかりました。そうしましょう。もともとこの質問は僕の好奇心を満たすためだけの物ですしね。」

龍望がその返事を言った直後に景色が切り替わる。辺りを見てみるにどうやら男が言っていたように、メグミたちが森に入ろうとした所のようだ。

メグミたちはそこから四寿の村へと戻る。道中、何度もあの問いの意味は何だったのかと龍望に尋ねたが、龍望はあの男に言われた通り一切答えなかった。

龍望が説明をすると言って村の人には「会えなかったけれど、それらしい死体も見なかったのでおそらく生きているのではないか。」ということを伝え、森のなかにいた男のことは一切話さなかった。

村の人は感謝をしてくれて、彼らを丁寧に見送った。

馬車の中で、村で待ちくたびれていた虹牙に怒られながらも、彼

らはカロンへ向けての旅を再開した。

2－6（後書き）

「紅月が風邪ひかなければ昨日更新する予定でした。すいません。」
『それにしても、今回の話なんだけど。メグミたちって結構強いのよね？』
「らしいよね。メグミはこの世界では中の上ほどで、他の面子は得意分野に差があれども上の方だって言うことらしいよ。」
『それを一瞬で戦闘不能にもっていける男って一体何者なのかしら？』
「さあ？でも間違いなく人じゃないでしょう。」
『アレが人だというなら世の中の人がびっくりするでしょうね。』
「それは、まあ、そうだろうね。ボクらはこの話には出演予定は全くないしね。」
『つまらないわ。』
「いいじゃん。なんかボクが主人公の話を考えてるみたいだし。二次創作だけど。なんでも、普通にやるとチートすぎて話にならないとか。」
『ああ、そういうこともあったわね。本当に書くかはわからないけど。』

「で、次回は？」
『次回はナギたちのほうに視点が戻って、二章終了という流れのようよ。』
「話は長くないけど、長かったね。」
『あんまり言っちゃだめよ。紅月本人も悔やんでるんだから。』
「それではまた次回。」

2―7

一寿（イス）に生まれて二寿（ニス）で言葉を覚えて、三寿（ミス）で友達を得ては四寿（ヨス）で勉学を共にする。五寿（ゴス）でさらに成長し、六寿（ムス）で生涯の伴侶を得て七寿（ナス）で子供を得て、八寿（ヤス）で子を育て、九寿（クス）で子に看取られて十寿（トス）へと向かう。

「こんな話、と言うよりも伝承の方が近いですかね？　まあ、どっちでもいいんですけど、とにかくこんな話があの辺にはあったんです。」

そう説明しているのは龍望ではなく、救世主一行を足止めさせたきっかけとなる人物、ナギである。本人はまさか、救世主を足止めしたなんて思ってもいないだろう。

「あった、てのはどういう意味だ？」

尋ねるのは当然ながら彼女の旅の道連れ仲間、ニミウスである。彼らはメグミたちがカロンに向けて再出発した頃には国境を越えてカロンに入っていた。森で出会った男が結構な距離を飛ばしてくれたのだ。

現在はちょっとした丘を登っている最中である。この辺は起伏のあるところが多いが、道は整備されており道沿いにいくつも店があるため通る人は多い。

「昔はあの森を囲むようにして九つの村があったそうですが、今は四寿の村しか無いんです。」

話自体が残っていても、それを覚えている世代がもういないとの

ことらしい。ナギも古い本を見て知っていただけらしい。何があって、他の村が消えてしまったのかもよくわかっていないらしい。ナギは四寿の村についた時点で記憶に引っかかるものがあったそうだがきちんと思い出したのはついさっきのことで、思い出したように急に話しはじめたのだった。

「かなり昔のことだそうで、あたしが見た本には神の怒りに触れたのではないかと。」

「神？」

「ええ、十寿の森には魂を守る神がいて周りの村はその神を信仰していたそうです。ですが光信仰の神がそれは邪神でありそれを信仰する民は災厄を世界に与えると言ったそうで、制裁を行ったとか。」

「なんか神が絡んでるわりにはどろどろとした話だよな。」

ニミウスの感想にナギも同意する。神というのはもっと器の広い存在だと思っているのだろう。だが、ナギの話が本当だとしたら。

「じゃあ、あの森にいたあの人は……。」

「おそらく十寿の森の神なのでしょう。」

あの男がいなかったらナギたちはあの森で、魔物たちに食い殺されていただろう。感謝してもたりないくらいだ。

丘を登りきったところで強い風が追い風となってナギたちを追い越していく。まるで急げと言わんばかりに。

「ナーギーちゃーん。」

「おにいちゃーん。置いてっちゃうよー？」

前方からかけられた声をうけて、二人は駆け足で丘を降りていった。

２－７（後書き）

「『勇者未満』のＰＶ２５０００越え！！」
『『世界は』のＰＶも１５００を超えたわね。』
「というわけで今回はそんなことを記念しつつの同時投稿だよ！！」
『興味があったらぜひ『世界は』も読んで欲しいわ。』

「さて、アピールも終わったところで今回の話でもしようか。」
『紅月が書いてないだけというか説明しきれそうになかったから書かなかっただけだけど、皇国の首都から王国へはそこまで遠くないそうよ。』
「どのくらい？」
『徒歩なら五日から一週間。馬車なら遅くとも二日あれば国境を越えることができるそうよ。』
「と言われても、あんまりピンとこないんだよね。」
『それは紅月も一緒のようよ。必死に計算してたから。』
「まぁ、最後の方は面倒になってたんだけどね。ああ、そういえば。」
『なに？』
「二章ってこれで終わりじゃない？」
『ああ、そうね。』
「ここまで読んでくださった方に感謝しつつ今回はここまでってことで。」
『これからもよろしくお願いします。』

2章用語集（主に救世主サイドの紹介）

二章終了したので登場人物の紹介とか。
これがない、あれがない。
違っているなどあったらすぐに教えてください。

佐野恵
メグミ・サノ
職業　救世主
武器　特になし
使用魔法　光

どこからどう見ても皇国の人間にしか見えない救世主様。それでも異世界人。身体能力は中の上、魔法能力は上に位置する感じ。使用魔法の属性は光のみというこの世界ではまずありえないことになってる。
この世界では基本は誰もが使える資質あり。派生（地・水・火・風）は素質があれば使えるかも。上位（光・闇）は素質があっても使えないかも、ということになっています。
そして、上位を使うには基本的に基本、派生（雷・氷）が使えることが前提になっています。ゆえにメグミの属性ってのは常識的におかしい。でも、彼女の仲間は救世主だからで納得している。

ハンナ・ガボット
職業　魔法使い
武器　杖（魔力効率を上げるため的な用途）
使用魔法　地・水・火・風・雷・氷・光

体術はできるだけという完全に魔法使い、後衛タイプ。使える属性が闇以外というのもそれにさらに拍車をかけていたりする。治癒

魔法も一応使えるけど、龍望には及びません。光魔法の威力もメグミには負けます。
ちなみにギルドでのランクは月（ルナ）。二つ名は『四季の絵描き』。

ミール・エミシュード
職業　弓士
武器　弓、短剣
使用魔法　特になし

体術ができてすばやいという中衛タイプ。ただし魔法は使えません。本人は弓使いだと言うけれどメグミと旅に出るようになってからは前衛が少ない、後衛のほうが多いという感じの理由からジェフとともに前衛として戦うことが多く、弓の出番はあまりなかったりする。
ギルドでのランクは星三（トリプル）で二つ名は『距離なき弓矢』。

ジェフ・ゴーディ
職業　剣士
武器　剣
使用魔法　特になし

体力馬鹿、速度普通、魔法使えず、筋骨隆々というどこからどう見ても近接戦闘タイプ。魔法が使えないから星三（トリプル）なだけだとも噂されているほどには強い。ただし、馬鹿。打たれづよい。
ギルドでのランクは星三（トリプル）、二つ名は『戦鬼』。

郷龍望（ゴウ・ロンホウ）
職業　治癒術士
武器　特になし
使用魔法　水（ただし治癒術に大きく偏る）

おそらく、一行の中で一番頭がいい。無神論者なのでハンナとはよく光信仰について口論になる。水魔術は使えるが、その使用用途は治癒術ばかりである。お金にがめつい。預金がどれだけあるのかは誰も知らない。

水魔術は水(血液)を操ることができるために治癒術に使われることが多い。血流を操作し、体内の治癒のサイクルの循環を早めるとか。

ランクは星三(トリプル)、二つ名は『欲深き癒し手』。

以上、救世主一行の面子になります。もしもゲームでパーティ組んだらおおよそ成り立ちますね。正直、メグミは前衛でもいいと思うけど、光魔法の発動に時間と集中力がいるので後衛に。魔法はキャラのところでちょっと書いてますけど後述で補足というかきちんと説明します。

その他人物

虹牙(コウガ)

皇国では南宮皇(ナングウコウ)という地位についている。略称は南宮。

皇国では継承権一位の地位から、東宮、西宮、南宮、北宮の順に四人の皇位継承権を持った人物がいる。虹牙は第三位。

性格は俺様、世界は俺様を中心に回っていると思っているタイプ。人は自分のことを聞いて当然と思うタイプ。

森の男

十寿(トス)の森の神様。魔物を倒すための力は持っていないが魔物が寄り付かないように魔属粒子を浄化したところで暮らしている。本人は時折、無謀にも向かってくる魔物の相手をしているだけで退屈ではないとか。

もともと持っている力は神の中でも微々たる物で、信仰によって

更なる力を得る。信仰がほとんどなくなった今、その力は最低限でしかなく、森全体の魔属粒子を清めるほどの力はない。

以上、二章の登場人物でした。

土地とか

四寿（ヨス）の村

皇国北部にある村。それなりに人がいて、それなりに成り立っている普通の村。ただし、ここには昔、光信仰とは違う体系の宗教があったとか。何でなくなったかはいまいち不明。

そして、他にも似たような村があったが、それらもなくなっている。それを覚えている世代は四寿にはもういないので誰も知らない。

森

今では魔物の住処となっている、誰も名前を知らない森。とは言ってもこの森に住む魔物はそのほとんどがメグミの光魔法によってやられてしまったが。

昔は十寿（トス）の森と呼ばれていて、神が住んでいる。

土地はこんなもんですな。ちなみに、四寿の村までは馬車で一日。徒歩で二日から三日。ここからさらに馬車で一日ほどで国境を越えることができます。

魔法について

・治癒魔法

治癒系は水魔法に分類されます。

水を操る要領で血液を操り、回復へのサイクルを早める働きがあ

る。

・光魔法

上位属性なので基本的には最強の部類に入る。魔法の一つ一つが高威力。イメージは消滅。

対抗する方法は基本、派生属性で高威力魔法を撃つか、闇属性の魔法を撃つかになる。もちろん威力が光魔法より弱ければ消滅する。

基本的に魔物にはものすごくよくきく。でも、強い魔物には耐性ができるらしく、相手によってはきかなかったりもする。

ということで二章は終了となります。気づけばＰＶが２５０００越えててビックリもしましたがそれだけ読んでいただけて嬉しい限りです。これからもよろしくお願いします。

3－1　カロンにて

「で、どうして街道から外れることになったんでしたっけ？」
「俺が街道を歩いてると俺を追っているやつらに見つかりやすくなるからだって言った気がするけど。」
「そうですよね。確かにそうでしたよね。でも……。」

そこまで言ってナギは体をプルプルと震えさせて叫んだ。

「魔物に囲まれちゃ意味無いじゃないですか！！」

街道から少し外れたところにある森の中にナギの叫びが響き渡った。それを聞いたニミウスがナギの頭をはたく。

「なにするんですか！？」
「馬鹿か？馬鹿なのか？お前は！！
お前が叫んだせいでまた魔物がよってきたじゃねーか！！」

つい先程まで彼らは魔物と戦っていた。ようやく一息ついた。つまりはそんなときだったのだ、今は。ナギの叫び声が聞こえたのか魔物が集まってきた。森にいる動物のように四足獣の姿をしているものが多い。ニミウスは寄ってきた一匹を切り捨てた。後ろではナギが気分の悪そうな顔をしながらも魔法を魔物にぶつけて、殺している。

ナギには、どうやら血なまぐさい経験をしたことが無かったらしい。そのせいか、森に入って襲われ、命を守るためとはいえ、魔物を殺した日には胃の中のものを嘔吐していた。今は、まだ慣れていないようだが、それでも、踏ん切りはついたらしい。

「くそっ。このままじゃきりが……うっ。」

油断していたわけではないようだが、ニミウスの腹に一体の魔物が噛みついた。ナギが慌てて魔法を放ち、魔物を殺すことでニミウスから引き剥がすがその傷は深かったようで、ニミウスの動きが鈍り、その場に崩れ落ちる。

「ニミウス！！」

ナギは急いでニミウスに近寄る。魔物たちは手強かった男は戦闘不能、残っているのはただの魔法使いと見たのか一斉に襲いかかった。

「くっ……『集え、風よ。形成（カタナ）すは竜巻』！！」

ニミウスを浮かばせて竜巻で魔物の群れの一点突破するようにして逃げる。だが、さほど体力のないナギに魔物たちはすぐに追い付き襲いかかる。ナギはニミウスを守るようにしてニミウスに覆いかぶさる。ナギの方が上、というか魔物たちにとっては近くなるので、必然的にナギの方に攻撃が集中する。

（ああ、これは、もうダメかもしれませんね……。）

彼女の体から、力が抜けていく。恐怖に怯えるように力強く閉じていたまぶたに力が入らない。

「ごめんなさい……。」

誰に向けたのかもわからない言葉。そう呟いたのと同時に、完全に気を失ったのかナギの体から完全に力が抜けた。

◆◇◆◇◆◇◆

ガバッとナギが起き上がる。ここは森ではなくカロン王国の王都付近の宿屋の一室。右、左と辺りを確認する。横のベッドで何もなかったように寝ているニミウスも確認すると再び横になり、眠りについた。

夢でよかったと安堵しながら。

◆◇◆◇◆◇◆

カロン王国の王都であるエリクシナは高台の上に存在する王宮を中心にしてできている。エリクシナの端の方へ行けば気にならないがそれなりの傾斜が存在している。そのためか、王都内の移動手段は徒歩が主流となっており、人件費が多少かかったとしても荷物は馬車を使わずに運ぶことが多い。風魔法を使える者がいれば重宝されるが、運搬には大量の魔力を必要とするためあまり使える人数はいない。

「本当にありがとうございます。」

「いえ、いいのよ。荷物を持ってもらえてこちらとしても助かっているもの。」

「運んでいるのは私なんですけどねー。」

「だってお前、実はものすごく魔力が多いだろ？　それを有効利用しなくてどうする。」

風魔法を使って物を運ぶ場合、魔法の発動の維持に魔力を消費するのだがこれが結構大きい。ニミウスは十寿の森でナギが歩かず魔法で浮いて移動しているのを見て気づいたのだった。

ナギが恨めしそうにニミウスを見る。だが、ニミウスも何もして

いない訳ではない。ニミウスの両手の先には子供が二人。どちらも黒髪黒目、よく似ていることから双子だとうかがえる。

「ねえ、みーちゃん。新しいおうちに着いたら何しようか。」
「んー。探検しよう！！　ゆーちゃんと一緒に秘密基地作るの！！」

きゃっきゃっと楽しげにしゃべる二人は、先程の女性の娘で、優華（ユンファ）、明華（ミンファ）という。

母親である優明（ユウミン）が住み込みでこのエリクシナの貴族の家で働くことになりカロンへと移動している最中、魔物に襲われていたのをナギたちが助けてからここまで一緒に行動している。

しかし、この双子、あまりにも似すぎているので着ているものも一緒なので髪を結んでいる場所の違いでしか見分けがついていない。右下で結っているのが優華、左下で結っているのが明華である。

「じゃあ、ナギちゃんもおにいちゃんも一緒にやろ？」
「とりあえず俺たちは宿を探してからな。」
「「えー。」」

見事にハモった二人のブーイングを受けて優明が二人を叱るが二人はどこ吹く風と気にせずにブーイングを続けている。やがて、一つの屋敷の前で足を止めて深呼吸をする優明。話を聞くと昔からの知り合いだと言っていたけれどもそこまで緊張するものなのだろうか。

門番に話を通してもらって中へ入る。ナギたちはついてきただけだし外で待っていると申し出たが、その意見は優明の半泣きのような顔によって無かったことになった。

本当にどんな人なのだろうと思いつつ、案内された部屋で屋敷の主を待っているナギとニミウス。優華と明華は辺りのものを興味深そうに見つめており、優明は娘たちがそれらを壊さないかと不安そ

うに見つめていた。

「お待たせいたしました。」

やってきたのは彼らを案内してくれた執事。執事と言っても世間一般の年老いたイメージと違い、こげ茶色の髪を持つまだ若い青年である彼は主である人物を呼びに行っていたのだ。そして現れた主はこれまた貴族のイメージとずれていた。

その職業柄をのぞき、着ている衣が薄かったり少なかったりすると貧しいという価値観があるため裕福であろう貴族は着飾っている、というのは皇国でも王国でも変わらないのだが目の前の人物が着ているのは必要最低限だけである。野暮ったい服装に、大きな丸めがね。髪の毛はぼさっとしており、まるで寝起きのようだが目はしっかりとしているので寝起きということはなさそうだ。とても貴族には見えない彼は優明を見ると顔をほころばせた。

さらにそのまま突進してきた。

「会いたかったよ、マイスイートハニー、優明!!」

「「ハニー!?」」

優明はびくっと震えると一歩下がったが突進してきた彼には一歩分など関係なかったらしくそのまま抱きつかれる。そういう遊びだと思ったのか娘二人も優明に抱きついていたが、ニミウスとナギはそれを引き剥がすこともできずにただただ、呆然としていた。二人は気付いていなかったが執事も言葉をなくして唖然としていた。

3－1　カロンにて（後書き）

「始まりました、第三章！！」
『また濃そうなキャラクターが……。』
「はじめは厳格なイメージな貴族だったはずなのにね？　何でこうなったのかは紅月も不明だって。」
『ま、まあ「なぜこうなったし……。」とか言ってたらそうだろうなあとは思うわよ。』
「なんにせよ、この三章は長めになる予定です。いろいろとやりたいことがあるんだそうで。」
『やりたいというよりもやっておかないと困る、の間違いじゃなくって？』
「んー。そんなことも言ってたよ。」
『ところで、この貴族って何者？　優明の旦那様？』
「さあ？」
『……。』
「無言で大魔法展開しても知らないから答えられないよ！！」
『わかってるわよ。それではいつになるかわからない次回で、また会いましょう。』

3―2

「いや、失礼。優明がきたと聞いてうれしくなってね」

優明に抱きついた貴族の男性はそう言ってナギたちに謝った。優華と明華はまだ優明に抱きついてはしゃいでいる。あのあと、我に帰った執事が無理矢理引き離して落ち着かせたのだった。

そして、その執事が体を二つに折りたたむ勢いで頭を下げていた。

「すみません。なにぶん私も初めてのことだったので対応が遅れてしまいました。まさか、主人がこんなにも危ない人だとは思ってもおりませんでした」

さすがに怒る気もないらしい優明は苦笑いであった。それに対して主人である貴族の男性は危ない人ではないと異論を唱えている。

そんな男性を無視して被害にあっていない客人たちであるナギとニミウスにも、見苦しいところをお見せしました、と頭を下げる執事を見ているとなんだかこっちがいたたまれない気持ちになってくる。執事はそのままお茶を用意してきますと部屋から出て行こうとする。

「そこのお二方、すみませんが主人がまた暴走したら止めてください。殴っても、蹴っても、魔法を使っても構いませんから」

「え？　いいんですか？」

「はい。多少のことでその馬鹿は死にませんので」

ナギの聞き返しにさらりとひどいことを言ってのけて執事は部屋から出て行った。呆然と見送るナギ、ニミウス、優明。

「ゆーちゃん。お茶だって」
「じゃあ、お菓子も出てくるね、みーちゃん」

無邪気にはしゃぐ優華と明華の二人とうきうきとしている貴族の男性。ナギたち三人は大仰にため息をついた。

◆◇◆◇◆◇◆

「お茶をお持ちしました」
「戻ってきたし、それじゃあ、自己紹介といこうか。俺はレイス・ルデル・エンテンシア。この国では男爵の爵位をもらっている。で、こいつが……」
「執事、と言うよりもこの人の身の回りの世話をしております。ルーヴル・チェスです。ルルと呼んでください。あと敬語などは無理して使わなくてもよろしいですよ」

初対面の人に愛称で呼ぶこと、タメ口でいいなどを自ら申し出るのは、貴族間では恥ずべき行為だといわれているがそれを気にせずにルルはお茶を注いでいった。
お茶のいい香りが部屋に広がる。あまり香りが強くなく、味も軽い万人受けする銘柄のそれを執事が次々とコップに注いでいく。優華と明華はお茶よりも平皿に盛られた沢山のお菓子のほうに興味があるらしく熱い視線をそちらに送っている。

「それで、あなた方は？」

ルルがナギたちに目を向ける。そこでナギたちは名乗っていないことに気付いて慌てて自己紹介をする。

「あたしはナギといいます。そこのニミウスと一緒に旅をしていま

す」
「俺がニミウスです」
「私は杏優明（キョウ・ユウミン）です。今日からここで働かせていただくことになっているはずです。それとこの二人は私の娘で優華と明華です」
「ゆーちゃんなのー」
「みーちゃんなのー」

優明の紹介にあわせてお菓子をつまんでいた二人は手を上げて自己紹介をする。敬語はいいと言われていたためか口調はかしこまったものではない。優華と明華はもともとかしこまってもいないのだが。

自己紹介がすんだ後、双子はまたお菓子を食べ始めた。ルルは優明にいくつか質問をしてそれがすむと、契約書と働くに当たっての注意事項ですと言って紙を優明に渡した。優明がそれを読んでいる間に執事はナギたちに主人であるレイスが先ほどのような変なことをしでかさなかったかと聞いてきた。

「何でそれを俺に聞かないかな？」
「お客様に聞いた方が間違いがないので。」

先ほどからの主人に対する態度には変わりが無く、その態度に面食らいながらも変なことは無かったことを伝えるとえらくほっとしていた。この主人は当たり構わず奇行をする人物なのだろうかと不安になってくる。

お茶を飲んでしばらく話をする。どうやら主人は同行していた唯一の男性であるニミウスに優明との関係をしつこく追及していた。はじめはけんか腰だったもののニミウスと優明がそういった関係ではないと知るとあからさまに態度が優しいものになった。

「あの、あたし気になることがあるんですけど、さっきのマイスイ

ートハニーってどういうことですか？」
「確か、俺たちは優明の旦那はヴァダリアの人だって聞いてたけど。」

優明の旦那はヴァダリアの出身だと優明本人が言っていた。旅の途中で何度も旦那の話を聞いていた。事故で亡くなったとも。とニミウスとナギは出会い頭の主人の反応に疑問を抱いていた。

「よくぞ聞いてくれた！！　優明は俺の初恋の人なのだよ！！」

何でも、昔のことだが皇国にレイスが行った時にであって一目ぼれしたとか。何度ももうアタックをしていくうちに、その時の優明はすでに結婚していて双子を授かってすぐのタイミングであったことを知り、おとなしく身を引いたのだとか。実はこの時点ですでに優明はレイスに苦手意識を抱いていたことはレイス自身も知らないことである。

身を引いたと言っても、やはり愛する人のために少しでも何かをしたいと思ったレイスは王国にある自分の家の住所を教えて困ったら連絡してくれと、必死になって頼み込んだらしい。そして旦那が不慮の事故で亡くなってしまい、日々を暮らしていくだけの収入がなくなった優明が連絡を取ったとの事らしい。優明曰く、かなりの葛藤があったらしいが……。

「さて、それじゃあ、俺からも聞いていいかな？」
「なんですか？」
「ナギと、ニミウスって言ったよね」
「はい」
「君たちの姓（ファミリーネーム）は？」

普通ならば名乗るはずの姓を名乗らなかったことへの疑問だった

のだがその問いに対する二人の返答は次のようなものだった。

「ありません」

「言いたくない」

上がナギ、下がニミウスのものである。それを聞いたレイスは首をひねりぶつぶつと何かを言っていて、さらに何かを言おうとしたがちょうど優明が契約書にサインをしてレイスに渡したことでうやむやになった。

それからしばらくはお茶を飲んだり喋ったりしていたが、双子のお菓子がなくなったという言葉を合図にするようにレイスが立ち上がった。

「それじゃあ、俺が優明たちを案内するから後片付けよろしく」

「くれぐれも変なことをしないでくださいね」

「じゃあ、俺たちは宿を探しに行くか」

「そうですね」

ニミウスたちも立ち上がった。とりあえず今日の宿を探さねばなるまいと急ぎ足になる。外は夕日が沈みつつあり、空は赤くなっていた。そんな二人にルルが声をかけた。

「宿が見つからなかったらまた来てください。部屋ならいくらでもありますから」

ここは王国首都であるエリクシナである。首都なので必然的に商人や旅人、ミルフィアに所属する人間が多く集まるが、そういうところならばそれだけの人数を余裕を持って迎えることができるくらいの数の宿があるはずである。二人はそんなことはないだろうとルルに返して屋敷を出た。

なんとなくルルに笑われたのは気のせいだろうと思いながら、登ってきた坂を下りながら宿屋を探す。一時間ほど後に、エンテンシア男爵邸の前に二人は戻ってくることになったのだが……。

3－2（後書き）

「哀れ初恋。それでも引き下がらないとは……」
『まあ、優明が助かっているのだし何も言う気はないわね』
「ちなみにレイスのミドルネームであるルデルは男爵であることを示しているんだって」
『ふぅん』
「まあ、要は貴族の中でも下の方だって事だね」
『それ、何か大事な伏線？』
「さあ？」

3―3

信じられないという口調でニミウスは宿がなかったとルルに言うと、ルルはわかっていたかのように（実際わかっていたのだろうが）部屋を用意してありますと二人を部屋に案内した。

「ナギさんはこの隣の部屋になります。食事は先に済ませてしまいましたので今夜はこれだけになりますが……」

食事は同じ部屋で食べていただけますかと言われて出されたのはパンと具のないスープ。明日の分は明日にならないと作らないらしい。

「いえ、お構いなく。あたしたちの方が迷惑をかけているのですし、ありがたいくらいです」

ナギは迷惑をかけているせいか小さくなっている。

「どうして宿が取れなかったんだかわかりますか？」

ルルの質問に二人は首を振る。その顔は全くわからないと言っている。

意地悪く笑うとルルは少し自慢げに説明をしてくれる。

「この時期はミルフィアが行う闘技大会があるんですよ」

あっ、という顔をしているニミウスとぽかんとしているナギの顔のギャップが面白くて気を良くしたのか、それとも続けるつもりだったのか説明を続ける。

「毎年、皇国と王国で交互に開かれていますが今年は王国で行われるんですよ」
「ああ！！　そういえば一年おきに周りがざわついていましたね！！」

ナギもその闘技大会の期間のことを思い出したらしく手を合わせて空雅が言ってましたね、と言っている。

「おい、見たことがないのか？」
「だってそういうのを見に行く暇が無かったんですから仕方ないじゃないですか」

カロンに入るまでの旅の間にだいぶ庶民らしくなっていたのでナギが貴族の娘であると考えていたことを忘れていたが、この発言によってそれを思い出す。

（あ、そっか。貴族の娘がそんなところに行っていたとなると外聞に響くから行かせてもらえなかったのか）
「ニミウスさんは見たことがあるんですか？」
「まあ、何度か」

ニミウスが一人で勝手な結論を出して、見たことがあるとおざなりに言うとナギは不機嫌そうに頬を膨らませた。おそらく自分が見ていないのにニミウスは見たことがあるというのが気に入らなかったのだろう。

ルルはそんなナギのことを気にせずに、今年は救世主様の一行からも出場するそうだと言った。

ナギがありえないことを聞いたというような顔をしたが、ニミウスはそれを聞いて興奮し気付いていない。

「本当か？」
「ええ、いつもならそろそろ始まっていてもいい頃なのですが、まだ始まらないのは救世主様たちの到着が遅いからだと噂されています」

ニミウスは考えた。もしもこの大会で救世主一行に実力を認めてもらえたならば、彼らの仲間になることが可能ではないかと、諦めきっていた可能性が再び目の前にぶら下がったのではないかと。

「ところでルルさん」
「何でしょうか」
「参加に条件とかはあるのでしょうか。それに優勝したら何かもらえるのでしょうか」
「ミルフィアに所属しているなら誰でもできたと思います。細かい条件はなかったかと。あと優勝したら五百ギリアムが賞金として」
「出ましょう！！」

ルルの言葉をさえぎって大声で出場を表明するナギ。路銀自体はナギの手持ちがかなりの額として残っているがあるに越したことはないということらしい。

ルルはこの二人がミルフィアに所属していると知って驚いたようだ。おそらく、ナギみたいな娘が出るという方が驚きだったろうが……。

「ミルフィアに所属してらしたんですか」
「そうです。まだ一度も依頼は受けていませんが……」

皇国領内にいた頃は国境を越えることに、王国領内に入ってからは優華と明華に付き合っていてほとんど、というか全く依頼を受け

ていない。
もし大会に出るとしたら、実力は出場チームの中で最下位に位置づけられるだろうし、優勝も不可能に近いだろう。そんなことも気にせずにナギは五百ギリアム手に入れますよと意気込んでいる。
不可能だとわかってもらうためにルルはニミウスに説得してもらおうとするが、ルルは気付いていなかった。ニミウスも自身の目的のために大会参加に意気込んでいたことに。

「よし、それじゃあ明日から特訓でもするか！！」
「もちろんです！！　悔しいですが今のあたしではニミウスさんの足を引っ張ってしまいますからね」
「あ、実力わかってらしたんですね」

ルルの少々手厳しい突っ込みも二人には届いておらず騒ぎあっている。これ以上騒がれると、邸の中の他の人に迷惑がかかると思ったルルがナギを部屋から引きずり出すまでにそう時間はかからなかった。
引きずり出されたナギは何で邪魔をしたのかと不機嫌であった。だがルルの言い分を聞いてもっともだと納得していた。

「では、そちらがナギさんの部屋になりますから」

そう言って去って行こうとしたルルをナギが呼び止めた。

「なんでしょう？」
「別に無理してそんな言葉遣いにしなくてもいいんですよ」
「私が無理をしているように見えましたか？」
「見えませんけど……感、ですかね。子供の頃からそういう風に無理して丁寧な言葉遣いをする人たちを見ていたのでそう思っただけです。違っていたらすいません」

それを聞くとルルはそうですかとだけ言って廊下を歩いていった。

3－3（後書き）

「さて、ミルフィアが主催の大会に出ることになりました」
『救世主も出るなんて、暇ねえ』
「実際、王国の方は魔物の被害があんまりないらしいし、気楽なんだろうね。知らないけど」
『じゃあ気になることの話をしましょう』
「何？」
『ルルって子の口調って実際どうなの？』
「ああー、何でも設定はあるらしいよ。使われるかわからないけど」
『蛇足ね』
「そんなこと言わない。紅月の中ではどうやって話の中で出していこうか悩んでるんだから」
『そう、じゃあもう言わないわ』
「それではまた次回、お会いしましょう」

3―4

次の日の朝。すぐさまミルフィアに向かって大会参加の旨を伝えると、その場にいた人たち全員に大笑いされた。いろいろ言われたが、一言にまとめると、おまえらみたいな下っ端が出たところで勝てないし、恥さらしだからやめておけ、との事だった。

もちろんそれぞれに目的を持っている今の二人にはどこ吹く風。勝手に言っていろ、という感じにさっさとその場を後にして、レイスの館へと戻った。

さて、特訓しようと決意したところ一つの問題が存在していた。それは特訓するための依頼を受けることができないということである。

実力をつけるのならば、理論を学び、武術の方をなぞるのも大切だろうが、時間がない場合は実際の戦闘に参加するのが一番である。しかし、この国ではそういう状況になるような依頼はあまりない。あるにはあるが、長距離の移動の際の護衛が多く、大会の開始に間に合わない。

これは、王国に魔物が現れない、ということが大きい。国内の移動では魔物と遭うことなどないのだ。遭ったとしたらそれはとてつもなく運がなかったというくらいである。そんな確率を相手に護衛を雇うということはほとんど無い。

また日数的に、首都内でとなるとほとんどがお手伝いのような内容になる。それではとてもじゃないが実践とは呼べない。

なので、二人はレイスに頼み、優明やルルの手伝いをすることを条件に邸の庭の使用を許可したのだった。優明は朝に仕事が集中しているため、その間の明華と優華の面倒を見ること。ルルからは夕方に買い物に行ってもらうことを頼まれているので、二人が特訓に使える時間はそんなに多くない。

「というわけで、現在の実力をチェックしたいと思う！！」
「わかりました！！」

現在は昼食後。二人はニミウスの部屋で話し合っていた。すぐに実践に移るよりも、まずは互いの実力チェックをしておいた方が後々困ることが少ないだろう、というニミウスの意見にナギが従った形であった。

まずはナギから。

「あたしは、魔法が得意です。というか体術はほとんどやっていません。体力もそこまでありません。

使える属性は風と、水と、雷。あと氷です」

「でもそれって、前衛職としてはかなり理想的な属性の組み合わせだよな。しかも四属性か、珍しいな」

「でも、基本二つと派生が二つなので探せばわんさかいると思いますよ？」

普通ならば四つの属性を持つというのは珍しいことなのだが基本と派生で四つならそこまで珍しくない、というのがナギの意見である。実際、魔法使いとしては多くもなければ少なくもない。普通から見るとすごくても、魔法使いから見ると普通、ということである。

続いてはニミウス。

「俺は一応魔法も使えるけど、どっちかというと近接戦闘の方が得意で、武器は剣か拳。

属性は炎と、地と、雷と闇」

「さっき、言ってたこと覚えてます？」

「え？」

しばらく考えて、ナギの言っていることを理解するニミウス。

「そう言えば、俺も四属性使えるな……」
「しかも、そのうち一つは上位属性、しかも闇！！　人の身でどんだけレアな属性なのかわかってます？」

ナギの言うこともっともで、四属性もちというのは探せば沢山いても、その中で上位属性持ちの人間は一気に少なくなる。さらにその中で闇属性となるとさらに珍しい。
魔物の活動が盛んになっていて、上位の魔物が闇属性の魔法に長けるということを多くの人が知っているので闇属性を使える人はそのことを隠しているのが普通である。現にニミウスもしまった、という顔をしている。

「はあ。これを聞いたのがまだあたしでよかったですよ。他の人に聞かれていたらその場で魔物の手先だと言われて殺されても文句は言えませんよ？」
「……気をつけます」

ナギはニミウスのことを聞いても何も言わなかった。魔王を倒しに行くという目標を掲げる彼女ならば迷わずニミウスに攻撃をしてきてもおかしくないと思えたのにそれをしてこなかった。

「ナギ。ひょっとして身近に闇属性を使える人がいた？」
「すごい考えですね。その通りですよ。一番の友達です。そろそろカロン（こっち）に着くはずなんですけど……」

ニミウスが感で言ったことは当たっていたらしい。その友人を心配しているのかナギは少し不安そうな顔になった。
その友達というのがどのような人物かはわからないが、闇属性を持っていたとなるとかなりつらい人生ではないだろうかと、ニミウ

スは思った。

「ちなみに、どんな人？」

「ああ、あたしの友達のことですか？　そうですねえ……」

ナギは少し悩むようにしてから言った。

「少し無愛想ですけど基本的にいい人ですよ。髪の毛は黒くて目が金色で、黒い服を着ているので暗いところだと目が異様に目立ちますね。

知らない人が見れば怖いことこの上ないかと」

ニミウスが首をかしげる。ニミウスはその特徴に当てはまる人物を偶然にも一人知っていたのだ。しかしその人物がナギの友人になるとは思えず、その考えを打ち消した。他人の空似だろうと。

ナギはニミウスが首をかしげたのを不思議に思ったが何も言わなかった。

話は少しそれたが、とりあえず口頭での実力チェックは終わったのでこれからどうしようか、ということになった。

互いの実力は十寿の森で魔物と戦ったときにおおよそわかっている。今回のチェックは確認に過ぎない。じゃあ、これから訓練でもしようか、と立ち上がったところでナギが思い出したように言った。

「そうですよ。ここに来たら武器が欲しいって言ってたじゃないですか」

そう、ナギは十寿の森で戦っていたときに、自分も武器が欲しいと言っていたのだ。

「なら買いに行くか」

ルルに買い物ついでに武器を買いたいから早めに出掛けたい、と言うとルルは手早く買い物メモを作って、二人に渡した。

「誰の武器を買いに行かれるんですか？」

「あたしのです」

ルルはいいところがあったか、としばらく考えていた。そしてルルはいくつかの武器屋の名前を挙げる。

「あとは、『ユイル』という店ですね。ナギさんが魔法を使う方なら行っておいて損はないと思いますよ」

それぞれの店の地図を渡される。どうやら皇国とちがい、業種によって店が集まっているということはないらしい。

二人はルルに礼を言って出掛けた。

3－4（後書き）

「書いている最中に「魔法使いなんだから魔具みたいの持ってても いいのに、ナギは何にも持っていない」と愕然とした紅月がいました」

『だから武器を買いに行くの？』

「それもある」

『ということは別の目的もあるということ？』

「らしいよ？　なんか「次だ……。次でやっとあいつが出せる」って不気味に笑ってたから」

『……聞かなかったことにしておくわ』

「紅月の手元にノートパソコンが転がり込んできたっていうし、次からはもちょっと更新速度が上がるといいね」

『ということで、また次回のあとがきで会いましょう』

3―5

武器屋は昼間のほうがすいている。

理由として言われることはいろいろとある。

だが、その最たる理由として店に物を買いにきたり、武器の修理などを頼みに来るであろう客のほとんどが昼間は仕事として外に出ていることが多いということがあげられる。たいていは朝早くにくるか、夜になってからくるという。

なので、ニミウスとナギが訪れた武器屋、『ユイル』もその例に漏れず閑散としていた。……もっともこの店の場合、それだけが理由ではないような気がするが。

ルルに魔法を使うなら、と勧められたので一番初めに来たのだ。店の中の商品に埃は被ってはいないものの、それ以外の場所の掃除はえらく乱雑で、端のほうにどうでもいいといわんばかりに積み上げられていたりする。

場所も来やすい場所というとそうではない。入り口は狭い路地の奥にあり、店の扉のあまりのぼろさ。ルルから聞いていなければ武器屋だと思うこともなかっただろうし、あまりの怪しさに入ることもしなかっただろう。

しかし、中に入ってみると違った。確かに、扉の様子を裏切らない店内ではあったが、そこに置かれている品は、どれも一級品といって差し支えのないものだった。

「すごいですね。今までいろいろと見てきましたが、ここまですごいものばかりがそろっているのを見るのは初めてですね」

「その中に気に入ったものはなかったのか？」

「周りがご機嫌を取りにいくつも持ってきたんですが、あたしみたいに魔法を使う人間だといいものだからというだけではなかなか……」

言葉を濁すナギ。己の肉体をもって戦う戦闘職とは違い、魔法使いとは魔属粒子に干渉する魔力と、それを扱う精神力に比重が大きく偏っている。そのため、魔法使いの扱う武器を選ぶ基準の中では『感』が重要視されるという。ニミウスはよく知らないが、波長が合う、と言えばいいのだろうか。そんな感じで、一級品を使いながらも実力を出し切れない魔法使いもいるし、質のよくない武器を使いながらも一級品を持つ相手を圧倒する魔法を扱うのもいる。

もっとも、より魔法を扱うのに長けた魔法使いには自然といい武器と波長が合うようになるというが。

ナギはきょろきょろと店内を見ていく。ニミウスはすでに自分の武器を持っているため、何も買わないのでナギの物色が終わるのを待っているだけで手持ち無沙汰だ。なので、ナギと同じように店内を見渡す。あまり詳しくないニミウスでもその質の良さがわかるものばかりだ。

形状はいろいろである。杖、剣、弓、指輪、ネックレス、ピアス、槍などと幅広い。

そんな中、ナギの商品を物色するためにさまよっていた視線が一箇所に釘付けになった。ニミウスがその先を見ると、そこにあったのはわざわざケースに入れられている一本の杖。長さは一マテほどだろうか。真っ白で、直線的なフォルムを持ったその杖はケースの中で埃を被ることなく、そのつやを薄暗い店の中で光らせていた。

「これ、いいですねえ……」

波長が合った、というやつだろうか。ナギは笑顔になる。ケースを見ると購入をご希望のお客様は、人を呼んでくれとある。早速人を呼ぶと、その人、店員は苦笑いをこぼした。

「そちらの品の購入ですか？　ではまず、持ってみてください」

ケースから出されたそれをナギはうれしそうに受け取り、店内の商品にぶつからないように慎重に振り回す。体術はほとんどできないと公言していたし、振り回し方はかなり危なっかしく、また、適当であった。

うれしそうに手に取ったナギに対して、店員は蒼白になっている。どうしたのか、と問う前に店の奥に消えていってしまった。

「何か悪いことでもしたのでしょうか？」

「いや、特に何もしてないと思うぞ？　商品も壊れていないし」

何かよくないものでも見たのかと思ったが、ここにいるのはナギとニミウスだけである。二人して首をひねっていると先ほどの店員が別の人を連れて現れた。しかめ面な六十歳くらいのその人物はナギを見て目を見開いた。

「え？　あたし？」

自分を指差して、驚かれている対象が自分だと確認するナギ。事情を説明してもらうように求めると、相手は承諾し、椅子を出すように店員に言った。どうやらそれなりに長くなるようだ。

「まず、私の自己紹介といこう。私はグール。グール・ユイルという」

「ユイルさんですか」

「グールのほうで呼んでくれ。ユイルという名はこの店を継ぐものに受け継がれる名だ」

「はあ」

相手、グールはお茶を持ってきてそれを四つのコップに注ぐ。コ

ップはすべてばらばらなサイズであった。
お茶を飲み、一息つけてグールは語りだした。
「まず、その武器の素材は何だと思う?」
「木、じゃないんですか?」
「いいや、木であっている。だが、その木はどこにも存在していない」
それは、すでに絶滅した種という意味ではなく、この世には存在しないはずということだとグールは言った。
「私がこの店を継いですぐのころのことだ。一人の男がこの杖の素材となる木を持ってきた。男はこう言ったよ。『この店の主であるお前が、一番の腕を持つ職人と聞いた。この素材を武器に作り変えてほしい。形状は問わない。作ったらそれを店で売れ』それだけ言ってその男は去って行った。
ずいぶん変なことを言うもんだと思ったよ。だが……自分で言うのもなんだが、私は当時からすでに超一流として認められるだけの腕を持っていた。だから男のことを怪しむよりも、その素材を見て腕が鳴った。
見たこともない素材。質感は木なのに、その強度は鉄にも勝るという木にあるまじきものだった。火にくべても焼けることがなく、水につけても水はしみこんでいかず、やわらかくなるようなこともない。加工できたときにはものすごい満足感があったのを覚えている」
「それは、いつごろの話ですか?」
「三十年前のことだよ。その杖ができるまでに十年はかかった。しかし、しばらくしてからあっさり鉋が入ったときには驚いた」
ニミウスは一人、何かに納得したように頷く。彼の故郷での一大

事件となった木であった。
　グールのほうは加工のときの思い出を語っている。鉋で削る方法は始めの方に試したが、そのときはできなかったのだ。当時は不思議で仕方がなかったと言う。

「それから、その杖を売りに出した。ところが、その杖を誰も手に持つことができない」
「なぜですか？」
「杖が拒絶する、と言えばいいのだろうか。まるで電気が走ったかのように感じるんだそうだ。私が加工できたのはその素材に認められたからだろうな。そして認められたからか、私は杖に触っても何の問題もなかった」

　認められるまでに五年以上かかったがな、と笑う。

「一流の魔法使いもいれば、その杖の価値もわからずに観賞用として買っていこうとする貴族もいたな。だがことごとく反発した。だが、そちらのお嬢さんは持てた」
「それはつまり、この杖はあたしのことを認めた、ということですか？」
「おそらくはそうだろうな」

　それを聞いてナギがうれしそうに笑う。実際にうれしいのだろう。感極まったのか目にはうっすらと涙がたまっている。
　その後、値段の話になり、タダでいいと言い張るグールと、少しでも払いたいというナギの間でものすごい口論が繰り広げられたが、それはナギが百ギリアム払うことになって落ち着いた。最後は店員が話をまとめていた。グールは話が混乱するからということで奥に追いやられていた。

◆◇◆◇◆◇◆

ちょうどそのころ、『ユイル』の前に一人の男がいた。真っ黒な髪から皇国の人物だとうかがえる彼は、ぼさぼさの髪から金色の瞳を覗かせていた。

「やっと見つけたのだ……」

その言うと、男は扉の目の前にある壁に体を預ける。どうやら中から人が出てくるのを待っているようであった。

3－5（後書き）

「日付が変わって月も変わったね」
『予想以上に店での話が長くなって予定した登場人物は最後のほうにちょっと出てくるだけで終了したわ』
「今回はちょっとだけだけど、ニミウスの故郷の話が出てきたね」
『ニミウスってどこの人間なのかしらね？』
「まあ、おいおいわかるでしょ」
『ということで、また次回、お会いしましょう』
「次回は今回の最後に出てきた人物がしっかり出てくる予定ー」

3－6

ナギは手にした棒を嬉しそうにぎこちなく回している。あの後、グールと話し合い技術料として百ギリアムを支払うことで話がついた。

しかし、百ギリアムと言うと普通にかなりいい魔具を買うことができる。つまり『技術料』としては高すぎたのだがナギは

「こんなにいい物を作ってくださったのですからそれくらい当然です！！」

と言い切り、押し通した。ナギの懐は皇国で盗んできたもので成り立っているが、この大きな出費にも耐えるくらいの量はあるようである。

「ああ、何度見ても素晴らしい物ですね。帰ったら名前を付けてあげないといけませんね」

ご機嫌すぎるナギは先程からニミウスが行っていることがルルに頼まれた買い物であるということに気づいていない。

まさに心ここにあらずである。

どんな名前にしようかと悩むその姿はまるで子が生まれた親のようであった。ニミウスにはただただ注意力が散漫になって他の人に迷惑をかけないようにしてほしいと思える不安材料でしかなかったが。

一応ナギはニミウスが足を止めると、一緒に足を止めるので見失うということもなかったが、それでも不安だったのは言うに及ばず。

◆◇◆◇◆◇◆

買い物も終わり、さあ帰るか、となったときにナギが急に走り出した。
なにかを見つけたのかその走りには迷いがない。ニミウスは荷物を手に追いかけた。
身軽なためかナギの方が少しばかり速く、少しずつ距離が開くがナギを見失う前にナギは足を止めた。全力で走ったのか少し息が切れているがその顔には疲れではなく喜びの色が見てとれた。

「シズミ！！」

ナギが相手に飛びつく。
飛びつかれた相手はぼさっとした黒い髪をしており金色の瞳は眠いのか気だるそうな感じであった。
ニミウスはその特徴からナギの言っていた友人だと当たりをつけた。そして、その人物はニミウスにとっては知り合いと言える人物であった。
とりあえずニミウスはそしらぬ顔をしてナギにたずねることにした。

「その人は？」
「あたしがヴァダリアにいた頃の唯一の友人でシズミっていいます。四角と書いてシズミ、と読みます」
「へえ。初めまして、シズミさん。こいつと一緒に旅をしているニミウスといいます」

そう言ってシズミに対して握手を求めた。相手は不思議そうにニミウスを見つめる。
その目が「久しぶりだろう？」と言っていたがニミウスは気にしなかった。

「……シズミなのだ。よろしくなのだ、ニミウスくん」
「ニミウスでいいですよ」
「わかったのだ。ならば僕のこともシズミでいいし、丁寧な言葉遣いも必要ないのだ」
二人はそう言って握手を交わした。

◆◇◆◇◆◇◆

「今日は本当にいいことだらけですよ。杖を手に入れることもできましたし、シズミにも会えましたし」
先ほどよりもさらにうれしそうに微笑みながらナギは歩いていた。なんだか、そのうれしさに影響を受けて、サイドの高い位置で縛っている長い髪が動き出しそうな、そんな気がしてしまうくらいである。
シズミは昨日の夜にここ、エリクシナについたらしい。昨晩は宿を取り、今日からはナギたちと一緒にルイスの屋敷で世話になりたいらしい。
「でも、どうやって泊めてもらうんだ？」
「簡単なのだ。こうするのだ」
シズミはそう言うと瞬きする一瞬の時間で姿を消した。
なんとなく下を見るとそこには猫が一匹。
「つまりは猫なら問題ないと？」
「ニミウスさん、これがシズミだってわかるんですか？」

驚いたのは猫に変身したことを見たニミウスではなく、猫がシズミだとわかったニミウスを見たナギであった。たいていは驚いたり、腰を抜かしたりするのに、とぶつぶつと言っていたがどうしてわかったのかと、たずねてきた。

「だって、消えたわけじゃないんだし、こいつがシズミだとしか思えないだろう？」

「それはもっともなんですけど……」

ニミウスの回答を聞いても不満げなナギはシズミにもつまんないですよね、と同意を求めるが、ナギの腕に抱かれた猫はただ一声にゃあ、と鳴いただけだった。

そこまできてナギはようやく、ニミウスが持っている荷物がルルに頼まれたものであると気づいた。気づいて、その量を見て、慌てて風で浮かせようとした。

だが、ニミウスは今日はその杖を大事に持ち帰るようにと言って、荷物を持って歩き出した。

荷物は普通の人なら持てそうにもない量だったが、ニミウスは荷物に多少振り回されているものの特に問題なさそうに歩いている。心配をしていたナギだが、猫を抱き上げるとニミウスの横ではなく斜め後ろを歩く。

「……なぜに斜め後ろ？」

「横だとニミウスさんが倒れてきたときに回避が難しいからに決まってるじゃないですか」

決まってる、ってどうなんだろうかと思ったが、両手が塞がっている今は特になにもできず二人はルイスの屋敷まで歩いていった。

シズミのことは拾ったとナギがルルに言うと、猫一匹なら問題はありませんと言われた。これ以上拾ってこないようにとも言われた

のだが。

3―7

帰ってすぐにナギは杖に名前をつけた。ただ、杖と呼ぶのが嫌だと言ってその日は寝ずに考えていたらしい。
その結果、名前は思いついたもののひどい寝不足で特訓どころではなかった。

「ナギは馬鹿なのだ」
「ううー。自覚してますから寝かせてくださいよ……」

ナギの部屋ではシズミがナギの睡眠を妨げていた。わざとナギの周りを寒くしたり、逆に暑くしたり、眩しい光を浴びせたりと手段は様々であった。
カーテンが閉まっているので、この部屋からは分かりにくいが時間は昼過ぎになっている。そろそろナギも限界であり、目が閉じてはシズミに起こされるということを繰り返している。しかし、シズミはその手を緩めることはしなかった。ナギがゆっくり眠れるようにシズミが手を緩めたのは夕方になってからだった。
シズミが人の姿を取れることとはナギとニミウスしか知らないことなので猫の姿になってから出ていった。

「お疲れのようだな」
「ニミウスなのか」

かけられた声にシズミは特に驚いた様子も泣く返事をした。

「確かに疲れたのだ。いくらナギを寝かせないようにするためだったとはいえ、自分も寝ないというのは少々やり過ぎたのだ」

表情は読み取れないがその雰囲気からため息でもついているのだろう。そのままニミウスの方へ近寄って行く。

「これまでにも何回かあったことなのだ。ナギは本気で取り組み過ぎて夜寝ない日があったのだ」

だから夕方まで無理にでも起こしておくと、夜中に起きたりせず、朝までぐっすりと眠るのだ。そして、次の日からは生活リズムを崩すことなく活動するのだ。

そう言ってニミウスの足下で一声鳴き、丸くなった。ニミウスは丸くなったシズミを抱き上げて、夕食が待っている食堂へと移動していった。この日の夕食は鳥を焼いたものだった。

◆◇◆◇◆◇◆

次の日の朝にはナギは気分がよさそうに起きてきた。寝不足や、逆に寝すぎたといった感じは見られず、廊下で仕事をしているルルを手伝いながらめまぐるしく動き回っている。ナギよりも後に起きてきたニミウスが驚くくらいであった。

「ルルさん。これはどこに運んでおけばいいでしょうか」

「そうですね。では主人の部屋へ運んでください。今日はまだ起きていると思いますので」

「分かりました！！　あ、ニミウスさん。おはようございます」

ニミウスの横を通り過ぎる時に挨拶をして、走っていった。肩にぶら下がっているシズミが小さな声で、言った通りになったのだ、と言って笑った。もっとも声の調子から判断したものであって、表情は変わらなかったのだが。

そして、一人と一匹がルルに近寄っていくと、ルルも挨拶を返し

た。

「ナギさんは朝が早いですね」
「俺もびっくりしました」

そろそろ朝食のですから、先に食堂へ向かっていてください。そう言ってルルは荷物を持ってどこかへ行ってしまった。それを見送ってニミウスはシズミを肩に乗せたまま歩いていく。
食堂の目の前で足元に衝撃。

「おにいちゃん、おはよー！！」
「猫ちゃんもおはよー！！」
「おはよう。優華、明華」

右には優華、左には明華。ニミウスの手をぎゅっと握った二人は急げ急げと言いながらニミウスの手を勢いよく引いていった。

「今日はね、お母さんが朝ごはんを作ってくれてるの」
「ルー君が忙しいからだって」

この双子はルルのことをルー君と呼ぶ。この屋敷の主であるエンテンシア男爵、レイスのことは普通にレイスさんと呼んでいる。
全員が集まるまでまだ時間がある。レイスは普段は研究とか言って不規則な生活を送っているので、除外されるが、食事の時間は基本的に全員集まってから食べることになっている。ナギとルルが働いていたのでまだだと思い、ニミウスはシズミを優華に渡した。

「猫ちゃんと遊んでてもいいの？」
「どうせ、みんなが来るまで暇なんだろ？　ならいいって」
「やった！！　みーちゃん。どうする？」

「それなら猫ちゃんに高い高いしてあげよう」

お手玉のようにぽんぽんと放り投げられるシズミを横目に、ニミウスは席に着いた。なにやら双子の方からの視線が痛いが気にしない。

「そうだ、ルー君にもらったリボンつけてあげよう！！　みーちゃん、持ってるし。ゆーちゃん、きっとかわいくなるよ？」

「そうだね。ゆーちゃんもそう思うよ」

明華がどこからともなく真っ赤なリボンを取り出して首にではなく、尻尾に縛り付けた。きれいな光沢を持ったそれは、シズミの尻尾の動きに合わせてふわふわ揺れている。

かわいー、と言って抱きついてこようとする双子の動きを華麗にかわしてニミウスに駆け寄ってくる。尻尾をぺしぺしとニミウスにたたきつけてくるところを見ると、このファッションには不服なものがあるらしい。

「似合っているし、いいじゃないか」

よくないのだ、と言ってシズミはニミウスから離れていく。食堂から出て行ったのを見た双子が追いかけていった。

「猫ちゃん、もうすぐ朝ごはんになるから出てっちゃだめー！！」

「みーちゃん、がんばってー」

優明がそんな二人を暖かく見守りながら食堂にやってくる。ニミウスに丁寧に挨拶をした後、まだナギとルルがきていないことを確認してから席についた。

「ニミウスさん。ナギさんやルルさんは？」
「なんか廊下で動き回ってましたけど、すみません、いつ来るかまでは分からないですね」

優明はそれを聞いて、再び子供たちに目をやった。気づくとシズミがつかまっていた。
そして、二人が暴れるシズミに何とかして首にもリボンをつけたころ、ルル、ナギ、そしてレイスの三人が食堂にやってきた。

「やあ、ハニー！！　いい朝だね。今日はきみの作ってくれた朝ごはんが食べれると聞いて飛んできたよ」

今にも優明に襲い掛かりそうな、そんな鼻息の荒い、この館の主人をルルが押さえる。ナギは自分たちが最後だったことを優明に詫びた。優明がキッチンに戻るころにはレイスはルルによって床にたたき伏せられていた。

3－8

「は？」
「はい？」
二人が揃って首を傾げたのはレイスが優明の手作りの朝ごはんを堪能しているときだった。
「俺が思ってる以上に君たち有名らしい。昨日、君たちが出掛けてる間に来たんだよ」
レイスが話した内容によると、こうだ。
昨日、レイスのところに王室からの使いがやってきた。何でも近いうちに一度王宮に来るようにとの書状を持ってきただけだったらしい。それだけならば不思議ではない。レイスはこの国では男爵の地位にいるのだから。
問題はその書状に書かれていた、続きであった。
『貴殿の家には現在ヴァダリア皇国から来ている者がいるとのこと。ミルフィアに登録しており駆け出しの身でありながらこの度行われる大会にも参加するとも聞いている。それほどの方となると並大抵ならぬ実力をお持ちでしょうからぜひとも見てみたい。』
要は『変わったやつがいるらしいから見てみたい』ということだとレイスは二人に言った。
「はあ」
「絶対嫌です！！」
消極的に返事をするニミウスに対し、ナギは強く拒否を示した。
王族ってきどってるイメージがあって嫌いなんです。だから嫌です。いや、これ王室からの正式な書状だから。レイスがそう言ってもナギは聞かない。
気まずい空気になった中、ナギはそのままさっさと食べて食堂から出ていった。
「しかたない。ニミウス君、説得してきて。こういうの無視される

と俺の立場が無くなるから」
　そう言われては嫌とは言えずニミウスも席を立った。シズミが着いてきたがそれは気にしなかった。
　ナギを探すために屋敷を歩いて鍵のかかってない扉を順に開けてその中を確認していく。面倒だが確実な方法で探す。退屈で単調な作業だがそれはシズミと話をすることで紛らわした。
「ナギは王族が嫌いなのか」
「嫌い、ではないと思うのだ。会いたくないだけだと思うのだ」
　シズミは勢いをつけてニミウスの肩に乗った。猫がしゃべるというところはあまり人に見られたいものではない。
　ニミウスには聞こえるくらいの音量でシズミはしゃべる。人の姿をとってもよかったのだろうけど、この屋敷では猫ということになっている。誰に見られるかわからないのでやめたようだ。
「おそらく、会うことで見つかるのを恐れているのだ」
「誰に？」
「……ナギが家出中だとは聞いてないみたいだったのだ。失言だったのだ」
　シズミのため息に少しムッとしたものの聞いていなかったことは事実だったので何も言わなかった。逆にシズミの方は「知っておいた方がいいと思うのだ」と言ったきり黙ってしまった。
　どうやらシズミから喋るつもりはないようだ。ニミウスもため息をついてナギを探す。
　やがて見つけたナギは自分にあてがわれた部屋のベッドにうつぶせになって転がっていた。ノックもせずに扉を勢いよく開けたときにナギの体が震えたような気がしたがそんなことは気にせずに入っていった。
「……なんなんですか」
「ルイスに頼まれて、説得」
「ならとりあえず扉を閉めてください。シズミも人の姿になれますし、そっちの方があたしも気が楽です」

ニミウスはおとなしくナギの言った事に従った。明かりはつけず、窓もカーテンをしっかりと閉めている。扉を閉じれば薄い闇に包まれた。

すぐには闇には慣れないので薄闇とはいえ手探りでナギの横に座った。すでにシズミは人の姿になっており、部屋にもともとあった椅子に足を組んで座っていた。

ニミウスはナギが語りだすのを待ったが、それでもナギはしばらく何も言おうとせず、うつぶせのままでうなっていた。

「ナギ」

「待ってください。ちょっと言いたくないこととか言わないといけないこととか考えてますから。せっかくだから、あたしが王族に会いたくない理由もちゃんと言います」

「シズミからは家出してるとか聞いたぞ」

ニミウスが闇に慣れた目でシズミを見ればそちらは何も言わずにこちらを見ている。闇の中で金色の瞳が異様に光っている。月のようにも見えるその色はガラス球だと言われても納得できそうだった。

ナギもシズミを見た。余計なことを、とも思ったがいずれ話さなければいけなかったことだ。むしろきっかけを与えてくれた事に感謝しよう、そう思って最低限の、言わなくてはいけないことだけを考える。

「あたしは……」

――もしナギが自分のことを話したら、ニミウスがそう考えはじめたときにナギは語り始めた。

「あたしは、シズミが言ったとおり家出をしています」

ニミウスの方を向いた顔にどんな感情が張り付いているのかはわからない。だが、その声音には嘲笑が混じっているような気がした。

ごろんと転がって仰向けになり天井を見上げながらナギは続ける。

「ヴァダリアではそれなりの家でして、ヴァダリアの兵も、動かせます。ニミウスさんと出会ったときにあたしが兵士に追われていた理由は、家の人間が命令したからでしょうね」

淡々と語られる言葉には一切の重みが感じられない。ナギがあえて軽くするつもりで喋っているのか、それともどうでもいいのか。少なくともその話がナギにとってはいいものなのかわからないニミウスには判断する基準はない。

ニミウスはナギが語るがまま、一切の口出しをしない。

「まあ、そこまではいいんです。過程。……いえ、ただの結果ですね」

ナギはさらに姿勢を変えて今度は窓の方に向かって横になる。そうなるとニミウスからはナギの表情をうかがえなくなった。

「あたしはですね。それなりの家で、それなりの教育を受けて、それなりの交友関係を築きました。この国、カロンの王族も、その一部です」

ナギの家は相当位の高い家だと言うことがわかる発言だった。しかし、ナギはまだ話す。これで話は終わりではないようだ。

「あたしの家出のことは面子がありますから何も言っていないでしょう。でも、あたしが顔を出すとどうしてあたしがここにいるのか、という事になります。そうなればあたしは強制送還です。そしてあたしは、絶対にあそこには戻りたくはありません」

3―9

「でもそれでレイスに迷惑をかけるのは間違っているのだ」
シズミの静かな言葉は静かな部屋にはっきりと響いた。彼はしっかりとニミウスの向こう側に転がっているナギを見据えてそう言った。
「家出したのはナギのわがままなのだ。王族に会いたくないというのもそうなのだ。理由があるからと言ってそのわがままでレイスに迷惑をかけてはいけないのだ」
「直球だな」
「そう言いたくもなるのだ」
シズミはそれだけ言って部屋から出ていった。あとは任せるということなのだろうが、この状況でナギと二人きりというのは気まずいものがあるニミウスは恐る恐るナギを見る。
窓を向いたままのナギは動こうとはせず、呼吸の分だけ体が動いている。その顔はわからないが、なんとなく泣いているような気がして、よけいに声をかけることが憚られた。
沈黙の間にニミウスは先ほど中断した考えに手を伸ばす。もしも、ナギが自分のことを聞いてきたら――。
一緒になってまだ日は浅い。ニミウスはナギが貴族の出だろうと予想はついたがそれを聞こうとはしなかった。ナギもニミウス自身のことについては何も聞こうとしなかった。
皇国で互いに追われる身であるとわかったからなのだろうか。互いの素性については探りあいこそすれど、実際に話し合ったりはしなかった。それでいいし、問題はないと思っていたけれど――。
頑なになっているナギを見て、ぽつぽつと語られた内容を聞いて、ニミウスはちょっとだけ、その気になった。ただ、ニミウスが口を開く前にナギが話し出した。
「賢いと褒められて、賢すぎると疎まれて。女だからと軽く見られ

て、女のくせにと蔑まれて。そんな場所から逃げ出したのは確かにあたしのわがままです」

やはり向こうを向いたままナギはそう言った。やはり、シズミに言われたことが堪えているようだ。

しかし、ナギの言葉はそこで途切れてしまい続かない。そんな沈黙を破ったのは今度はニミウスだった。

「俺も、似たようなもんだよ。いや、やっぱり違うな」

「え？」

「俺も、追われてるってのは知ってるだろ？　俺は裏切り者なんだよ」

ほんの少しだけ、ナギが語ったことよりはずっと少ないがニミウスは自分のことを語る。

「だから追われてる。俺の場合はどこに相手がいるかがわからないからむしろ開きなおっているけどな」

こそこそ隠れてもいつかは見つかる。ナギを追っているのとは違い、ニミウスの追っ手は手段をあまり選ばない。でも俺だって捕まる気は全くない。そう言ってニミウスは苦笑した。

ナギはのろのろと起き上がってニミウスの顔を見た。半信半疑といった表情は当然だろう。タイミングがよすぎるのはニミウスだって承知している。

「本当なんですか？」

「こんなときに嘘なんてついたら後が怖いだろ」

「それはまあ、そうですけど」

「お前は国境を越えたらあんまり問題はないだろうけどな、俺は国境を越えようが関係ない」

「じゃあ、救世主様の仲間になりたいというのはどうしてですか？」

「そしたら追手が手を出しづらくなるかなと思ったんだよ」

少し不機嫌になっているナギはニミウスから顔を背ける。どうやらニミウスは嘘をついてはいない。……と思う。むしろそう思いたい。

国境を気にせず動くということはかなりの勢力だと予想はできた。きっと自分を追っているのよりもさらに大きいということはありえないだろうとも予測できたが。

しかし、二人とも追われる身だったのか。

ナギは声を出して笑った。その声はさほど大きくはなかったが、ニミウスにはその声はしっかりと届いていた。

「いえ、ただあまりの偶然にビックリしただけです」

訝しげにナギを見るニミウスにナギはそう答えた。しばらく笑っていたナギはやがて笑うのをやめるとまっすぐニミウスを見て諦めたように言った。

「仕方ありませんね。同じように追われているらしいニミウスさんは王族に会いに行くんですよね」

そう言われてニミウスは目的が王族に会うことを嫌がるナギを王宮に連れていくために説得させることだったと思い出す。慌てて曖昧に頷くとあっさりと忘れていたことを見透かされた。

苦笑しながらナギは王宮に行くことを了承した。もしも追われたらその場からすぐさま逃げ出す、と条件をつけてきたがそれは仕方ないだろうと受けとめた。

その後、どんな服を着ていくかで優明とナギがものすごい口論を繰り広げるのだが今はまだ関係のないことである。

◆◇◆◇◆◇◆

「そう言えばニミウスさん」

無理矢理という感じはなく、ナギは話題を変える。その目にあるのは先ほどまでの淡々としたものではなく、なにかを期待するようなもので、はしゃいでいるような雰囲気もある。

「杖に名前をつけたんですよ。聞きたいですか？」

まるで子供が自慢話をしたいかのような物言いで、実際そうなのだろう。部屋の隅に立てかけてあった真っ白なその杖を持ってきた。

すらりとした直線的で細身な杖は、杖から感じさせられる気品がなければただの棒にしか見えない。上部で渦巻きを作るようにして緩やかな曲線を描くそれを高々と掲げる。

「白羽（シラハ）、と名付けました！！」

ニミウスの返事を待たずにナギは声高に言った。

「白は見たままですね。羽は、あたしにとって自由の象徴です」

ようやく手に入れた自由をあらわしました。そう言ってナギはその杖の曲線部分をなぞる。気のせいかなぞられたのにあわせて明滅したきがした。

「さあ、ニミウスさん。今日は特訓といきましょう」

「その杖を早く使ってみたいんだな」

「そんな子供じみたことありませんよ。あたしはただこの杖で魔法を使ったらどんな感じなのか試してみたいだけです」

「変わらないのだ」

同じだろう、とニミウスがあえて言わなかったことをシズミはあっさりと言った。ナギはそれに若干むくれたものの、機嫌よく外に見えた太陽に向かって杖を勢いよく突き出した。

3－10

カロン王都の中心部に近い片隅で互いの過去を打ち明けるという静かな時間に対し、同時刻、王宮に繋がる大通りは人の熱気に溢れていた。ナギたちの入国に遅れること二日。ヴァダリア皇国の皇位継承権第三位の虹牙が救世主を伴ってカロン王都へ到着したのだった。

王国には魔物の攻撃がないと言っても王国の民には被害が出ている。それは漁のために出ていった先の海であったり、動物を狩るために入っていった山であったりする。それで大切な人を失ったりした人にしてみれば救世主は魔物たちを倒してくれる、敵討ちの役割を持った人として認識できる。

とはいってもその人数は多くもなければ少なくもない。これだけの人が集まっているがここにいるほとんどの人は救世主が今日この場所を通ると聞いた野次馬たちである。そして多くの人が集まりこの熱気と人混み。下手をすれば馬車が通れるかどうかが微妙な所もある。

やがて馬車が通る。馬車の中をのぞくことができる窓はそこまで大きなものではないので、救世主を見ることができた人は少ない。人々はどれが救世主様かと馬車に惹かれない程度にぎりぎりまで近づき、覗き込もうとする。

「すごい人気ですねー」

ミールがのんきに外を見ながらそう言った。メグミたち六人は馬車の中からその熱気を受けている。実際には熱は感じないもののその様子を見れば容易に想像できた。彼らもまた救世主（メグミ）に期待しているのだと。

「でもよお、その救世主様がこれじゃあよお」

「仕方ないでしょう。あまり外に出ない方だと言っていましたし」

当のメグミは馬車の隅。できるだけ外が見えない場所で小さくな

っていた。おとなしい性格であるメグミは人前に出ることもあまり得意ではなく、むしろ人ごみには近寄らない生活を元の世界でも行っていたらしい。そのため、今、とてもじゃないが窓の外を見れず、窓の外からも見られたくないそうだ。

ハンナがそんなメグミを外から隠すようにして陣取っている。どうにかして外の人に顔を見せて欲しいと思っているハンナだがそれはなかなか上手くいかないようだった。

そしてそのまま馬車は王宮を囲む塀の中へと吸い込まれていった。

「そういえば虹牙様は？」

「ハンナー。あの人は外でなんかアピールしてますよー」

◆◇◆◇◆◇◆

王宮の一室に案内された虹牙は救世主一行とは別に与えられた個室にメグミを呼んだ。他の仲間はいない。虹牙がそれを認めなかったのだ。今頃仲間たちはゆっくりとくつろいでいるだろう。

しかしそれは、この部屋ではくつろげない、という意味ではない。部屋に用意されていた紅茶をメグミが淹れて、虹牙の前に置いた。

「座れ」

メグミはおとなしく虹牙と向かい合うように座った。

自分で、自分の淹れた紅茶を飲む。

「お前の目的は理解しているな」

「はい」

「この国で最近不穏な流れが発生していると我が国の間者から報告を受けている」

「はい」

「ついでにでかまわん。そちらも処理しておけ」

「はい」

それ以降二人は何も話さず、先に紅茶を飲み終わったメグミはさっさと部屋から出て行った。

それなりの広さの部屋にたった一人残された虹牙は一口、紅茶を飲む。

「しかし、あいつはやけに茶を淹れるのがうまいな」

◆◇◆◇◆◇◆

「あなたが救世主さまなのかしら？」

「はい？」

虹牙の部屋から出たメグミはそう声をかけられた。そこにいたのは細部に豪華さをちりばめた、はたから見れば質素なドレスに身を包んだ、メグミと見た目の年はそう変わらない少女だった。

この国は王女と王子が一人ずついるというのは事前に学んでいたメグミはそのどちらかだろうと思い恭しく礼をした。

「はい。私は救世主と呼ばれています。名前は――」

「名前なんてどうでもいいわ。私のこと、知ってるかしら？」

「この国の王女殿下でですよね」

「ええ、そうよ。ミナハベール・カロン・フンデルトよ」

王女、ミナハベールはえらそうに胸を張った。

こちらがミナハベール、王女らしい。噂によると王子と違ってかなりわがままな性格をしているという。王子の方は今は見当たらない。きょろきょろしているメグミを見て、王子を探していると気づいたのかミナハベールは今はいないと言った。

「ヴァダリアの女に惚れてていつも鍛錬してる弱虫レイラのことなんてどうでもいいのよ。私はあなたに用があるの」

いつも鍛錬していることのどこが弱虫なのだろうと疑問に思いながらも、自分に用があるというところにメグミは違和感を持った。

なぜ、皇国の皇位継承権を持つ虹牙にではないのだろうかと。

「何でしょう？」

「私をあなたの仲間に入れなさい！！」

◆◇◆◇◆◇◆

「――で、今に至るというわけですね」
「……はい」
場所は変わって、メグミたちに与えられた部屋のうちの龍望（ロンホウ）の部屋でメグミは小さくなった。龍望はあからさまに迷惑ごとを持ってくるなという顔をしている。
「僕よりもハンナの方がそういうことには向いているでしょう。同じ女性ですし」
ミールとジェフをさりげなく除いたのは龍望も彼らがその手の事にむかないのを知っているからだろう。ミールはこういうことから逃げるのが得意であるし、ジェフはこういうときの対処が全くできないからだ。
なので、こういうときでも頭がよく回るハンナを推挙したのだがそれをメグミは否定する。
「ハンナさんは、その……。私の好きなようにすればいいって言うと思うんですよ。あの人って他の皆さんと違って私をなんかすごく偉い人に見てるような気がして……」
確かに、龍望はメグミのことを仲間としてみている。ひどい言い方をすれば金蔓であるが、お金を運んでくるからといって崇めようという気はないし、敬意を払う対象でもない。
しかし、ハンナは違う。エルフ一族特有といわれる光信仰と呼ばれる宗教を、エルフである彼女もまた強く信仰している。そのため、光の使い手の象徴とされる救世主であるメグミは彼女にとっては神に限りなく近い存在である。それゆえに、神に近い存在にあまり強く口出しはできないだろう。
それを理解し、龍望は大きくため息をついた。どうやらこれは自分がなんとかしないといけないと思った龍望は一番手っ取り早い方法でお引取りを願うことにした。
「ミナハベール様」

「あら、何かしら。いろいろといってたみたいだけど、私を仲間にする気が起きたということでいいのかしら」
「ええ」
メグミは困ったように龍望を見る。断って欲しい、というのははじめからわかっていたし、龍望もそうするつもりだ。しかし、面倒なことを持ってこられた龍望はちょっとだけ意地悪をする事にしただけだ。結果を変えるつもりはない。
「しかし、ミナハベール様。僕たちはあなたの実力を知らない」
「結構強いのよ？　先生にもあなたに勝てる魔物はなかなかいない、と言われたくらいですもの」
その自慢に満ち溢れて高くした鼻をへし折ってやりたいと思った龍望ははっきりと言ってやる事にする。
「では、証拠を」
「何でよ!!　私の言うことが信じられないというの？」
「ええ、信じられませんね」
メグミがおろおろしているがそれにかまう気なんてない。これはすでに龍望に任されたことだ。好きにさせてもらおうと龍望は言いたい事を言う。
「そこの救世主様はまだ戦闘の場に立って日が浅いですが、僕たちにはそれなりの実力を見せてくれています。しかし、あなたは違う」
「じゃあ何かしら。私の実力を示せばいいのかしら」
「おや、話が早い。その通りです」
「あなた、気に入らないわね。私をなめてるのかしら、私はこの国の王女よ」
「知っています。でもそれはあなたを仲間にできる条件じゃない」
いらいらするミナハベールを龍望は顔には出さず嗤いながら言葉を続ける。
「仲間になる条件ですがね。一人で魔物を倒してきてください」
「そんなことでいいのかしら」
「ええ。ただし、出発は明日の朝。帰りは王宮での夕飯までに。そ

の間に最低でも魔物を十体以上狩ってきてください」
　驚愕の声を上げたのはミナハベールではなくメグミのほうだ。魔物の被害が少ないこの国は魔物の出現場所は山か海か、ヴァダリアとの国境となっている森か。そのどれもがここからでは一日かかっても行けないところにある。ミナハベールのほうは絶句である。どうやら龍望が言ったことがよくわからなかったらしい。
　しばらくして顔を真っ赤にしてミナハベールは怒鳴った。そんなこと不可能だと。
「ええ、不可能だとわかって言っているのです」
「なんでよ！！」
「一つ目はメグミが嫌がっているからですね。二つ目。僕は戦闘職ではありませんからミールやジェフには劣りますがそれでも他人の強い、弱いというのは見ればなんとなくわかります。あなたはろくに鍛えてすらいません。ここの新兵にも勝てないでしょう」
　そこまで言って龍望は言葉を一度区切った。そしてはっきりと言い切る。
「最後に三つ目。僕はあなたのような自分を過信し、その上で他人にも過信で成り立った現実を押し付ける馬鹿な餓鬼は大嫌いだ」
　わなわなと震え、怒りに顔を真っ赤にして、それでもミナハベールは何も言わなかった。言わないのではなく、言えない。龍望の意見を受け入れたわけではない。怒りで何も言えないのだ。無理やり足を動かして龍望に近づいて大きく腕を振るう。
　なにやら手に感触があったがその感触が何に触れたものかわからないままにきびすを返し、ミナハベールは部屋から出て行く。わけもわからず口が動いた気がしたが、その内容すらミナハベールは理解していなかった。
「龍望さん。大丈夫ですか」
　メグミは頬をさする龍望を心配そうに見る。ミナハベールは龍望の頬をたたき、今に見てなさいと叫んで部屋を出て行ったのだった。
「別にいいんですよ。あの手の輩は次は間違いなく親を持ち出して

きますから、それに気をつけておきましょう」
いざとなったら僕が叩きのめします。
よほどミナハベールのことが気に入らなかったのか、龍望はそう言った。
はじめはただの相談だったのに、余計な迷惑をかけてしまったと思ったメグミはひたすら謝り続ける。それをやんわりと受け入れながらも龍望はこの話は終わりだと言わんばかりにメグミを部屋から追い出した。
「あ、そうそう。心の準備ができてないと困りますから他の皆さんにも今の話をしておいてください。あなたがするんですよ。僕は絶対にしませんから」
最後にそう言われてメグミは完全に部屋の外へと追い出されてしまった。とりあえず部屋に戻って休もう。すべてはそれからだとメグミは思った。
現在は夕方。夜ご飯の後に話そうと思ったのだが、ついついタイミングを逃したまま、メグミは王国の兵士と手合わせをしたり、ジェフに鍛えてもらったり、ハンナに魔法を教わりながら数日を過ごす事になる。そしてミナハベールが何も行動を起こさなかったため、このことをすっかり忘れてしまうのであった。
かくして、逃亡者と救世主の道は交差する。

3―11

よく晴れた日の朝。それなりに日が高くなったころ、一台の馬車が王宮に到着した。中にいるのはレイス・ルデル・エンテンシア男爵。そして、彼の邸に現在住んでいるという二人。

ミルフィアに登録しているというその二人。女の方は青いドレスを、男の方は男爵と同じような礼服を着ていた。二人からは戦う者という雰囲気は感じられず、逆に気品が漂っているように感じられた。

女、ナギは縛っていた髪を下ろしている。強い意思の宿った目とすらりとした立ち姿が近寄りがたい雰囲気を出している。周りからしてみれば高嶺の花であるが本人は一刻も早く王宮から出ていきたいという思いでいっぱいだった。

対して男、ニミウスはカロンでも少ないといわれる銀色の髪に海のように深い青い色を持っている。嫌でも目を引く整いすぎた容姿は着ている礼装によってさらに際立っていた。こちらはこちらで近づきがたい雰囲気を出していた。

「レイスさん。この後王様に会って、多少会話して、そのあと適当に時間をつぶしたら帰れるといいますし、夕方には、出れますよね？」

「よほど困ったことがない限りは夕方にならないうちに帰れると思うよ」

そう言ってレイスは二人を案内する執事に話を振る。彼はレイスの言葉を肯定した。そして、ナギたちを対象として王宮の説明を始めた。

「勝手に行動されることはないと思いますが、もしも迷われたりしたら……後ろのほうに高い塔がございます。それは一応王宮からならばどこからでも見ることができますのでそちらへ行ってくださいませ。先ほどの門に出ますからそこの門番に声をかけていただきま

したらお迎えに参ります」
　執事は他にも、ここには入らないように、お手洗いはその辺を歩くメイドにでも聞いてもらえればわかると王宮内の説明を行っていく。王宮は広い。入るな、と言われたところでも迷った末に入ってしまうかもしれないが、そういう場所にはたいてい見張りがついていたので問題はないようだった。
　王宮は左右対称に、細長く作られている。今、ナギたちが歩いているのはその中央であり、右翼、左翼と呼ばれるところへの出入りは基本的に自由のようだ。代わりに、今いる中央棟の上へは行ってはいけないと言われた。
　右翼の方には今客が滞在しているて、左翼には王族の皆様の部屋がある。左翼の一階は城の食堂があったりと城で働いている人のための設備があるそうだ。
「そしてこの先が王宮へのお客様と王が会われる、謁見の間でございます」
　奥まったところに見える穴のようなところから向こうが開けているのがわかる。中央棟を抜け、その奥にある少し小さな建物。
　必要最低限の物しか置いていないと言わんばかりの質素な部屋に、この国の現国王、ナディアスがいた。
「エンテンシア男爵だね」
「はい」
「それにそちらの二人は……」
「今、私の邸に滞在している者たちです」
「わかった」
　ナディアスは三人に簡単な歓迎の言葉を述べた。レイスはやや緊張した面持ちで、ナギは優雅に笑顔を浮かべながら、ニミウスはガチガチに緊張しながら三者三様の礼をしてみせた。
　緊張しなくていいとは言うがそれは無理な話である。
　皇国の皇帝は見るからにそれらしい威圧感があった。言うなれば上からの力で、ナディアスは違う。周りから染み込んでくるような、

よくわからない威圧感であった。というのは救世主の中では相手の力を読むのに長けたジェフの言っていたことだが、三人は知るはずはない。

「本当に緊張しなくてもいいんだ。これは公式なものではない。そうでなければもっと大層な格好をしているよ」

ナディアスの格好は確かに品はいいものを使っているようだが地味なものだった。藍色のズボンをはき、肌着と見間違えてしまいそうな白い半袖の服を着ている彼はここが王宮でなかったら普通に町にすむ普通の人にしか見えなかった。

彼はさっさと話を終わらせた。今度の大会への意気込み。そもそもなぜ参加しようと思ったのか。さらには二人の出会いについてまで聞いてきた。

「王様。それは言いたくないことですから」

こんなところでも余裕たっぷりなナギが優雅に微笑んではっきり拒絶しなかったなら、ニミウスは洗いざらい喋ってしまったことだろう。

「やれやれ。東の姫君は手厳しい」

東の姫君と、ナギのことをそう称した。ナギは一瞬だけその笑顔を崩したが家出をするまでに叩き込まれた教えによりすぐさま元の笑顔に戻った。

「エンテンシア男爵。この後もしばらく話があるからここに残ってくれ」

「はい」

「君ら二人は好きにしていてくれて構わない。ただし、この部屋からは出ていくこと。それと進入禁止の所には入っていかないこと。これだけは守ってくれ」

そう言われてさっさと追い出された二人は適当に歩き始めた。まずは中央棟に戻る。そして、今は右翼の方で王子が客人から剣の稽古をつけてもらっていると聞いた二人は迷わず右翼に行くことを決めた。

王宮の敷地は広い。右翼の方は客をもてなすためも兼ねて、綺麗に手入れされた庭園が広がっている。貴族の婦人たちが集まり、茶会を開くための東屋がたてられている。庭園や東屋、それに景観のためにあるらしいちょっとした池と小川を除いてもなお余るその庭で剣の稽古は行われていた。

がっしりとした体に木剣を持った男は救世主一行のジェフ・ゴーディ。対するのは話によればこの国の王子だろう。ひょろりとした細身の体を軽やかに動かし、攻撃。ジェフの動きにあわせるかのように防御し、最低限のステップで回避をしてみせる。強いというよりは巧いという方が正しいような動きだった。

3―12

こいつはどの兵士よりも巧い。より強い力を持つことをよしとするジェフがそう思うくらいに彼は巧かった。

例えば剣の振るい方。そこまでの力はもともと持ち合わせてはいないとは言っていた。けれども、その剣は威力よりも速さと手数に重きをおいている。彼の得物が突きを主な攻撃とする細身な物だということがよくわかる。

例えば体の使い方。身長はジェフよりも大きい。おそらくは一マテと八十センテは越えているだろう。その体はさほど筋肉がついているようには見えず、ひょろりとした細身の体である。手足が長く、扱いがたそうなその体を彼は余分な力を入れず、無駄なく使いきっている。

ただただ感心しかできないがジェフの方が強い。互いの動きはゆっくりとペースを落とし、止まった。

「ありがとうございました。やっぱり貴方は強いですね」

「いや。お前さんもかなり強いぜ。魔物を狩りに行きゃあ並みのやつらよりはよほどうまく戦える。あ、いや……戦えますよ」

相手が昨日まで相手をしていたこの国の新米兵士とは違い、確かな手応えのある相手だったのでちょっとばかし稽古に飽きてきていたジェフは大満足である。ついつい稽古に夢中になってしまったので相手が王子であることを忘れていた。あわてて敬語に直す。

そんなジェフに彼は敬語でなくていいという。

「後から直す方が面倒だと思いますし」

と言われては仕方ない。むしろ気が楽になったとジェフは豪快に笑った。相手もつられたように笑う。

「お前さえよけりゃ仲間にできないか聞いてみるが、どうだ?」

ジェフの言葉に裏はある。もともと言葉に裏表のない性分ではあるのだが、彼にしては遠回りに彼の実力を認めたことへの表れだっ

た。
　しかし彼は悩む間もなくその誘いを断った。それだけ鍛えているのにもったいないとジェフは言ったが、彼は首を振った。
「僕は敵と戦うために剣の腕を磨いた訳ではありません。大切な人を守るために剣の腕を磨いたのです」
　それを聞いたジェフはしばらく考えた後に言った。
「我儘だな」
「ええ。我儘ですね。でも僕はそれでいいんですよ」
　そばかすが張りついた人懐こい笑みで王子はそう答えた。
　ジェフはもったいないと思ったが本人にその気がないなら仕方がないと諦める。ふと王宮の方を見ればそこには一組の男女がこちらを見ているのに気づいた。どこかの貴族が面白半分に見ているのだろうと、そう思った。
　王子もそちらに気づいたが、その反応はジェフとは異なるものだった。
「すいません。僕はこれで」
　と言うとあっという間にその二人組のところへ走っていった。

◆◇◆◇◆◇◆

「あれがこの国の王子です。名前はレイア・カロン・フンデルト。もう一人王女もいます。彼の方が兄なんですよ」
　稽古を見ながらナギはニミウスにそう言った。相手の方は誰か知らないがおそらく今滞在しているという客じゃないだろうかとも推測した。
　しばらくして稽古が終わり、二人がこちらに気づいた。王子の方がこちらへ向かってくるのを見たナギがどこかに隠れようとしたがそんな場所はなかった。
「やっぱりナギだ」
　透けるような金髪に、そばかすのある顔。垂れ目でにっこりより

もへにゃという音が似合うような笑い方は人に安らぎを与えるようだった。

「どうしてこんなところにいるの？　家を出たって話は聞いたけど（入手した）なにしたのさ。それに、そこの人はなんなの？」

彼は睨むようにニミウスを見た。垂れ目のせいで怖くはないが、敵視されたのはわかった。

「こちらはニミウスさん。この人のおかげで人の常識を学べましたし、旅も大分楽になったんです」

「よろしく」

ナギがその敵意を流すようにしてニミウスの紹介をする。ニミウスはその意図が読めたので笑顔で挨拶をして手を差し出した。レイアは納得しがたそうな顔でその手を握り返した。

「はじめまして。僕はレイア・カロン・フンベルト。ライアと呼んでください。ナギの婚約者です」

「ちょっと！！」

ニミウスにとっては初耳であるその情報にニミウスはレイアが自分に向ける敵意の意味を理解した。

要はやきもちなのだろう。そりゃあ自分の好きな人の横に見知らぬ男がいれば敵意も抱きたくなるのかもしれない。今まで恋人のような存在がいなかったニミウスはそう思った。

「愛されてるんだな」

「そんなこと言わないでください。恥ずかしい……」

ナギの言葉はどちらに向けているのかよくわからない。おそらく両方なのだろう。顔を真っ赤にして東屋へと二人を急かした。

ナギは見えている東屋へとかけていく。レイアはその辺にいたメイドにお茶の用意を頼むとニミウスと並んで歩き出した。

「ナギはああ言ってたけど、本当にナギに変なことしてないよね」

「してないしてない」

「今後する気も」

「ないない」

「ならいいや。僕は君も歓迎するよ、ニミウス君」
二人は改めて手を握りあった。東屋につくとそんな二人を不思議そうに見るナギがいたが、ナギが何かを言う前に仕事の早いメイドたちが紅茶と茶菓子を用意してきたため、何も言えなかった。
その後、和やかに流れる時間の間、ナギはずっと顔を真っ赤にしていた。
ニミウスが旅の途中でのナギが忘れ去りたいようなことを次々とレイアに暴露したのだ。はじめは反論したりもしたが今は何も言わず、それでも恥ずかしさに顔を赤くしながらお茶菓子のケーキを口に運ぶ。苦い紅茶に甘いクリームがよくあった。
「あたし、席を外してもいいですか？」
何度目かの頼みはレイアの笑顔によってあっさりと却下される。
そんなナギが顔色を変えたのはレイアが救世主の話を持ち出したあとだった。
「そう言えばさっきまで僕に稽古をつけてくれた人。ジェフさんって言ってね、救世主さんと一緒にヴァダリアからこっちに来たんだって」
その時のナギの反応はすごいものだった。それまで真っ赤だった顔から一気に血の気が引いていったのだから。
「皆さんとても強いんだけどね。救世主さんはまだまだ成長途中って感じかな……。ナギ？」
カタカタと震えだした音を聞いてレイアがナギの異変に気づいた。心配する声を無視しナギは声を震わせた。
「ライア……。救世主、と言いましたか？」
「うん。ねえ大丈夫？　真っ青だよ」
「名前、その方の名前は……」
「メグミ・サノって名乗ってたけど……。ナギ！！」
ナギは気を失い椅子から落ちる。そばにひかえていたメイドが慌てるがレイアがそれを押さえた。
「ニミウス。ナギを抱えて僕についてきて。僕の部屋に案内するよ」

3―13

虹牙とメグミ。二人は静かに会話をしている。ジェフはレイアの剣の稽古に、あとの三人は王妃と王女から誘われてどこかへ行っている。ジェフはその誘いから逃げ出したのだった。

そして、この二人は何をしているのか――。

◆◇◆◇◆◇◆

レイアの部屋。少し散らかっている部屋のベッドにナギは寝かされていた。

「ほんとにナギは……。一体何をしてきたんだろうね」

レイアのため息にニミウスは応えない。突然の出来事にまだ追いつけていないのだ。

ぼんやりとこの部屋を眺める。ここは寝室で、隣にはレイアの勉強部屋があるらしい。この部屋にいるのは、レイア、ニミウス、そしてレイアの世話役という中年の男の三人だけだ。

「俺も詳しくは知らない。ただ……」

「ただ？」

「ナギは出会った時に皇国の兵に追われていたんだ。家出だとも、言っていた」

「そうかい……」

レイアは中年の男に指示を出す。その内容に首をかしげるニミウスに対し男は重々しく頷いて見せた。

今の指示について聞くとレイアは今後の保険だよ、と笑って見せた。どうしてレイアが出ていくかもしれないのか、ニミウスには全く分からなかった。そんな時にナギが目を覚ました。寝たまま部屋を見てレイアの部屋だと気付いたのかあわてて起き上がった。

「迷惑をかけてすいません」

「いいよ。ナギなら気にしないよ」
少しばかり甘い空間を作っている二人をニミウスは眺める。男がいつの間にか用意してくれた甘めの紅茶を飲んで落ち着いたナギが改めて迷惑をかけてすまないと謝った。
「でも、どうしてここに？　介抱だけでしたら先ほどのところでもよかったのでは？」
「今、ここに虹牙君が来ていると言っても？」
あからさまにナギは身を引いた。レイアにここにはいないと言われ、それを理解してから大きく息を吐いた。
虹牙がだれかわからないようであるニミウスにレイアが簡単に説明する。彼はナギの親族なんだよ、と。家出しているナギにとっては追っ手に等しいのだろう。ナギはなぜ虹牙がここにいるのかは聞こうとしなかった。ナギとしては聞いてしまうことでここにいるということを意識したくなかったのだ。レイアも意図的に話題を変えてくれて、ようやくナギが落ち着いてきたときに部屋に来客が訪れた。
「出てくれ」
「かしこまりました」
その時に扉がほんの少しだけあけられたのは意図的なものだったのだろうか。おかげで来客の声が聞こえてくる。姿は見えないがその声は威圧的なものが含まれているようだった。
どこから聞いてきたのか、この部屋に女がいるだろう。いるなら出せ。と言っているのが聞こえた。
対応に出ている男はレイアから誰も入れるなと言われていると言って追い返そうとするが向こうもなかなかに粘ってくる。ナギが扉越しの威圧におされたのか震えている。
「ニミウス君。今のうちに窓の外のテラスに」
ナギを立たせて窓を開け、二人を部屋から追い出す。
レイアが窓を閉めようとするのと、扉の向こうの人物が怒鳴ったのはほぼ同時。窓を閉められ、カーテンをかけられたあとナギを見

れば顔に戻った血の気は再びなくなっていた。
「ナギ……」
「今怒鳴ったのが、さっきちょっとだけ話に上がった虹牙です。それにどうやら救世主様までいるみたいですね」
怒鳴り声はこう言っていた。俺はヴァダリアの皇位継承第三位である虹牙だぞ。俺が入れろと言っているのだから入れろ。
なんとも自分勝手なその発言を聞いたナギは震える体をニミウスに寄せて今にも泣きそうなほど声を震わせて、それでも気丈に振る舞おうとしていた。
一度は聞こえなくなった声がまた聞こえてきた。どうやら部屋に入ってきたようだった。

◆◇◆◇◆◇◆

部屋に入った虹牙は部屋をくまなく調べた。天気がいいのに閉まっているカーテンはいかにもな怪しさがあるが、そちらは後回しだった。この部屋は三階にある。彼が探している人間は風魔法で浮いて移動できるはずだが、魔法発動のの成否はそのときの精神状態による。今はそんなことができる状態ではないだろう。
実際、ナギは今そんなことすら思いついていないくらい気が動転している。そして虹牙はそんなナギを追いつめるように意識してか、ゆっくりとしっかりと部屋を調べてまわった。一緒に来ている救世主、メグミはそれを見ているだけである。
「だいたいあなたが探している人が今この国にいるのかい？」
「ふん。貴様が娘のことをナギと呼んだ。それだけで十分すぎる事実だ」
「でもこの部屋にはいないはずだけど」
「確かに、部屋にはいないな。だが――」
虹牙は窓に近づく。カーテンの向こうのテラスにはナギとニミウスがいる。そう思うと自然と嫌な汗が滲み出てくるのがレイアには

よくわかった。
「例えば、こんなカーテンの向こうなんかにいると思うが、なっ」
勢いよく開けられたカーテンの向こうにナギたちはいなかった、なんてことはなく二人はあっさり発見される。虹牙は窓を開け、震えるナギをニミウスから引き離し、部屋の中へと引きずり込んでいく。
「離してください！！　あたしは戻る気なんてありません」
明らかに怯え、それでも反抗するナギの意思も虚しくどんどんニミウスから離されていくナギ。しかし、捕まれたその手をレイアがひきとめた。
すがるように、煙たそうに、二種類の感情をぶつけられ、その目から今にも涙が溢れ出さんとするナギを見て、さすがだと思う。この状況で自身やニミウスを頼らないことも。でも、それは少し寂しい。
もっと頼ってもいいのに。
「嫌がっているじゃないか。何があったのか知らないけど離しなよ」
「悪いがこれは我々の問題だ。他国の王子が口を出さないでもらおうか」
「それは、できないよ――」
さりげなく手に持っていた愛用の剣を突き出す。鞘に収まっているが威嚇には十分で、虹牙は思わず手の力を緩める。開いている手でまるでさらうようにしてナギを肩に担いで窓へと一目散に走る。風魔術を使えるレイアはテラスからも飛び出して着地。ニミウスもあわてて地面へと降りる。こちらはなるべく衝撃を殺して着地をする。
「追え！！」
虹牙の怒鳴り声に上を見れば、テラスからこちらを見下ろす救世主をナギは確認した。その顔は紛れもない、皇国で別れた彼女。
「どうして、なんで、だって、だって――」
あふれ出た言葉は止まらない。

「あたしは確かにあなたを送ったはずなのに……。なんでメグがここにいるの！！」

その声はか細く、ナギを担いでいるレイアにしか聞き取ることはできなかった。

3―14

「失礼します」
「なにやら騒がしかったみたいだけど」
「虹牙様に見つかりまして」
「なるほどなるほど。ご苦労」
ナディアスがいるのはレイスたちが一番始めに通されたあの部屋。そこにレイアについていた男が入ってくる。
彼は既に情報を得ているナディアスに驚きはしない。彼の目と耳は王宮全体にいるのだから。
あの後、レイアがナギを連れて行ったのを追いかけようとしたのを彼は止めた。時間を稼ぎ、レイアたちが逃げ切れるようにしたのだ。ここがカロン王宮である以上、地の利はレイアにあるのだが、彼は彼の敬愛する主人のために行動したのだった。
「それで、何でわざわざ来た？」
「ライア様より伝言を預かって参りました『僕はナギのところに行きます。他の誰にもそれは言わないでください。特にミナには』というものでございます」
「愛だね。本当にライアはいいやつに育った」
ミナハベールについてはなにも言わない。レイアとは違うということは言わずともわかった。
ナディアスは男を下がらせて一人物思いにふける。レイスはしばらく前に帰っていった。ナギたちがいないことについてはおそらく彼がうまいことやったのだろうと思う。
「それにしても東の姫君は本当に面白い……」
ナディアスはゆっくりと考える。これからのことを。これまでのことを。そして、一歩前進した息子のことを。

◆◇◆◇◆◇◆

ルルは唖然として、帰ってきた客人たちを家へと入れた。
客人がまた猫を拾ってきた。しかも拾われたのはこの国の王子。驚かずにはいられない。さらには客人の一人は王子に担がれてぐったりとしている。息はしているようなので気を失っているのだろうか。
なにも言えなくなっていることをいいことにニミウスはレイアをナギの部屋へと案内する。途中でシズミがニミウスの肩に乗ってきた。そう遠くないところで優華か明華がシズミを探している声が聞こえた。どうやらまた逃げてきたようだ。
「ナギさん！！」
ニミウスたちを見た優明が顔色を変えて駆け寄ってくる。ニミウスはそこで案内を優明に任せた。
「ニミウス君はどうするの？」
「とりあえずルルにナギが目を覚ましたときに食べるものを作ってくれるように頼んでくる」
「でしたら、冷めても飲めるスープにしましょう。ナギさんは皇国の人ですから、私が作りますよ。こんなときにあまり慣れないものを口にするのはよくないでしょうし」
優明の申し出をありがたく受け入れたニミウスはそれなら、自分の部屋で休んでいると伝えて、ナギの隣の部屋に入った。堅苦しいとは言わないがいつもよりも動きにくい服を脱ぎ捨てる。
「何があったのだ」
「虹牙とかいうやつに見つかったみたいだ」
それだけで通じたらしくシズミは黙った。ニミウスはこちらに来てから買った服を着る。先程まで着ていたものよりも動きやすい。
ベッドに転がり薄い暗闇のなか、天井を見上げる。
「なあシズミ」
「なんなのだ」
「ナギって、ひょっとして――」

ニミウスが虹牙の言っていたことをゆっくりと思い出しながらシズミに問いかけようとした言葉はレイアが勢いよく扉を開けて部屋に入ってきたことで遮られた。

優明に部屋から追い出されたと嘆くレイアに何があったのかと聞くと、ドレスで寝かせた方がよい。あなたは女の子が服を脱ぐところにいるつもりですか、と一括されたらしい。さらには、ナギが起きるまで立ち入り禁止とも言われたとも。

慰めの言葉が思い浮かばないニミウスはとりあえずルルに事情を説明しに行こうと話をすり替えることにした。

「ルルもなんでライアがここにいるのか知らないと困るだろ。それに王宮に連絡されてもいいのか？」

「なるほど確かに」

二人が部屋を出たときにシズミも一緒に外に出てくる。一声鳴いて存在をアピールしたあとはナギの部屋の前で丸くなった。どうやらそこにいるつもりのようだ。

「シズミじゃないか」

レイアが驚いたようにそう言った。部屋の前にいても中には入れないのでニミウスのあとについてきたが気になるようで何度か後ろを振り返っていた。

「どうして殿下がここに？」

「こちらの客人に興味を持ってね」

「でしたら先程のナギさんは？」

「ニミウス君と手合わせしてもらおうと思ったら人目があるところは嫌だって言われてね。じゃあどうしようかとなったときに、ここでしようと思いついたんだけど騒ぎだしたからおとなしくさせちゃった。城からはこっそり抜けてきたんだ。だから報告とかしないでね」

ルルを見つけたらこちらが話す前に質問攻めにあい、その質問すべてをレイアが答えきった。当然、嘘も混じっていたが、事実の脚色として混ぜたためか納得はしてもらえたようだった。

その頃にはレイスも帰ってきていて、レイアがいることに驚きはしたものの特に追求はしなかった。

◆◇◆◇◆◇◆

ああ、綺麗な月だなあ。そう思ったナギは体を起こす。月だと思ったそれは二つあり、それがシズミの目だと気づくまでにしばらく時間がかかった。

「どうかした――」

「虹牙に会ったと聞いたのだ」

心臓が飛びはねた。

「でも、それくらいで気を失うくらいの覚悟で出てきたはずではないのだ。ナギ」

呼吸が一気に早くなる。目覚めたあとの気だるさがあっという間に消え去り、代わりにやって来たのは意識が落ちる前に見た、懐かしい顔。

「いったい、何があったのだ？」

シズミはナギを優しく抱き寄せる。ボサボサの髪に隠れた金の目が光っている。

ナギは声がなるべく外に漏れないようにシズミの胸に顔を埋めた。ナギが家を出るまでの過程をすべて知っているシズミはそれ以上はなにも言わなかった。

部屋にはナギが押し殺す泣き声だけが音として存在していた。

◆◇◆◇◆◇◆

王宮。虹牙は廊下を歩きながら、何かを考えている。

王宮の一室でミナハベールは苛立ちをぶつける。

そして――。どこかで誰かが笑う。

「まもなく大会が始まる。大会が終わるとき、それがこの国の新た

なる始まりだ！！」

3－15

「それではニミウスさん、いきますよ！！」

ナギは集中のために目を閉じた。

場所はミルフィアのトレーニング広場。ナギとニミウスの二人はここで、目の前に迫った大会に向けての特訓を行っていた。大会直前ということもあり、いくつものグループが広場に集まっていて、動きを確認したり剣を交わらせたりと調整を行っている。

そんな彼らはナギたちのことをちらちらと窺うように見ている。大会の試合表が発表されたときから二人は注目の的だったのだ。

試合に参加するにあたり、ミルフィアは他チームへの偵察を禁止したりはしていない。むしろ奨励しているくらいである。戦いにおける事前知識がどれだけ大事なのかを知っているからだ。だから、ミルフィアは問われたらそのチームのことを包み隠さず教える。そうやって互いに対策を練るのもまた大会の一部であるからだ。

しかし、いつもなら名の知れたチーム、それなりに功績のあるチームががエントリーしてくる大会に無名の、功績もないチームがエントリーした。言わずもがな、ナギたちのことである。

今、ここにいる人たちはナギたちの実力を知ろうと二人を窺っている。

ナギの体がふっと浮き上がった。集中を終えたのかナギは目を開けてはにかんだ。

「やっぱりこの杖はしっくりきますね。『纏い』だってできちゃいました」

「今までできなかったのか」

二人はそんな周りの視線を気にすることなく会話する。

『纏い』とは魔法を使う技術の中では中級に分類される。そもそも魔法を使うには魔力が必要となる。しかし、魔力を持っているだけでは魔法は発動しない。魔力の質を変えて、空気中に存在する魔

属粒子というものに働きかける必要がある。この時、魔力の質にあわせて魔属粒子が変化し、それが魔法として発動される。属性というのは、魔力の質を変えられる幅のことを言うのだ。

「『纏い』は結構難しいんですよ。魔力をとどめるのがですね……」

魔力は放出するものでありとどめるものではない。『纏い』は質を変えた魔力を自分の周りにとどめておく技術なのだ。今ナギが纏っているのは普段からよく使う風だ。ちなみに基本の四属性は纏うことで発生する効果がある。風を纏えば素早くなり、水を纏えば回復速度が上がる。炎なら攻撃力が、土なら防御力が上がる。だから使えて損はない。

もともと、魔法が得意だと言っていたナギでも短時間での習得には難しいものがある。しかし優秀な杖の力により、なんとかできるようになった。

「これなら普通に詠唱した方が早いと思います」

「馬鹿いうな。ヴァダリアで俺の追手のやつらに発動を先攻されたの忘れたのか？」　ニミウスの追手が使っていたのは『纏い』ではなく、『省略』である。詠唱においては長さはあまり変わらないが、前者は属性の宣言を、後者は発動する形の宣言を省くことができる。そして、形を宣言する方が発動させやすいことから『纏い』の方が簡単とされている。

ナギはヴァダリアでのことを思い出しているのか渋い顔をした。

「とりあえず、あと三日もたたないうちに『省略』をマスターしろと言われなかっただけよかったとしますよ」

ちなみにではあるが、ニミウスはすでに『纏い』は習得している。訓練を始めたときに、「じゃあニミウスさんは？」と聞かれてナギに披露した。するとナギが落ち込んでしばらく訓練にならなかったのだった。

「とりあえず、その状態で魔法を発動させてみろよ」

「白羽で魔法を使うのは初めてですよ。ドキドキします」

初めてのことで緊張しているのかナギの顔の赤みがました。胸に

手をあてて深呼吸を繰り返す。
　ナギが今纏っているのは風の魔力であり、これから行うものはそよ風を生み出す魔法。
「『形成すは小波』」
　吹き荒れた突風。一瞬のことだったが、突然のことに慌てる周りからの声を聞きながらナギは首を傾げた。自分は確かにそよ風、小さな波を想像した。しかし、発生したのは突風だった。
「ちゃんと小波って言ってたよな？」
　ニミウスの質問に無言で頷き、ナギは手に握る白羽を見た。どうやら――。
「杖で魔法使いは変わるというがここまで変わるもんなのだな」
　ニミウスの感想に肯定せざるを得ない。しかし、杖ひとつでここまで変わるとは魔法を使ったナギ自身も思ってもいなかった。
「さすが白羽です！！」
（確かに、ユグドラシルの樹でできているだけのことはある）
　ニミウスがそう考える横でナギは嬉しそうにはしゃぐ。しかし、魔法はただ威力が大きければいいものではなく、また、風属性だけで『纏い』が成功しても意味がない。
　仲間を巻き込んだりするのは論外であるし、纏う属性を素早く変えることができなければ『纏い』を活かしきれない。
「じゃあ、他の属性もとりあえず纏えるようになれ。魔法の威力は追々考えよう」
「無理ですって。あたしがあといくつの属性を使えるのかわかってるんですか？」
「三つだろ？　その杖があるんだから大丈夫だろ」
　ニミウスさんのいじわる。そういいながらもまじめに『纏い』の習得に取り組むナギ。対するニミウスは暇そうに腰を下ろした。ナギとの近接戦闘はナギの実力的に訓練にはならない。レイアはミルフィアに登録はしているが、今日はルルにこき使われているため、ここにはいない。そしてナギが気兼ねせず魔法を使うことができる

場所なんて限られてしまう。
「暇そうですね」
暇だと声にする前に逆に声をかけられた。相手は今の自分と同じ目の高さ。今のニミウスと同じように腰を下ろしている。ニミウスに合わせたのだろうか。
彼女は流れるような金髪を耳にかけなおしてはにかんだ。と言っても先ほどのナギのにぱっという感じとは違いふわっ、という形容詞の方がよく似合うはにかみ方だ。
「まあ、暇だね」
初対面の美人に対してニミウスは特に気兼ねすることなく返事をした。彼女の方は逆に顔を真っ赤にしている。優雅な感じは損なわれていないが、大人っぽさが少しだけ抜けた気がした。ナギがちらっとこっちを見てきた。その目がまたか、と言っているように感じた。ニミウスはそれを気にはしなかった。
なぜ話しかけてきたのかと聞けば、彼女たちのチームの人と手合せしてほしいとのことだった。身もふたもなく戦力調査です、と言われ、もともと退屈していたのだからとその誘いを受け入れたニミウスはナギに移動するようにと言った。
「美人さんの誘いですからねー」
ナギはにやにやと笑いながらニミウスについて行った。

3－16（前書き）

相当久しぶりの投稿になりました。
なので今回は簡単にあらすじを書いておきます。

ヴァダリアに召喚された勇者が旅立つ頃、ナギとニミウス。二人の人間がヴァダリアで出会った。二人はどちらも追われる身であり、ミルフィアに登録した後隣国であるカロンを目指す。
たまたま出会った優明、優華、明華とともに首都エリクシナに住むエンテンシア男爵の屋敷でお世話になることになった。特にクエストを受けるでもなく二人は軽い気持ちでミルフィアの大会に参加することにした。
大会直前、ミルフィアの練習場で練習していた二人はある女性に声をかけられた。

このあらすじは次回更新時に消滅すると思います。

3－16

彼女たちはそのチーム名を『蒼空の獅子』と言った。全員が風属性を『纏い』まで使えるのだとも言った。

「普段はこの国の山の方で活動しているんです。あのあたりは魔物が意外と多くいますから、厳しいですけど稼ぎにも腕を磨くにもいい場所なんです」

「本当は皇国の方にいった方が稼ぎがいいのかも知れないけど、俺たちの実力を考えると、なあ？」

「誰かさんが特攻して無駄な怪我を増やしてるからなー」

「言うじゃねーの。いっつも俺の後ろにいるだけのリーベル君」

「お前が特攻したせいで隊列崩れた時のフォローは俺がやってるんだけどねえ、ジノフ」

「やるかあ！！」

「かかってごっ」

自身のチームについて説明を始めた彼女の言葉に割り込んだ二人。そんな喧嘩を始めそうな勢いの『蒼空の獅子』のメンバー二人に雷が落とされた。落とした人物はニミウスに説明していた女性とは別の女性。雰囲気はどことなくナギに似ているような感じがするが、ナギよりも大人の女性である。切れ長の瞳は茶色。

「すまない。このバカどもが迷惑をかけそうになった。ワタシは『蒼空の獅子』で魔術師をしている。リッテナーヴァ・キュイフェだ」

そう言って差し出された手をニミウスは握り返した。リッテナーヴァはすらりと背が高い。それに加えて、中性的な顔立ちとスレンダーな体型。男装の麗人と言うのがしっくりくる。声を聞いてみなければ男性だと思ったかもしれなかった。

「ニミウスです」

ニミウスも名乗り、ナギも名乗る。家名を名乗らなかったことを不思議に思われたようだったが、二人は聞かれないのをいいことに

黙っていた。
『蒼空の獅子』の残りの面子も名乗る。喧嘩を始めようとしていたのがリーベル・ジェクソンとジノフ・アネイス。リーダーはニミウスに声をかけた彼女、エテノーラ・アインライ。以上四名で『蒼空の獅子』のメンバーだそうだ。四人という人数は少ないと思われがちだが別に珍しくはない。むしろ十人を越える人数でチームを組んでいる方が珍しいのだ。
ミルフィアは一つのチームに依頼を独占されることを避けるために、一つのチームが同時に受けることのできる依頼の数に制限をかけている。チーム同士が依頼達成のために組むことはあれど、それらが一つのチームになることはない。一般的に前衛二人、後衛二人、回復役一人の五人チームが基本とされているが、後衛と回復役を兼ねることが多いので四人チームも多い。現在この場にいるチームのほとんどがそういう構成だろう。
「ところでどうしてあたしたちに声を？」
ナギが出した疑問に四人は答えなかった。否、彼らが唖然としているのを見るに言葉が出なかったのだろう。
「あの、あなた方は『黒と銀』ですよね？」
慣れない呼び名ではあったが二人は素直に頷いた。
『黒と銀』というのはエントリーするときに受付の人からチーム名の登録を求められたときにその場で決めたもので、二人の髪の色に由来している。
二人揃って咄嗟に気のきいた名前を思いつけなかったのだから仕方がない。チームメンバーに変更があればチーム名の変更ができるが今は結構気に入っているしメンバーが変わる予定もない。
なんにせよ、この呼び名はナギとニミウス、二人のことを指している。そんな二人を見てジノフが呆れたようにため息をついた。
「ひょっとして、対戦表見てないのか？」
「対戦表？」
ナギが首をかしげる。なにも知らないと言うようなその態度にリ

ーベルが大笑いした。何がおかしいのかを聞くよりも先にリッテナーヴァが教えてくれた。

彼らがナギたちと一回戦に戦うチームなのだそうだ。

「対戦表はミルフィアの掲示板に貼ってありますから見ておくといいですよ」

笑いをこらえるリーベルをたしなめながらエテノーラが教えてくれた。エテノーラは初戦の相手が自分たちであることも二人に教えてくれた。

「それで、あなた方の腕前を知りたくて声をかけたんです」

「でもよ、遠目に見てたけどお前ら絶対弱いだろ。大会直前に纏いの練習してるやつなんて初めて見た。わざわざ手合せを願い出る必要なんてなかったんじゃないの？　ノーラ」

今のはさすがに言い過ぎだと判断したのか迷わずジノフがリーベルの頭をたたいた。リーベルの方はなんでそんなことをされたのかわからなかったのか頭を抱えている。

ナギはその言葉にむっとしたが何も言い返さず、強く杖を握りしめた。

はじめはお金を手に入れるつもりだったけれど、それはエントリーしたその日にルルに嫌になるくらいに説明してとんでもないことをしてしまったと思ったのだ。エントリーしているのは星三（トリプル）以上ばかり。たまに星二（ダブル）も出るそうだがそういう時は大会で一定数勝利することをランクアップの条件にしてある依頼を受けるときだけだそうだ。

ここ数日付き合ってもらっていたがニミウスは強いことをナギは知っている。武術は当然だが魔法の使い方も自分以上。それに周りにいる人たちもだ。魔法と武術、どちらかが劣ったとしてもどちらもできる人ばかりだ。リーベルの言葉はそれを自覚していたナギにとってはつらい言葉だった。

一方、ニミウスの方は特に何も思わなかった。自分たち、否、ナギが弱いことなんて最初からわかりきっている。自分はまだいい。

この辺に今集まっている人くらいのレベルには達しているつもりだから、どうでもよかった。
　でも、今、努力しているナギを侮辱するような発言は許せなかった。それは昔、自分の師匠にきつく言われたことでもあった。
「そうか。そうだよなー」
　ニミウスの軽い返事を聞き、それが不快感の表れだと気付いたエテノーラがあわてて謝る。今のは全面的にリーベルに非があるのは誰に見ても明らかだった。
「す、すみません！！　私の方からもきつく叱っておきます」
「少なくともあんたらには勝つよ。絶対に負けたくなくなった。試合いつだっけ？　あ、いいや。上で聞くし、行くぞナギ」
「え、あの。え？」
　もともと持ってきていた荷物は自身の武器だけだったので二人はあっという間に『蒼空の獅子』のメンバーから離れていく。
　残されたエテノーラはおろおろし、ジノフは面白そうにかつ挑発的に笑い、リーベルはまだたたかれた理由を考えていた。
　リッテナーヴァは笑いをこらえているような微妙な真顔をしながらエテノーラの肩をたたいた。
「いつもいつも、大変だな……」
「それもこれも、あなたのせいじゃないですか！！　リーベル！！」
「ええ！？　俺？」
「まーまー、ノーラ。あいつらが俺らに勝てるとは思えないんだから気にしないでおこうぜ、な？」

3―17

エテノーラ・アインライは面食いである。面食いでない場合は運命的な出会いに、運命的に恋したい夢見る女性である。しかし本人にその自覚はない。

だからきっと今回も恋に落ちたのだろう、と幼少のころからの友人であるリッテナーヴァ・キュイフェはそう確信している。なにしろ美形であったし、初戦の相手というエテノーラにとってはまさに運命的なものだろう。

そんなエテノーラの心の内を知ってか知らずか。……リーベルは気づいていない素の発言だったのだろうが、間違いなくわかっているジノフは楽しそうに笑っている。まあいつものことだが。

エテノーラは面食いなのだ。しかしそれに輪をかけて人見知りする。正確には声をかける勇気がないのだ。声をかけれずに逃した回数数知れず。声をかけることができたもののそこから発展できずに始まることなく終わっていた回数は数えることができるほどしかない。

どうなるかはわからないが、エテノーラにはあまり引きずってほしくない。もうすぐ大会が始まるし、初戦は彼らだ。勝ち数で本選に進めるリーグ式ではあるがリッテナーヴァたちは勝ちに来ているのだ。いかにも勝てそうなあの二人には勝っておきたい。間違ってもエテノーラが引きずることで支障をきたすのは避けたい。

「とりあえずは……ジノフ！！」

「ん、わかったー。リーベル、行くぞ。たしか大会に向けて手持ちの道具の確認と補充したいって言ってただろ？　行こーぜ」

この状況を楽しんで笑ってはいたものの、そこは付き合いだけは長いジノフは言葉を交わさなくてもリッテナーヴァの意図を理解する。有無を言わさずリーベルを引きずって行った。

残ったリッテナーヴァは泣き出したエテノーラを宿屋まで引っ張

っていった。
「全く世話の焼ける……」

◆◇◆◇◆◇◆

「で、どうやって勝とうっていうんですか？」
場所はエンテンシア男爵邸の庭。二人のことを興味深そうに見ている優華と明華をレイアがあやしている。
「ナギの属性ならとりあえず雷と氷の『纏い』は完成させろよ」
そのあと、ニミウスの指示はナギを驚かせるには十分すぎるものであり、その様子を見たニミウスは楽しそうに笑ったのだった。

◆◇◆◇◆◇◆

「お父様！！　レイアがいないとはどういうことですか」
時はこの日の朝に戻る。
王宮の一室。王の執務室として機能している部屋で王女のミナハベールが王女らしさのない大声をあげていた。
「兄なのだから呼び捨てで呼んだりしてはいけないよ、ミナ」
王がやんわりと諫めるが王女はそんなことを気にせず、止めることもせずに続ける。
王子の不在を大声で周囲に広めている娘を殴り付けたくなる衝動を王として耐え、それでも王は王女を叱るのでもなく諭すことに尽力する。
「レイアなら今探させている。それよりも、ミナは今年の大会には観戦に行くのかい？」
「ええ、今年は救世主が出ますし、私のことを馬鹿にした皇国のやつがやられるのを見ないと気がすみませんもの」
龍望（ロンホウ）に言われたことを根に持っているミナハベールはそう意気込んだ。

その事についてはすでに報告を受けている王はあきれたが王女の自惚れを少しでもへし折ってくれるならありがたいと何もしていない。

「ならば、警護は誰をつけようか。レイアがいればレイアにしたんだが……救世主様たちは大会に出るし」

この事に憤慨したのは王女だ。自分の腕が一流だと疑ってやまない彼女には護衛がつくということが自分への侮辱だとしか考えられなかった。

「遠慮します。兵士などと一緒に並びたくはないので」

王女はそう言って執務室から出ていった。

思えば一人で外に出たことがない。横には常に兄か、もしくは母や警護の兵、侍女などが自分のそばにいた。

しかも、兵ならともかく兄だけが帯剣を認められていた。

そして、その兄は。王女にとっては、剣も満足に振るえない兄は何かあってもなくても一人で勝手に外に行き、父もそれを黙認している。一応、その行動を監視する者はいるらしいが、兄には供の者がいないのだ。

母に王女たるもの一人で外に出るものではないと言われ納得していたが、それでも思いはむくむくと成長していた。

「レイアのやつばっかり贔屓して、私はいっつも我慢ばかり。お父様の意地悪！！」

悪態をつき歩いていく目的地は少々弱腰な救世主のところだ。

龍望にはああ言われたが、わざわざ自分がそのノルマをこなす必要はないと彼女は思っている。彼女はどこまでも自分の思い通りにすべてが動くと思っている。

あの救世主には自分の意見を押し通せそうだと思ったから、あれから日に何回も訪ねていた。

今日もおそらく剣の稽古だろうと思いつつ、足を進め――――。

「ミナハベール様」

ようとしたら後ろから声をかけられた。苛立ちを抑え完璧な作り

笑いで振り向くことができたのは父と母と教育係による徹底した淑女教育の結果だろう。そこにいたのは初老の男性。着ているものは上質のもので、王宮にいるということは貴族であろう。

見覚えはないが白髪が少し混じっている彼はミナハベールにとある提案をする。

ミナハベールはその提案を受け入れて気分よく歩いていく。とりあえず、救世主のところに行こう。宣戦布告しに行くのだと。

そのあとは天気もいいしお母様とお茶でも飲もうかしら、と考えながら。

◆◇◆◇◆◇◆

「そこはこーやるんですよー」

ミールが実演してみせる。身の軽さはミールには及ばないもののこの中で一番メグミと体格が似ていて戦闘スタイルもメグミにできる範囲だったのがミールだった。

王国の兵士たちとともに訓練をしている。実践、特に多人数との相手を想定した動きをメグミはここで学んでいた。弓の名手であるミールは、矢が切れていた時のことを想定しながら話している。

「本当なら距離を取って、そこから矢を撃って攻撃するんですけど、メグミの場合は魔法ですねー。でもメグミは魔法の発動に時間がかかりますからねー。できれば投擲武器をいくつか持ってそれでけん制しながら魔法を発動させるといいと思いますよー」

「はい」

ちなみに、魔法使いであるハンナなら低威力広範囲即時発動の魔法を使って無理やり離脱してけん制しつつ高威力の魔法を撃つ。龍望ならば水魔法で離脱し、可能な限り逃げる。龍望は治癒術が専門の治癒術士である。治癒術は水魔法に分類される。体内の水（血液）の流れを操ることで治すからだ。

ちなみにジェフなら力に任せて薙ぎ払う。現にそれを今、別のと

ころで実践している。
それを横で見つつミールはジェフのようなまねはしないようにと言った。
「あれができるのは人よりも体が頑丈すぎて力がありすぎるジェフだからですー。本来なら私たちはチームを組んでますから孤立するということはあまりないと思いますが、いざというときのために対処してみましょうー」
ミールが説明する前の形に兵士を散開させる。向かってくる兵士たちにメグミは先ほどのミールの動きを頭に浮かべながらなるべくそれをなぞるようにして動く。
難しいが充実している。メグミはそう思いながらミールからの教えを受ける。彼らに予選はないが、救世主一行として負けるわけにはいかなかった。
ちなみに、魔法専門のハンナと龍望は適当な武器を見繕いに行っていた。ミールの弓は消耗品なので適当でも多く買っておくに越したことはないと頼まれたのだった。

◆◇◆◇◆◇◆

「んー。そろそろ？」
町を歩きながら女は隣の男に声をかける。
「わからんが……大会とやらはもうすぐ始まるらしいから、そう待つ必要はないと思う」
「ふーん。隊長も暇よねえ。わざわざこんな手の込んだことをして」
女がなんのことを指しているのかはわかったが男は何も言わない。
彼は彼で思うところがあるのだろう。彼は隊長のやることを否定するつもりはなく、意見することもなく淡々と自分のやるべきことを行っていた。
今もその一環で女と歩いている。
「これでよしっと。あと何ヵ所？」

「三ヶ所だな」
「こんなまだるっこしいことしなくても私たちが集まればこんな国あっさり潰せるのに、何でこんな物までいるのかしら」
「国をつぶせるところまでは同意しておこう」
そう言って二人は歩き出す。彼らもまた、大会の開始を待ち望んでいるのだった。

◆◇◆◇◆◇◆

ふと、ハンナは足を止めた。しかし、それは少し龍望から遅れる程度の時間だけでありハンナ自身は気のせいだと思ったからだ。
エルフは大気中の魔属粒子の存在、というか流れには人よりも敏感である。しかしハンナ自身はエルフの中ではその手の感受性は低い方だった。だから勘違いだと思ったのだった。もしもこの時、ハンナが知り合いのエルフにこのことを話していたら何か変わっていたかもしれない。
ハンナが足を止めたのは二人の男女がその作業を終えた、ちょうどそのときだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7995i/

一般人以上、勇者未満

2011年12月8日00時50分発行